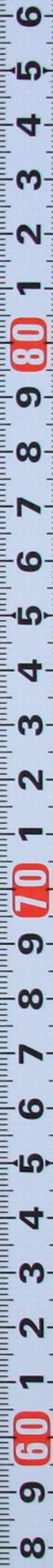




江戸名所圖會

十三



水道橋より外白山のあたり迄の惣名なり昔ハ小石川多き

細流數條あぐれ故にかく号するとも

此地は加州石川郡の白山の神祠鎮坐の故ありんと云傳ふことも詳

なかる小石川の白山權現ハ潮く永祿二年小田原北条家の所領役帳に

櫻井某所領の内は小石川本所といへる地名を加へ島津孫四郎と

云人も此地より法林院松月分の地を領せり菊岡治涼云く

膜橋の下を流る所の水脈小石川御殿の南より傳通院の後柳町と流れて水府の

御藩邸の内を歴水道橋の上の方より神田川に會するその小石川の舊跡ありといへる

田國雜記 小石川といふと

久方此月を宿の源とも隣ありたり石川のふ

一海も海やあつこりこり

涼風や移なつへハ小石河

宗因

芭蕉

鳥丸

光廣

道典

准右

黄葉集 江戸よそりる頃小石川と云所也

石川



傳通院裏門

無量山傳通院

壽經寺と号す小石川牛天神乾の方二町をくりの

あり浄家十八檀林の一員なり本尊阿彌陀如來ハ惠心僧都の作

めり當寺ハ明德年間了譽上人開創せり梵刹より寮舎百餘

御靈屋傳通院殿の御靈屋なり御遺言は依り御尊嚴ハ同所宗慶寺に納め

奉る和漢三才圖會ハ慶長開山堂本堂の右ハ幡宮同所あり天正年間一光

七年壬寅八月二十九日逝去とあり辨財天祠當社ハと白山御殿の地ハ白山水川と

文字ある石の額を得り別當ハ景久院と号り共ハありて女體權現の宮ハ此地より

論とて後ハ稍荷ハ勸請常念佛堂塔中眞珠院新念佛堂同ハ瑞眞院

大黒天寺中福聚院ハあり菊岡治宗云く初井と稱し其土中より此尊像を得り

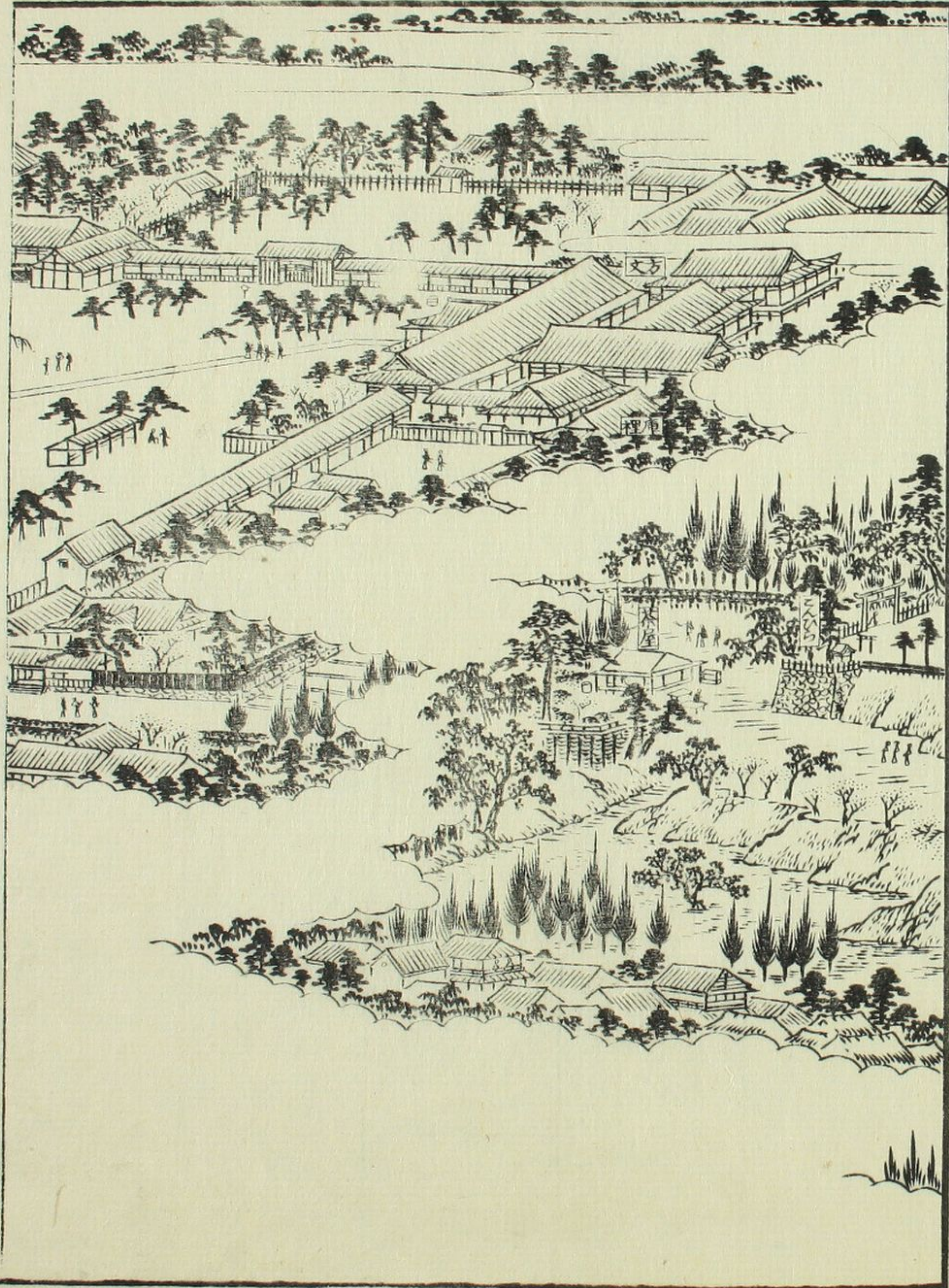
播磨侯の構の内とありとあり極樂水ハ混せり人彼井も又同ハ屋敷の

綴起云く當寺ハ安置の大黒天ハ三國傳來の靈像ハ大黒多門辨天等の三神

一體の尊影なり孝徳天皇の御宇高麗國の大巨録來の土古と云く人本邦に

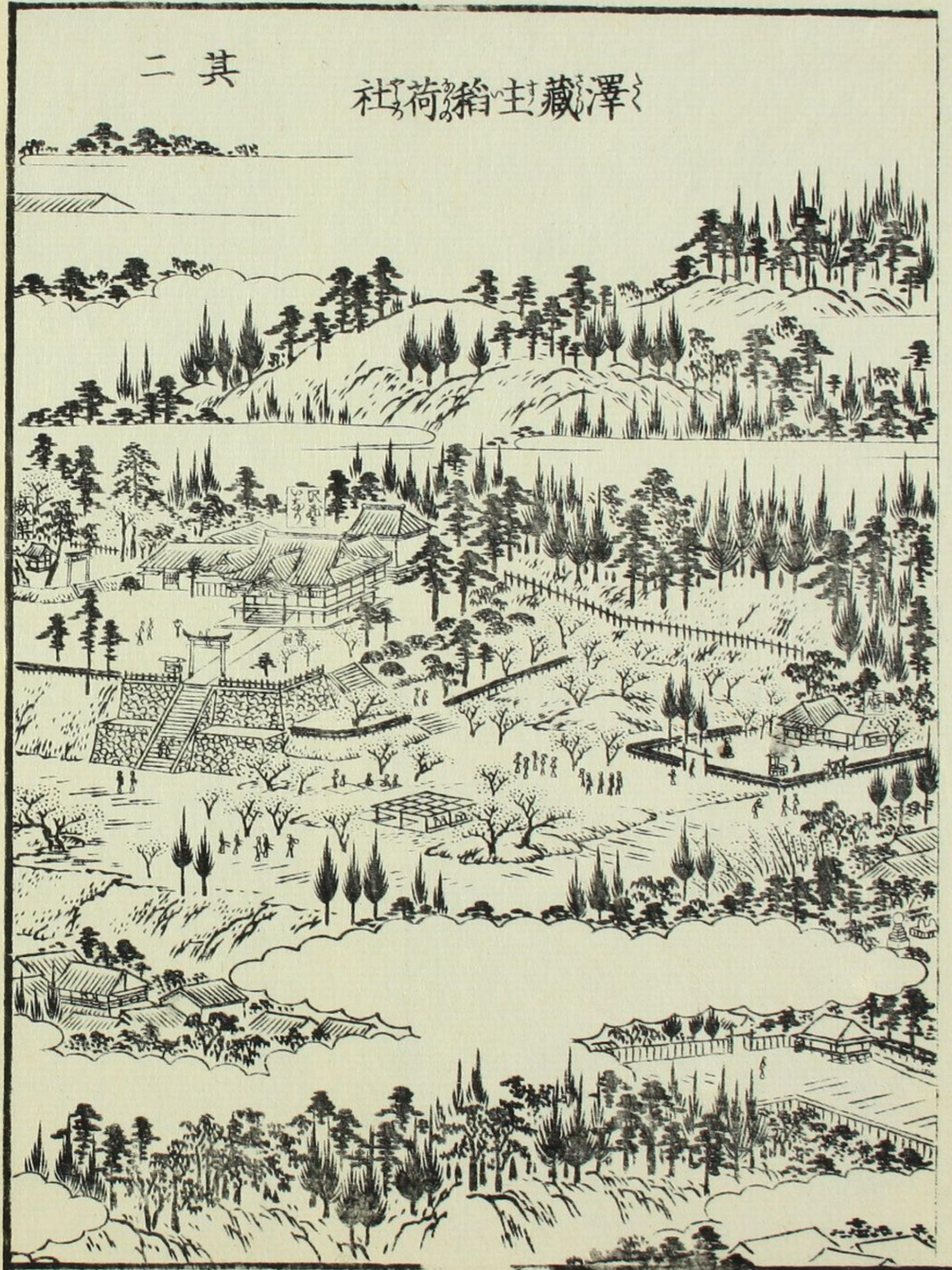
安置せり甲子日恭詣集せり堂の額ハ福聚殿とあり當山第二十三世如空師

の筆經堂正面ハ聖教篇の額をかけ内ハ明本の一代藏經無縁塚享保六年辛丑



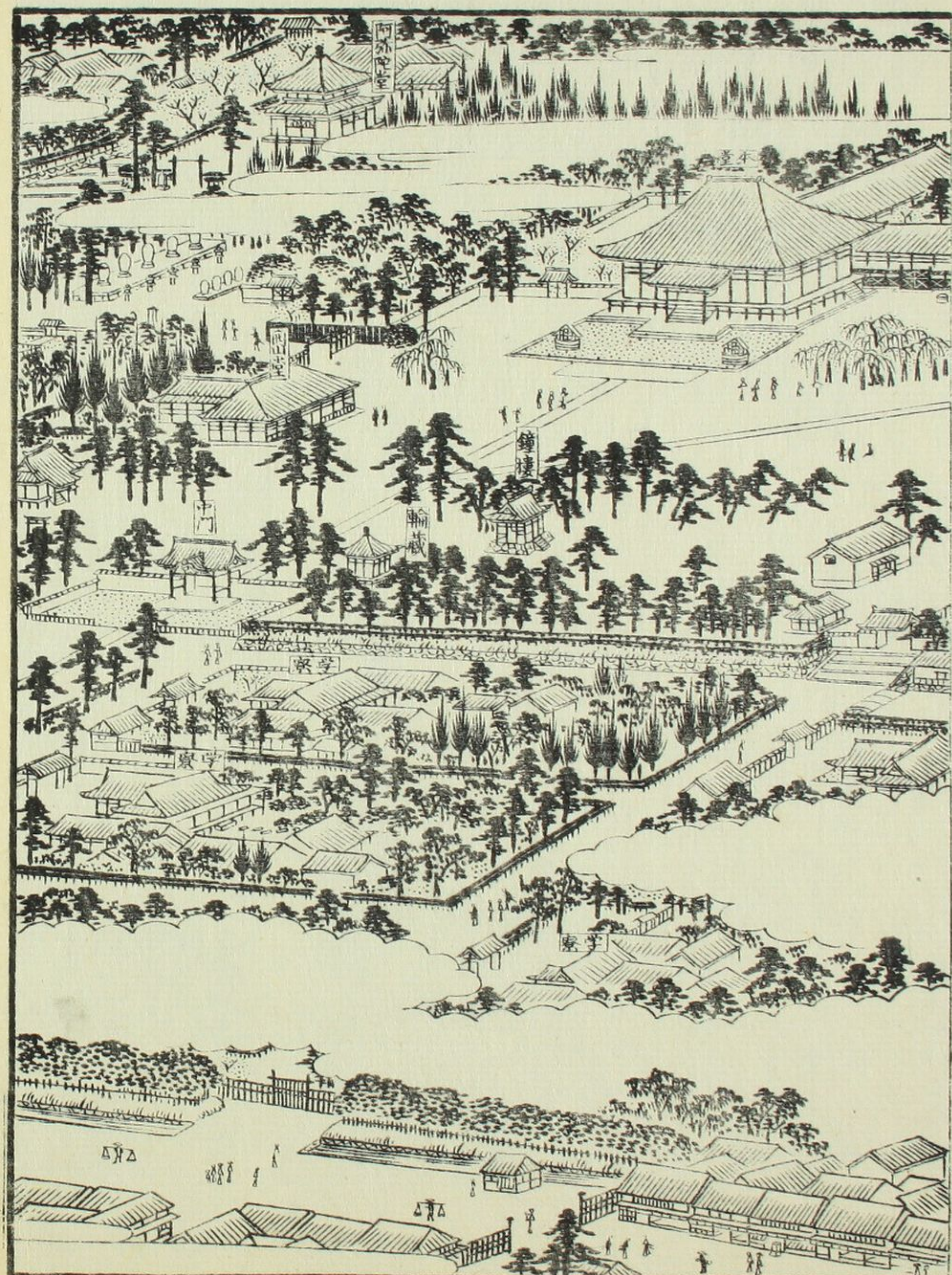
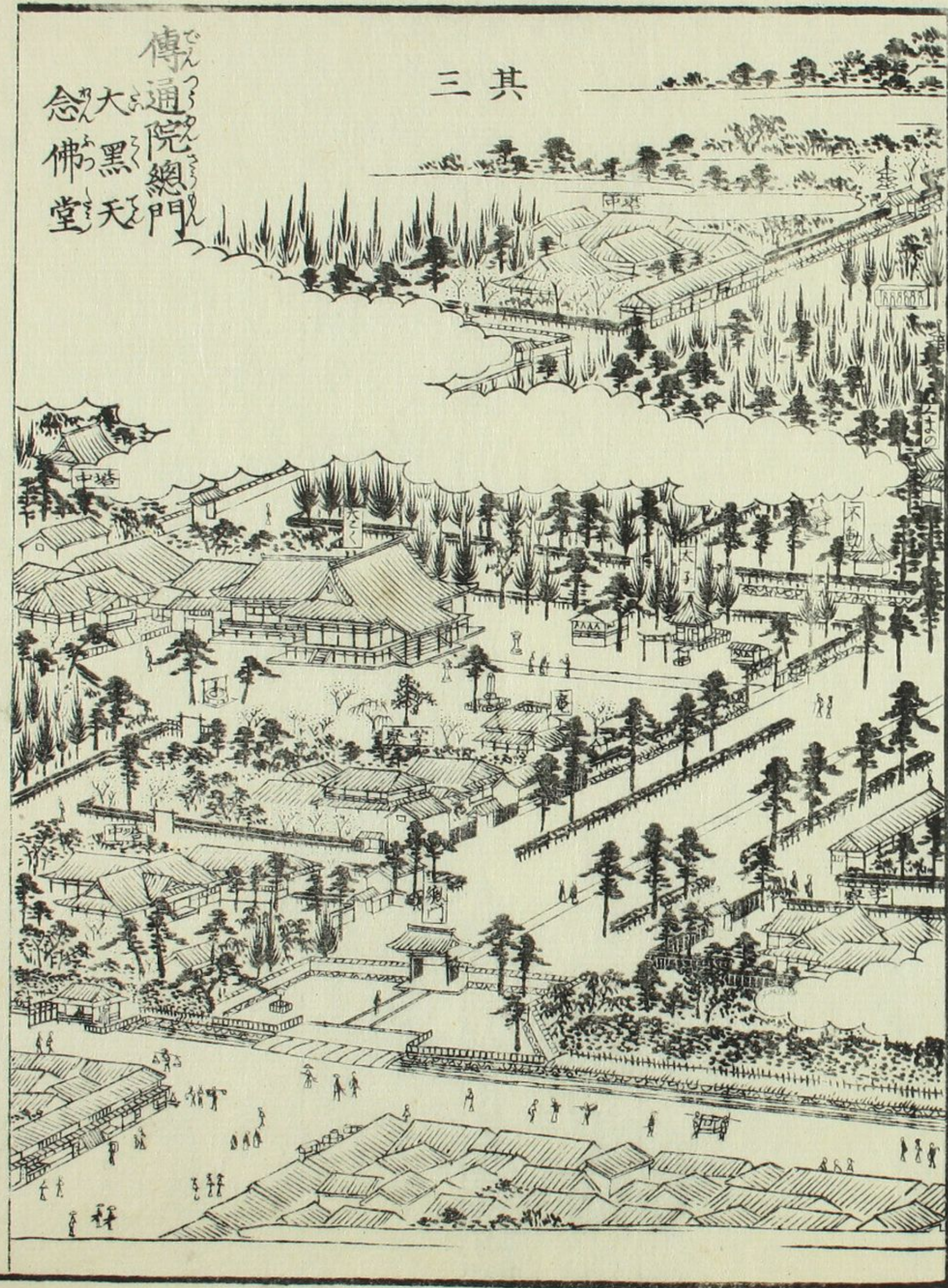
其二

澤藏主翁荷社



傳
念大
佛黑
堂天
院總
門

三其



回録の時當寺に入りて焼死する所の男好三百八十餘人の無聲蛙里談のいふ開山上人勸學のこゝろ墓形なり一堆の塚となり堂を建て稱名の音と絶じむ開山傳曰釋聖罔字ハ酉蓮社了譽と當寺の蛙は声なりと云り開山傳曰釋聖罔字ハ酉蓮社了譽と号を姓ハ源氏常州久慈郡岩瀬の城主佐竹氏の花族白吉志摩守義満の子なり滿或ハ光ニ作る父母若頼明神ヲ祈求シテ曆應四年辛巳正月二十五日誕生モ後凡連ヲ常福寺ト號シテ其誕生の地ハ五歳のとき父義満戦死を采邑を敵の爲に棄つる資財ハ賊の爲に掠めらる故小母子山に隠れ落魄して寒暑を歴る事既ニ三年其後其母此兒をして父の菩提の爲に連の草地山常福寺の了實上人に投して難渋せしむ時年八歳聖天性聰睿中々一聞十悟モ十歳中ニ始テ學を試む罔と号ク天性聰睿中々一聞十悟モ十歳中ニ始テ學を試むる不速ニ通習せり十一歳中ニ博く百家内外の書籍を自見を嘗て蓮勝師に謁して淨土三國傳來譜脈の幽妙を口授心傳を又相州桑原の定慧上人の居を訪ひ坐外ニ寓し修學に竟る白旗一派の宗義咸く傳法授戒一宗を弘む事四五

箇年白旗ハ寂惠上人所住の地の名ナリ以テ宗名トモ道俗化を蒙る者甚多一師年四常陽小

還る時實師齡已ハ八旬則罔師をして常福に主たし年七

又應永二十二年乙未の冬武州小石川の畔に閑地をト年七

一字を營修今の傳通院の権興あり傍に清泉あり今の極樂水則元祖の舊

跡に準擬してその水を吉水と号し師無量山に住を更讎は六年

一夕微疾を憂ふ安然として沐浴淨衣一辭世の偈を書して云く

放行把住知不識日滿八十年 卽今端的輝東山 月西天矣

書畢て端坐合掌一口は宝号を唱へ西へ向ひく奄然として

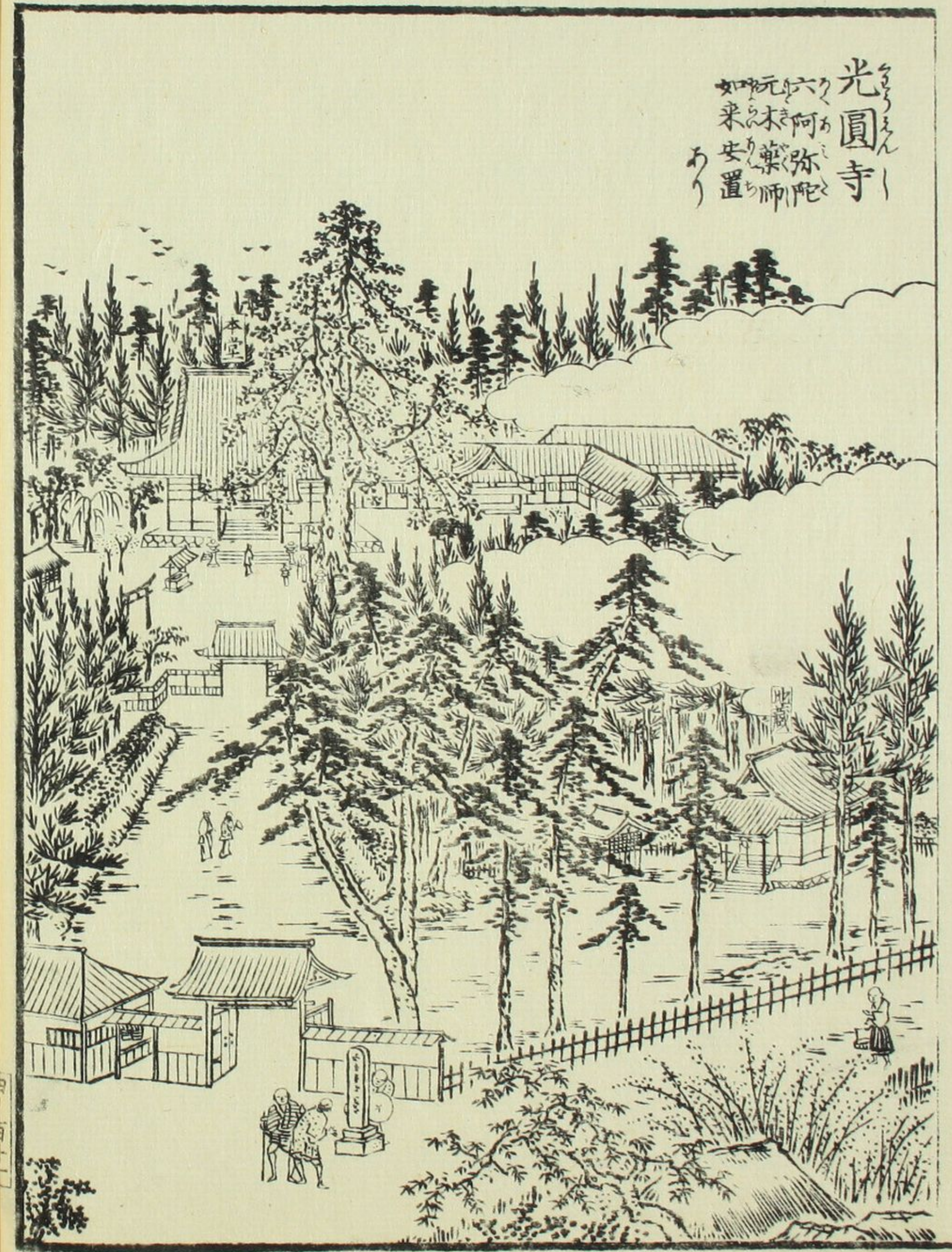
寂を肯は應永二十七年庚子九月二十七日世壽八十師常坐臘七十三

其影的爾として相映此故は世は稱して生平撰述の書ハ牛ハ

汗一文藻ハ煥然として微を窮め妙を極む世攀る師は十徳の

目ありと又和歌ハ頓阿法師は傳受し古今比序注十卷を製せ

光圓寺
 六阿彌陀
 如來安置

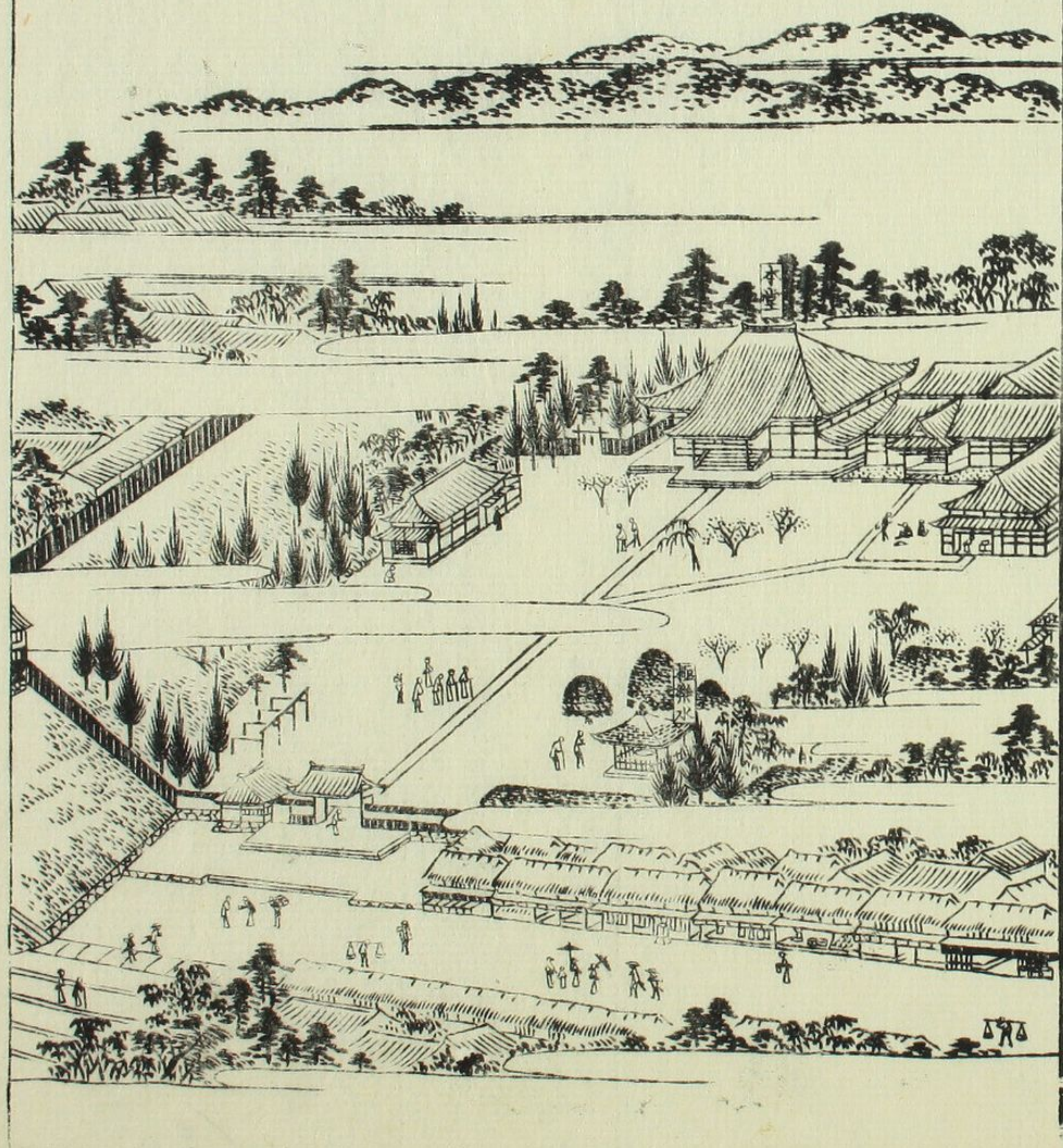


法器豪英ゆく道德ハ終古ハ隆盛ハしく聲ハ宇宙ニ高くと
 謂川べ一緇門の柱礎浄家の棟幹なるをのびり
 要と

當寺ハ浄土宗流の一派なり所化學道の談林なり学業を
 勤むる葦聚螢映雪の功積りて眼を經論の面よりし五重
 相傳の窓前ゆ五念修行の悉地を求め三心具足の床の
 わね住不退轉の法義を期す

中臺山光圓寺 醫王院と号ハ傳通院の西二町あり久保町と
 云ふ所の浄業の精舎なり傳通院の閑山了譽上人當寺を
 興復あり 上古の閑山ハ行基大士とを了譽 本尊阿彌陀如來の像ハ惠心
 僧都の作あり 當寺を中臺山と号するを此地舊
 本木藥師如來 同寺ハ安を本尊ハ行基菩薩の作り一尺の
 立像なり慈母藥師女の脚影を摸し故ハ女體ありとのふ

宗慶寺
極樂水

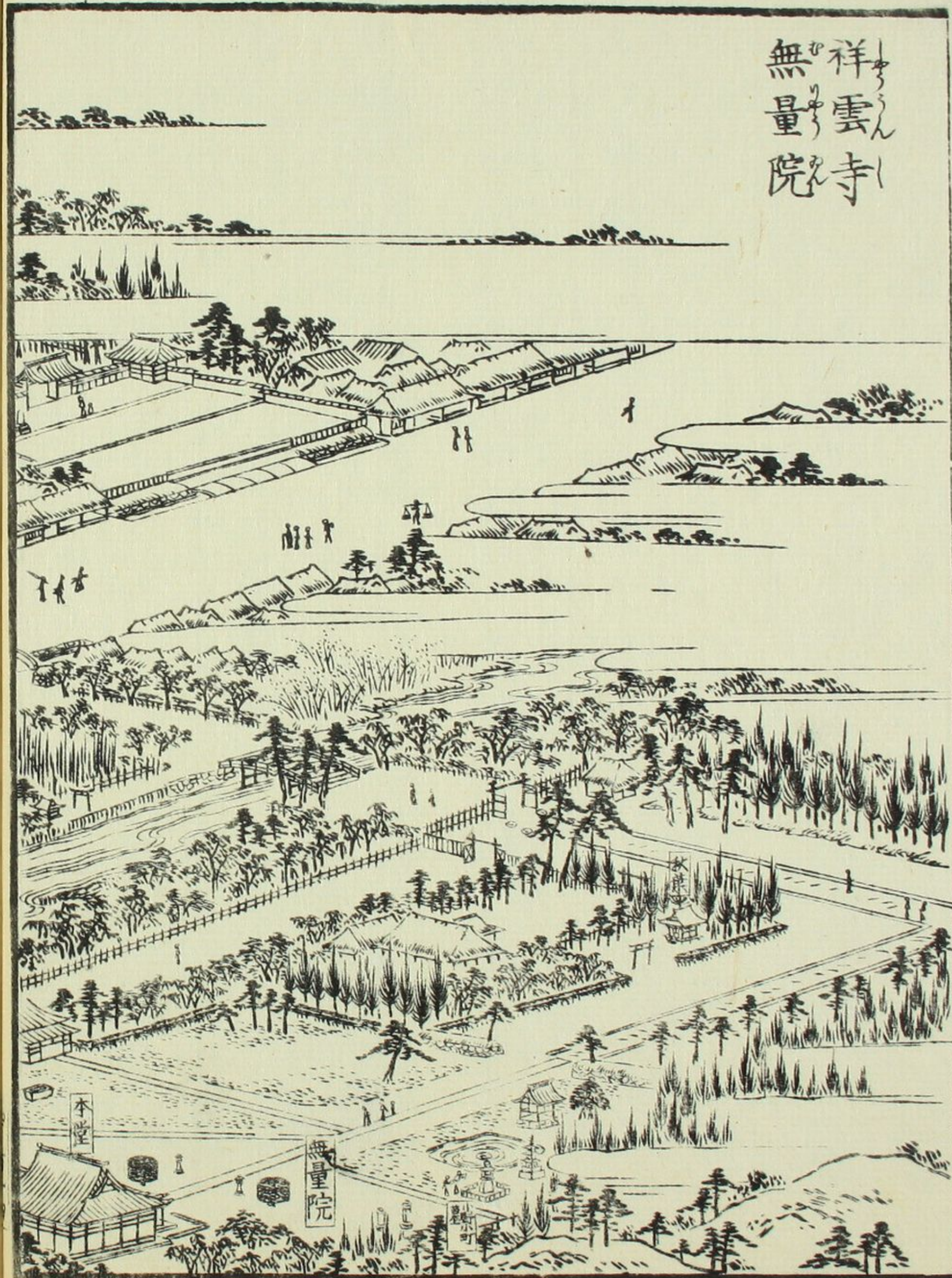
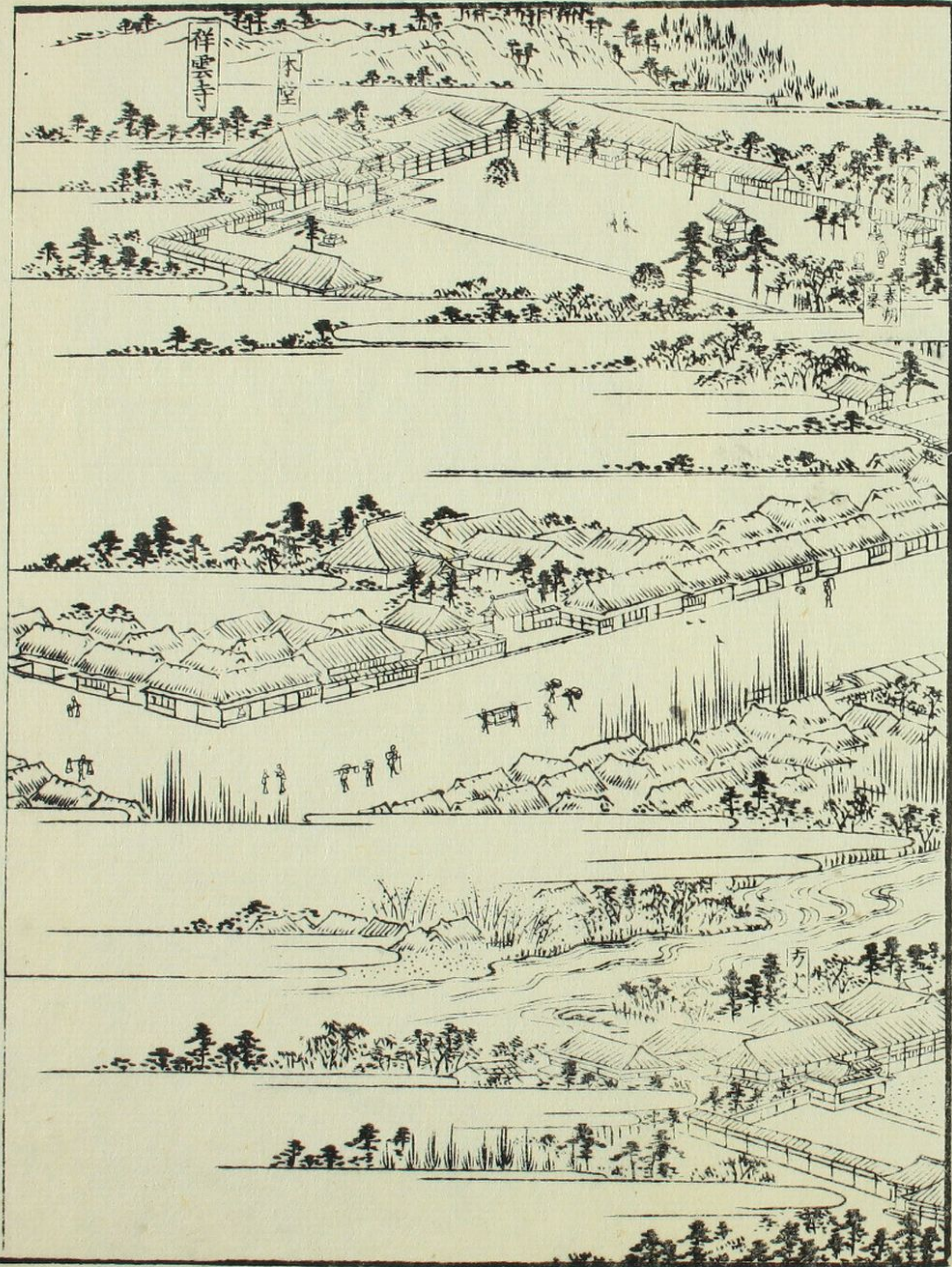


毎年四月八日十二日閑扉結縁せむ
 縁起云天平十三年辛巳行基菩薩歳四十三東國の群類を化度
 せむと先南紀熊野權現へ赤龍あり歸路傍に杉
 大樹あり此を像材と佛像を造立せん其木を伐り誓て
 云く若此より佛意小協ひなほ此木我小先より有縁の地に至る
 至ると云く彼所の谷川は流るる夫より東國に赴き此地に
 至るもあふ彼靈木あはれ入江に漂着往古此邊より高田の辺を
神田橋の内外逆まて此の
 江河なり仍佛意と尊と慈母の爲則東方に向ひ香華を捧げ禮
 拜なり信心の誠を盡しあふ然るは面親薬師女金色の光を放
 ちて顯れあふ依り行基菩薩件の杉の本木を以て此本尊と
 模刻し此境は一字を営んで安置せり又六道流轉の衆生成
 救へる末本を以て六軒の弥陀像を彫造し六所に分ちあり
江戸六阿弥陀と
構せるもの是有り

吉水山宗慶寺 同所三町むらり西北あり朝覚院と号し浄土
宗の傳通院に屬せり本尊阿彌陀如来ハ惠心僧都が作
なり相傳ふ傳通院の了譽上人應永二十二年乙未此地に至り
隱栖の地とト一草庵を葺くあり小居せり側は清泉あり
洛陽の祖跡を追慕し是を吉水と号く則當寺是なり衆
傳通院の条下は詳あり又江戸名所記云く昔龍女形をあらへし了譽上人ハ
まはるる善薩戒の脉譜を受け其報恩とて此靈泉を捧ぐとありとも
附會の説なるべし恐らくは下谷懺隨意院の 境内は越後必將の御女公阿茶の
妙龍水の事蹟と混へ交へて云なりん 法号よする所あり
了譽上人の石塔も當寺境内に存せり
極樂水 境内本堂の前は井と云上は家根を覆ふ吉水と号するとも是あり
極樂水ハ松平播磨侯の藩中あり
瑞鳳山祥雲寺 同所戸崎町あり曹洞派の禪窟なり
駒込吉祥寺は屬せり本尊ハ釋迦如来脇士ハ文殊普賢あり

寺記云當寺ハ天文元年癸辰遠山隼人正創建の精藍なり
小田原北条家の分限帳に遠山隼人佐江戸平川を領せりとありを同一人なり永祿
六年甲子正月八日北德國府臺の合戦討死せり人あり當寺に靈牌あり法名ハ月溪
正圓居士と當小永祿七年甲子寺成り浄光院と号し當寺過去帳に
永祿三年庚申二月九日ハ汲花陰宗順大禪定尼と稱し此尼ハ遠山隼人正の室中
北条上總介の女なりと云後浄光の文字帳あり故小室永の項今のめく祥雲寺と
改む 吉祥寺第二世大州安充和尚を請く開祖と云云當寺創
今の中城内和田倉の辺あり吉祥寺其項ハ同一辺あり今ハ吉祥寺も駒込
引移る當寺も國初以來駿河臺に引こ小石川金杉よりうつされ終は又今の地を
賜りて寺院と引移りて由大明心越 茂木春朔墓 門内右の方鎮守稻荷の
禪師隱居する所の當寺花鯨の銘に詳あり 延室八年庚申正月八日汲花陰宗
樂を彫りて酒徳院解翁傳抄に居士とあり又左ハ祥世の和哥二首を鶴を春朔ハ慶安に
項の入りて酒井家の儒醫家三浦氏の親なり 延室八年庚申正月八日汲花陰宗
地黃坊傳次と云始は酒の大家に任し後鷄声を産し移り生平飲酒は長し同は延
あまふの女を其項大酒の名世よかれなり此人水鳥記とて草紙を著し大酒河
原は住み酒師大酒右衛門底深とて酒客と酒戰せし戲編あり當寺は所の石碑ハ
酒門の高兼菅住とて人遺立せりと遺骨を葬せし墓ハ谷中妙林寺あり
猶第二卷大師河原の
祭下は詳に載す

白山神社 同所指谷町あり小石川の鎮守中々神主中井氏奉
祀を祭神賀州石川郡に在る白山比咩神社は同所伊弉册尊

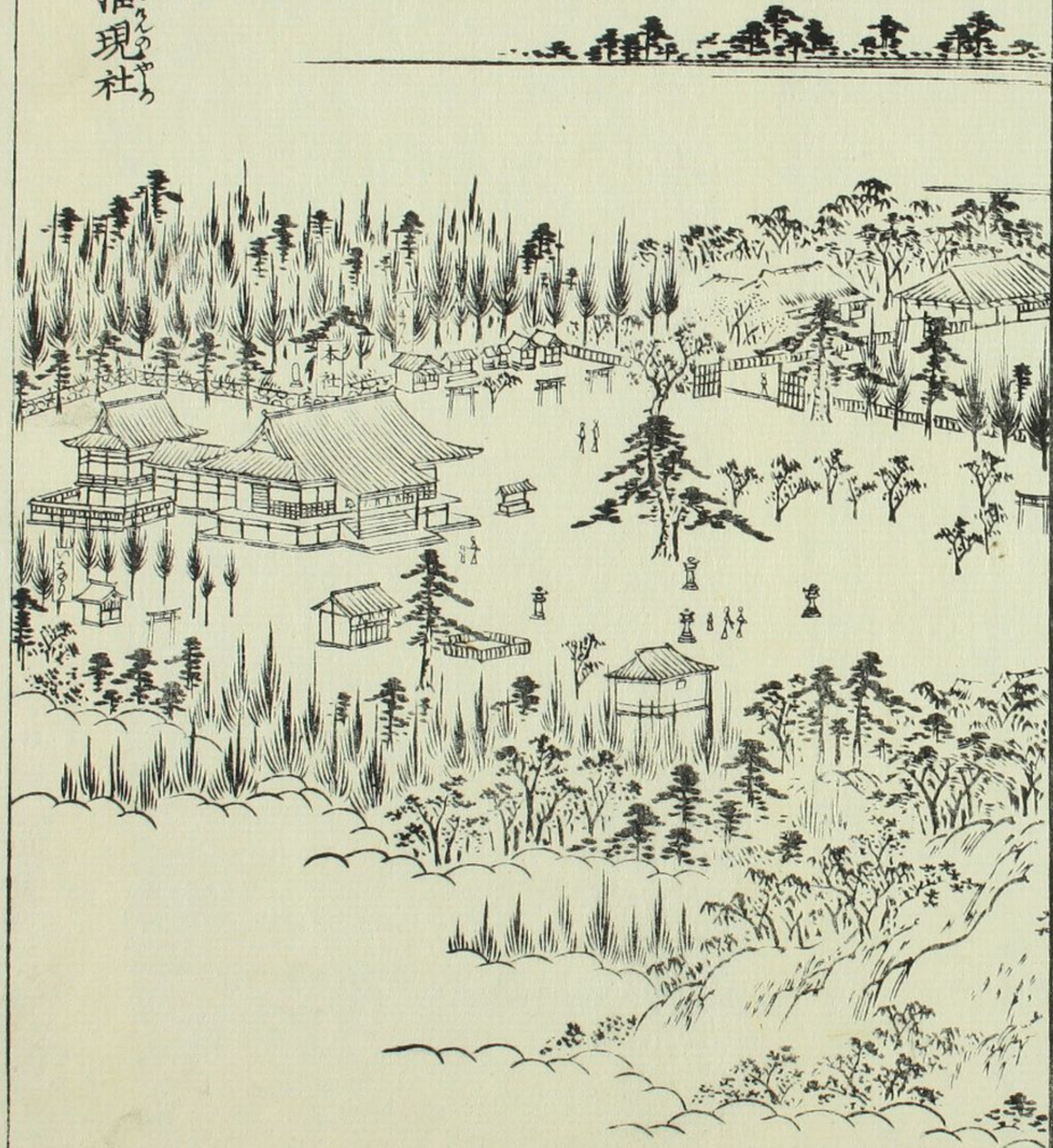


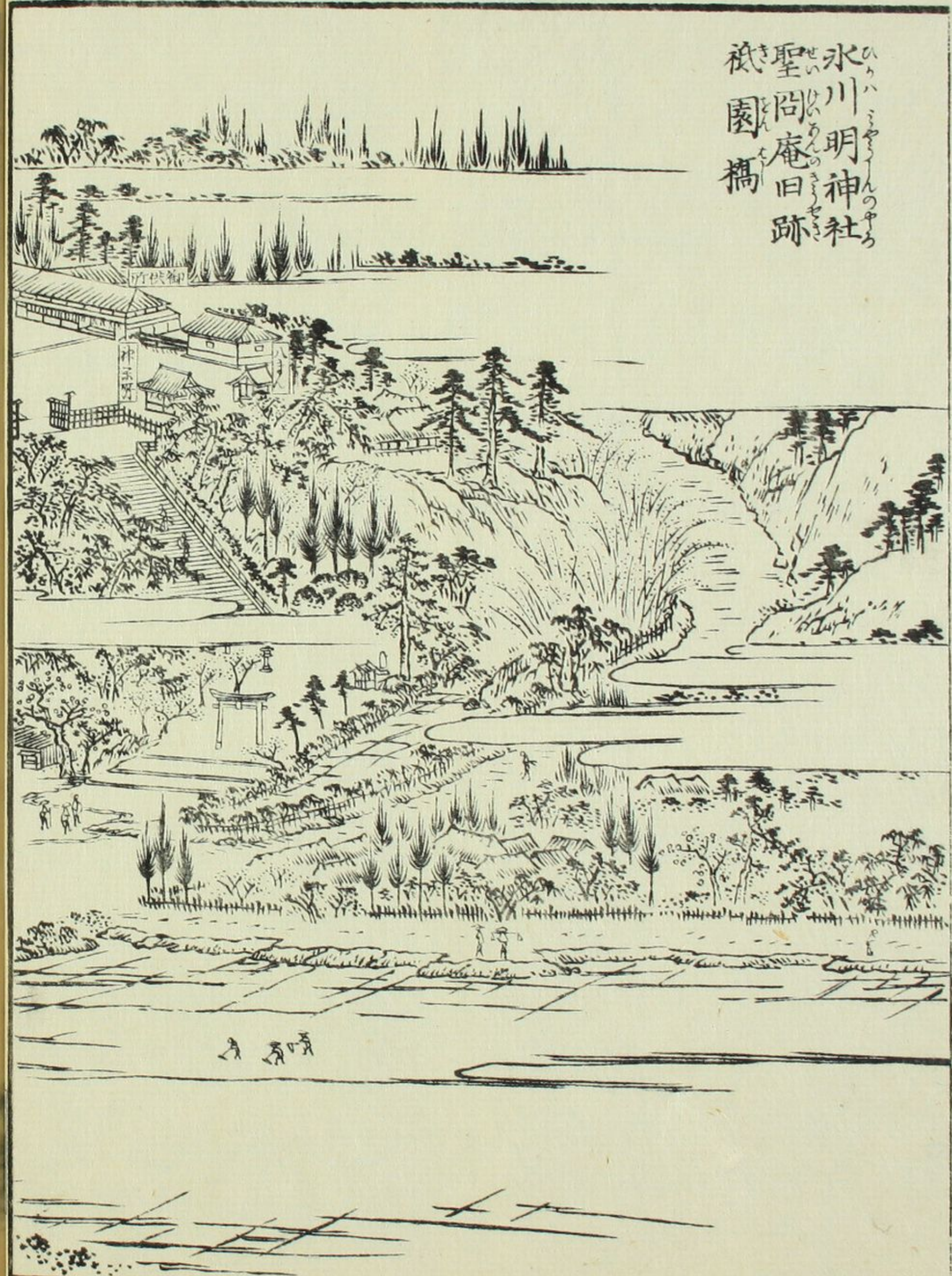
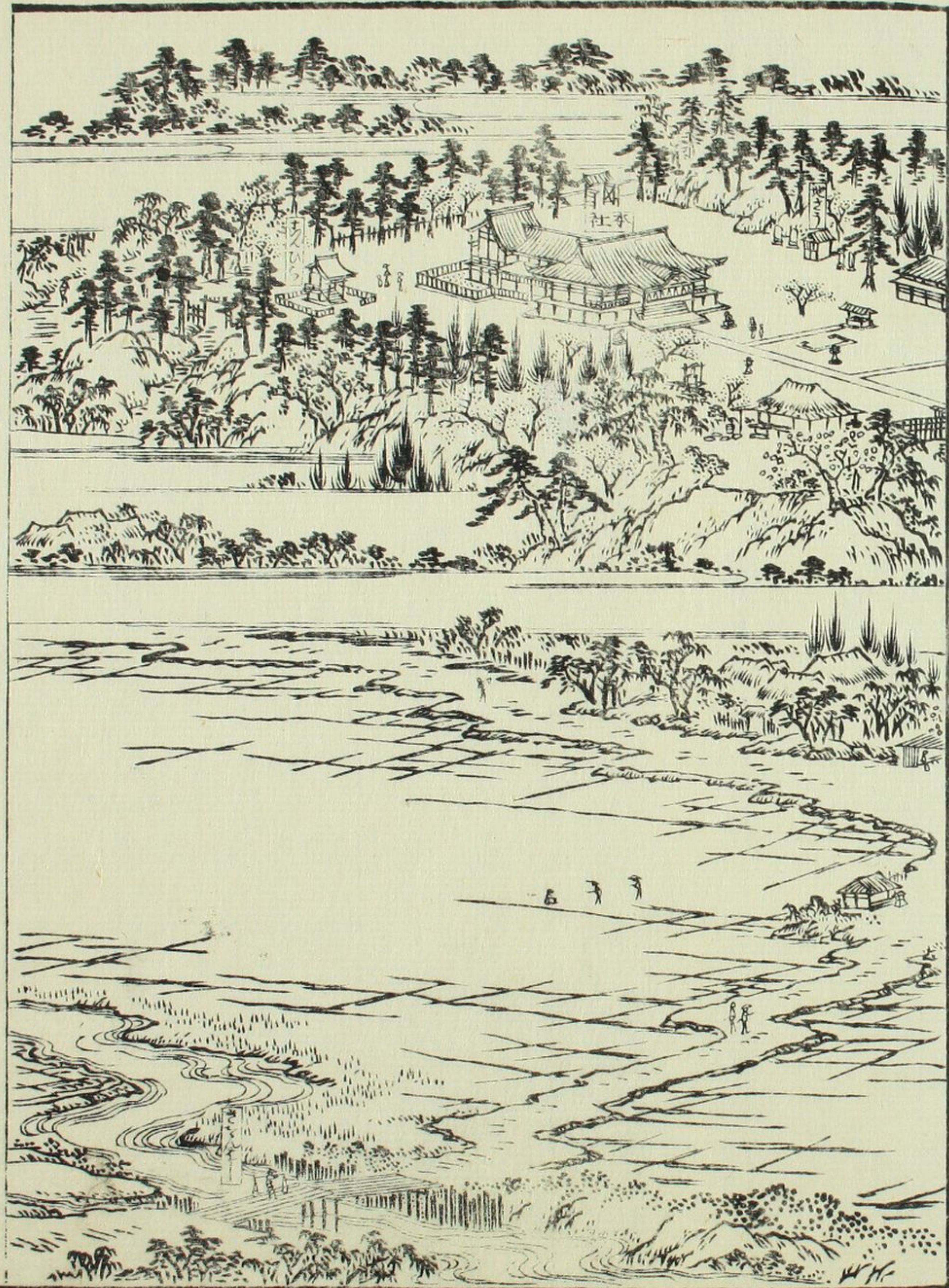
祥雲
無量
院寺

本堂

無量院

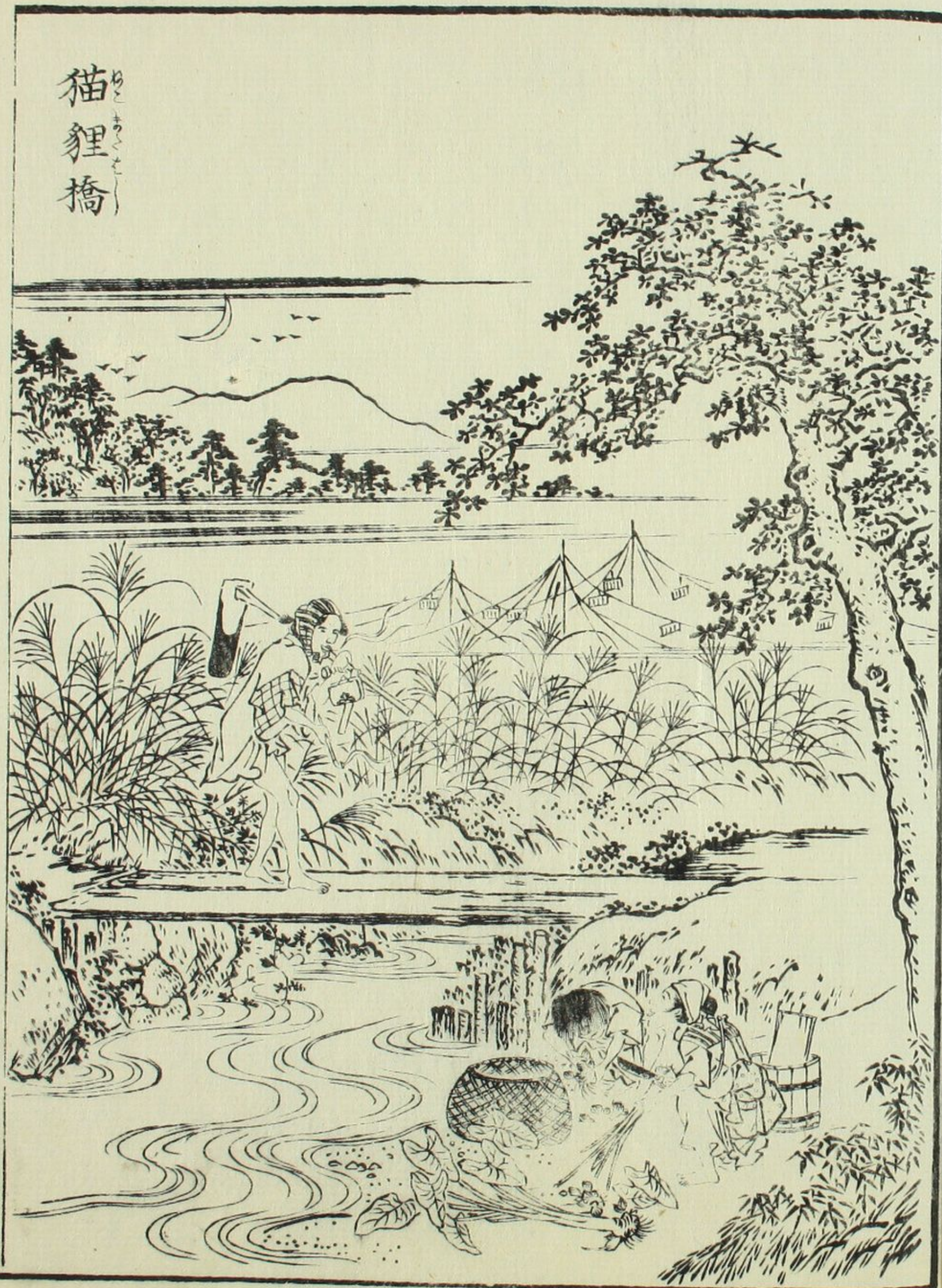
小石川
白山権現社





氷川明神社
聖明庵跡
祇園橋

猫狸橋



菊理姫泉道守者等三座あり一宮記曰下社ハ伊弉册尊相傳當社の
 元和三年の勸清なりとて上社ハ菊理媛号白山権現云當社舊白山沙殿の地ありて氷川
 明神女體宮と共ニ並びてありとて其地ハ沙殿宮作せし是
 頃今の地へ遷座あり神社畧記云此神曰白山沙殿の地ハ鎮座ありと
其原始尤久し神木ハ杉松と無此の大樹あり
 詳あり女辨宮も今傳通院の内なり所の杉松大樹也 祭禮ハ九月二十一日なり 釣樟此
 番木と紙あり製する所の弓箭を以て此地の土産とせし

御薬園

同所の西南ありと所謂白山沙殿の旧地是なり古也

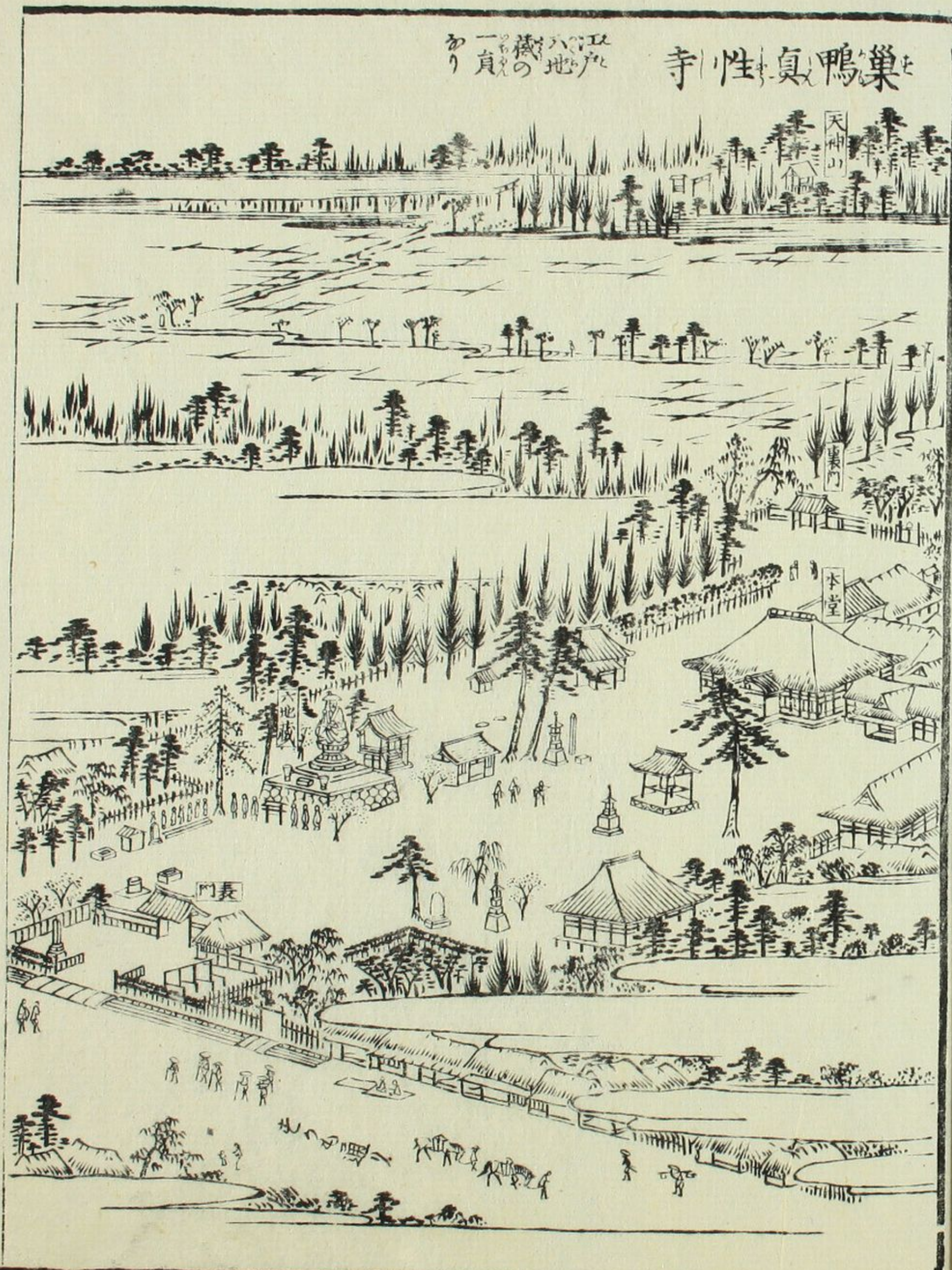
此地ハ白山氷川女辨等の三神の宮居ありとてあり白山権現の
神木ハ杉松也 此邊を初音里と字を里彦ハ江戸の時鳥ハ此地
 存せりと云

より發声を故より名つくと云

療病院

同所の西小並ハ養生所と号けらる則古の療病院に

比せしれ鰥寡孤獨貧窮無頼の病人を救せしむるに
 享保年間 官府より是を建せしめしと寄宿を許し薬飼を



賜ふ所仁惠實は百世不冠たりとのべし

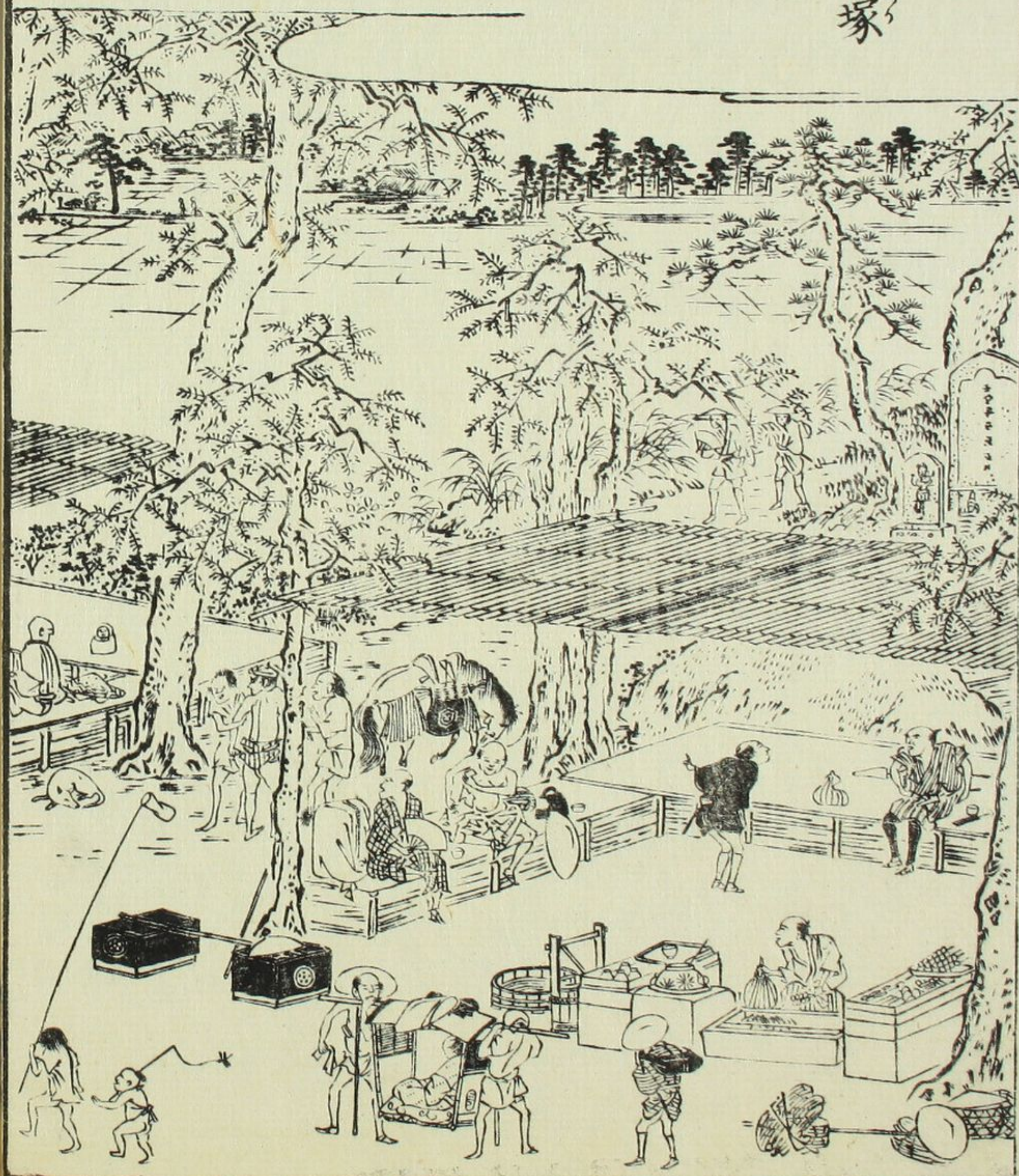
氷川明神社 同所西北の方五町をかりふあり相傳ふ 孝照天皇の御宇に鎮座なりと云々 祭神武州大宮の氷川明神に同し昔は白山御殿跡の地ありしと云々 白山権現と共に地を替とせらるるより當社ハ此地に遷る極樂水宗慶寺の持よりて祭祀ハ九月十日なり

十日なり

武藏國風土記曰 足立郡巢鴨郷氷川神社 觀松彦香殖稻天皇御宇三年戊辰所祭素盞鳴尊大己貴命奇稻田比咩合三座也云云

按此巢鴨の地昔ハ足立郡に屬せし似たり今ハ豊島郡の内に入り

當社ハ千有餘年を経る所の宮社ゆへ八幡太郎義家公奥州下向の時當社は叅籠ありしと云傳ふ中古荒廢し其形をのこし残るを傳通院の開山了譽上人此地の幽邃を愛し庵を結んで聖岡庵と号け此地に閑居ありし頃宮居を重修



庚申鴨塚

あまのこゝとあり 聖阿闍梨本社より右ありて今ハ水大明神の傍供所と云ふなり

猫狸橋 同所西の方小石川の流も架せり南向亭茶話云く

昔大木の根本の根を以て橋よかへて架したる故に此名ありと云

按て東國の里俗木の根を根之本と唱ふ此説可なり又神田松下町の小路を俗に根之本と唱ふも村木屋多く住んで根本を賣家多きが故にあり

十羅刹女堂 巢鴨本村藤橋の川より南の方ありて別當ハ真言

宗ゆゑ福蔵院と号し里老云昔此地小鬼子女神の像も安置

してつらまゝに賊の爲に奪つと云今ハ雜司ヶ谷ありて其説是非

知るべしと云傳ゆふ任せく是を載するの事神の九月

十八日よ修行せり

板橋驛 中仙道の首ゆゑ日本橋より二里あり往來の仍客

常小絡釋より東海道ハ川の差支多しとて近世ハ渚彦を初め

往來繁々といふ傳舎酒舗軒端を連ね繁昌の地より驛舎は

中程を流る石神川は架する小橋あり板橋の名ありて發る

と云板橋ハ上下に分り此地を下板橋と稱せ上板橋ハ練馬

按て此地と板橋と唱ふは義経記より小田原北条家の所領役帳に

板橋原 都々上下板橋と稱する地を指て云ある一此地と云

廣々たる平原なり中古治乱記は貞治六年丁未四月二十六日

鎌倉管領足利左馬頭基氏逝去を其弊に乗一芳賀入道

禪可子息伊賀守高貞同嫡子八郎高政等鎌倉を押し寄

と一應安元年戊申正月五百餘騎を引卒一越後國を進

發あると云同六日武州板橋原を打つ此由鎌倉へ聞えり

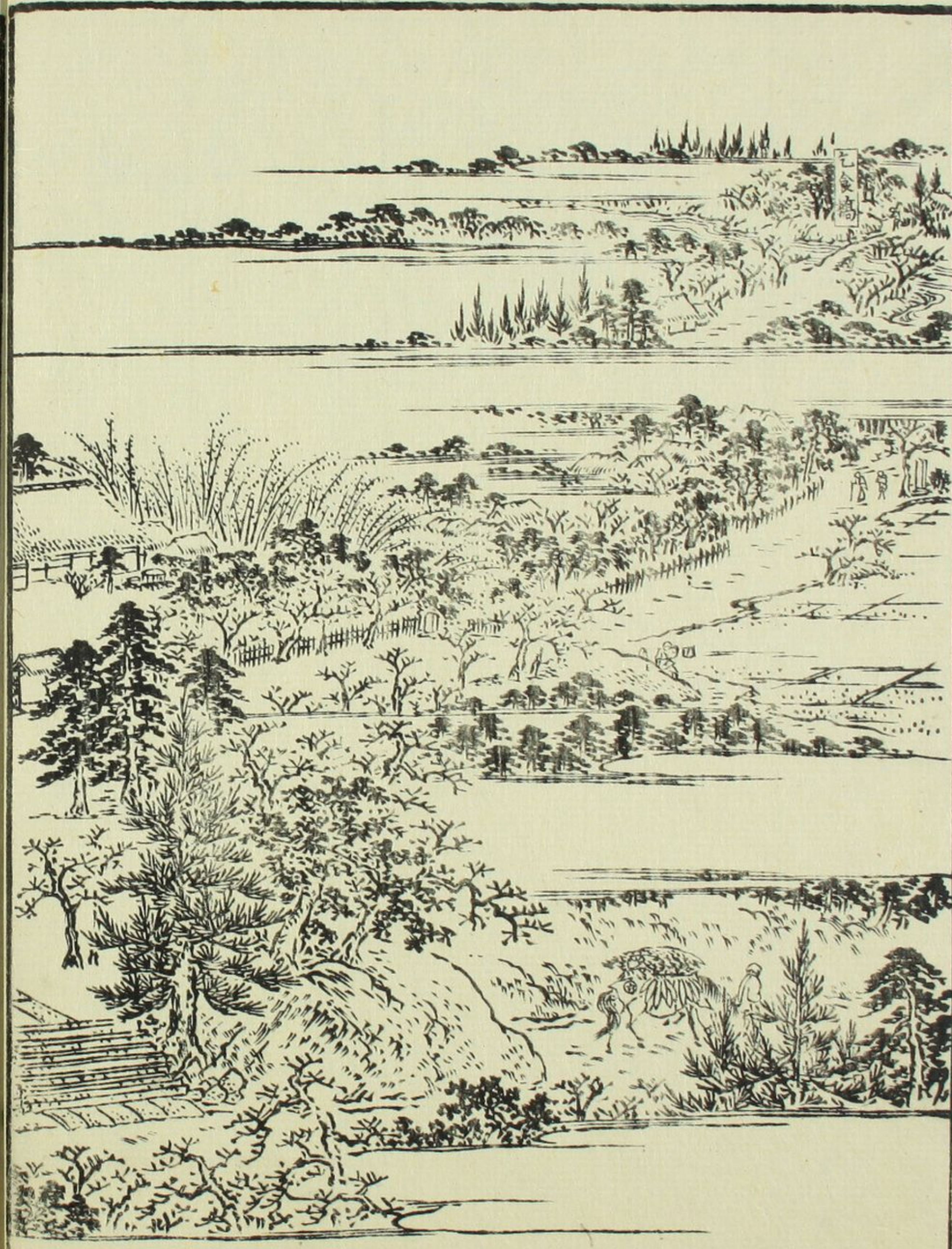
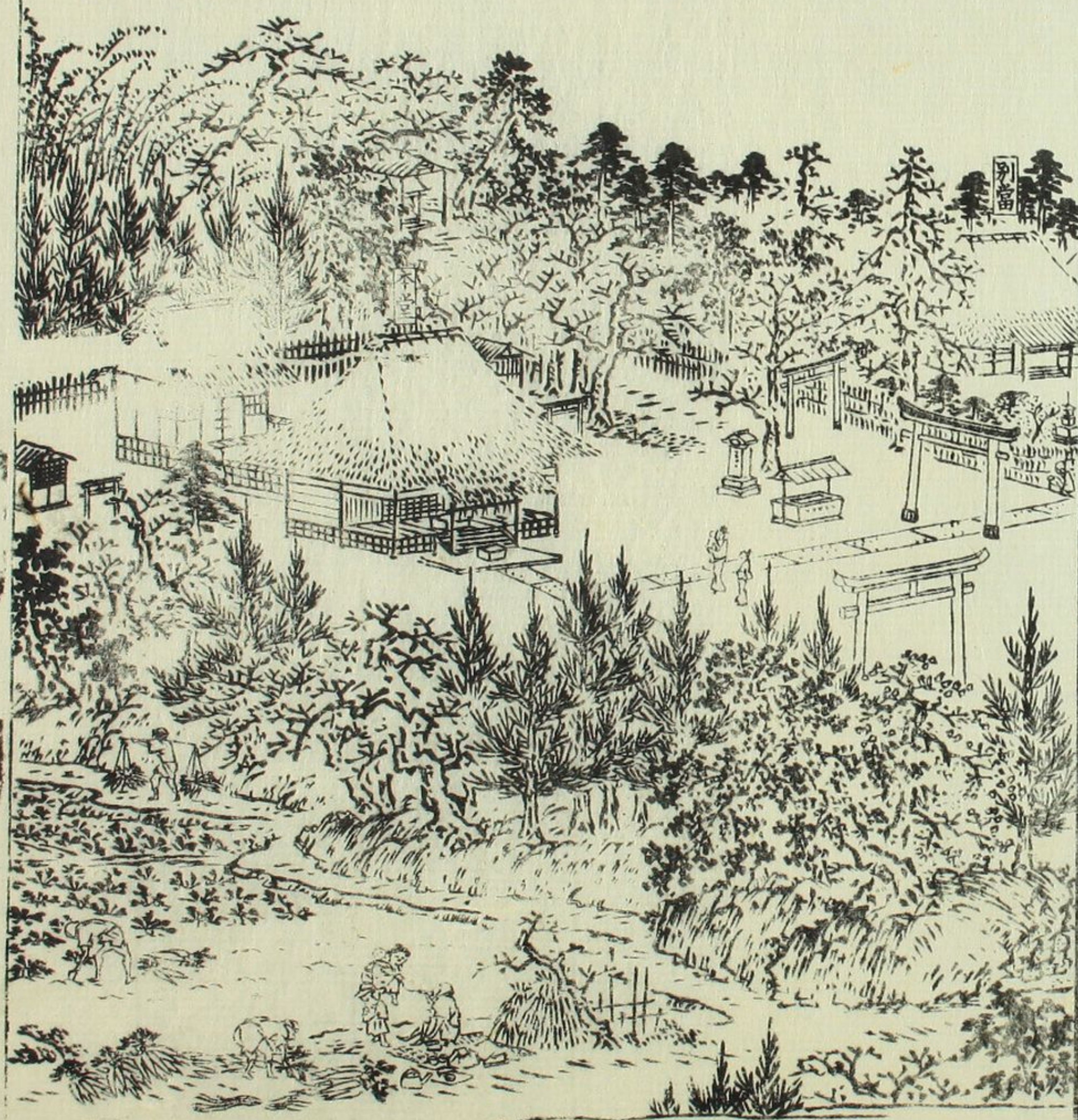
執吏上杉憲顯其身ハ鎌倉を守護一子息兵庫頭憲將

同兵部少輔能憲等と大将と云千葉介直胤小山朝明

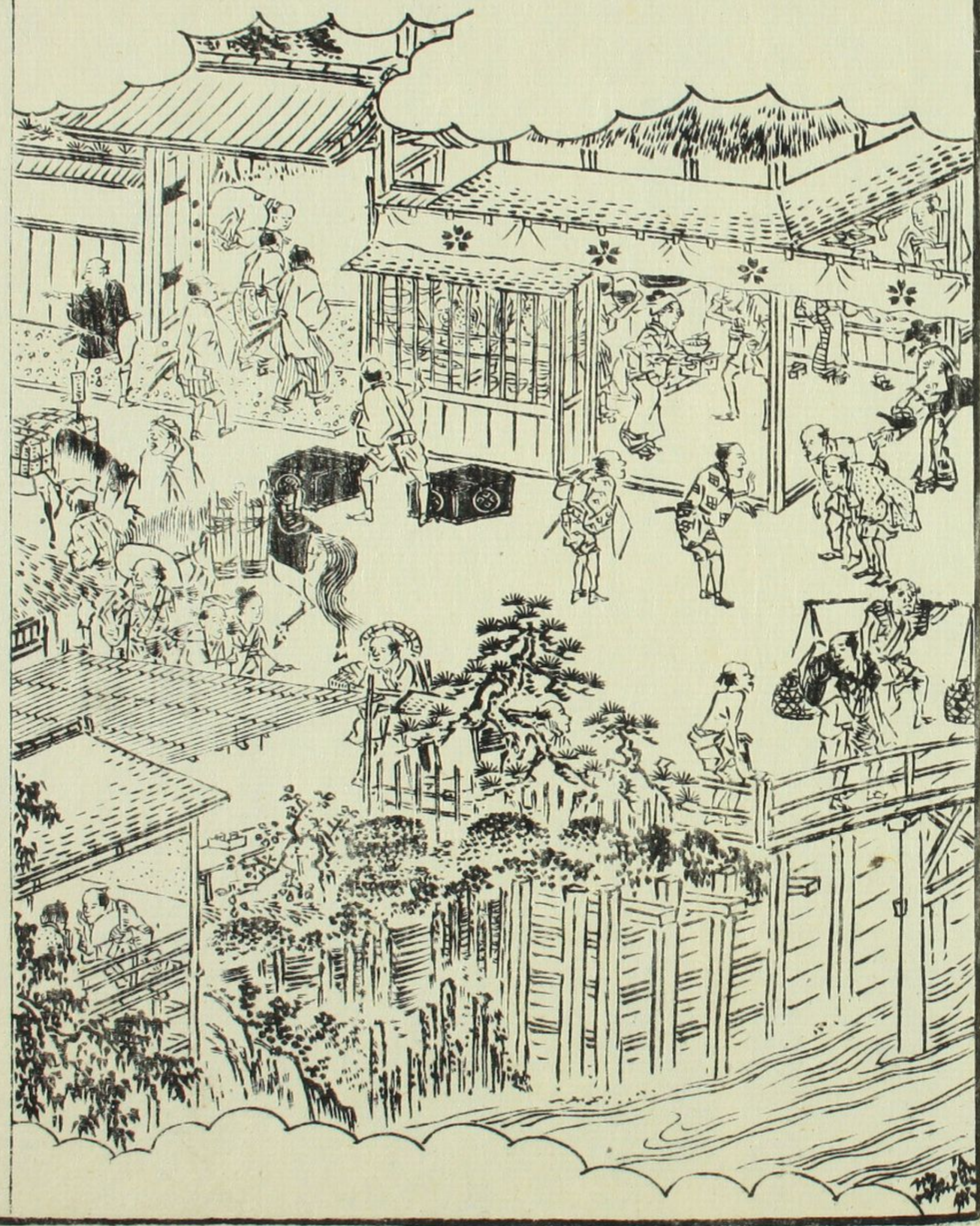
以下其勢二千餘騎是も其日武州洲賀茂といふ所陣あり

千葉小山が手勢五百餘騎を引分く王子の森に置とあり

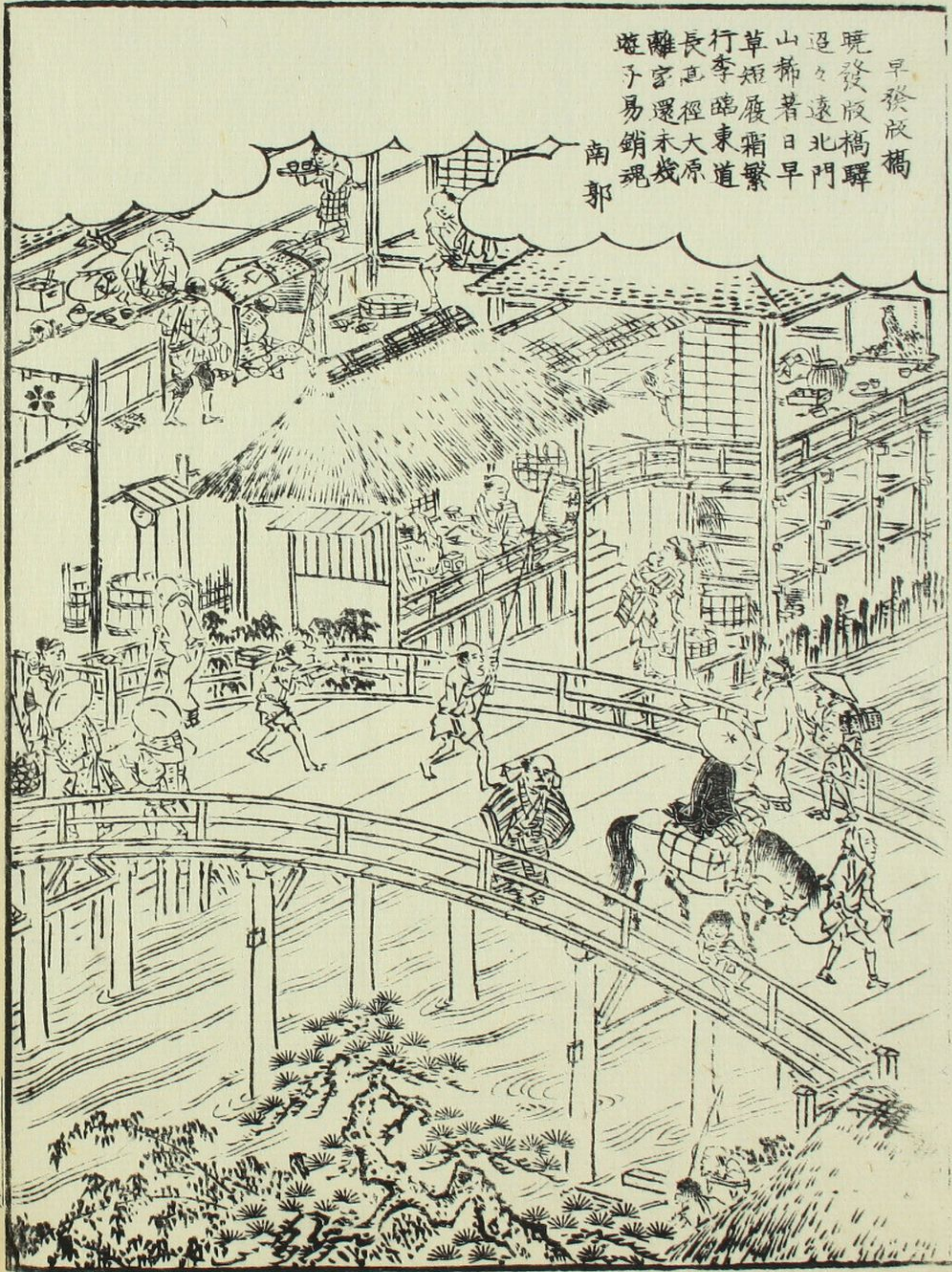
十羅刹女堂



板橋驛



早發板橋
 晚發板橋
 山稀著日早
 草短履霜繁
 行李臨東道
 長志徑大原
 離宮還未幾
 遊子易銷魂
 南郭



孤雲山乘蓮寺 慶學院と号を同所橋より三町あり此方道より

左側より浄土宗の縁山は属を本尊阿弥陀如来の像を
佛工春日の作開山ハ英蓮社信譽上人了賢無的和尚と号に

當寺ハ應永年間の草創也此地の卿主板橋信濃守忠康
といふ人の菩提寺なり當寺五世明譽上人龍宅和尚現住の頃

天正十九年辛卯 御當家より守護不入の朱章を賜ふ又
寛保三年癸亥の夏 大樹此辺涉遊獵の時當寺に憩をせ

相生杉 寺の後園ありむ此辺涉遊獵の頃此杉の号を同所住僧
相生の号を以て依今猶相生縁結の杉と稱へあり

女男松 堂前あり天下泰平を祝
板橋忠康墓 同境内あり碑面本樹院殿前信州空山有賢禪定門

信濃守忠康ハ豊島氏なり北条氏直へ仕此地は住りて板橋と名を
り又云又或人云豊島氏預譜は滝野川長門守弟を板橋次郎豊清と名つり由記
なり又此条家の所領後帳を見ざる板橋又太郎同大炊介とも其一族なる其餘

小田原記ハ大永四年正月十三日北条氏綱と上杉朝興と合戦の時朝興は板橋をさき
引退く此時板橋の果才以下言死をさるも同氏族の人あり又同書ハ天正元年十月
引退く此時板橋の城主築田中務大輔佐一末とて企むる小田原の物頭也
出嶽一と國宿へ取詰合戦あり頃小田原方武州の石濱の城主千葉次郎城方の物頭也
同書ハ千葉とて千葉次郎討死を此時石濱の千葉家女子が千葉の一跡相續あり
宮内以補支那あり彼与カ衆ハ板橋肥後守板橋の城主なり
松戸越前守ハ赤塚の城主なりとあり此肥後守又同氏族の人なり

木下稻荷祠 同一驛の端を街道より左の小路を入る智清寺と

云々浄家の寺は安置元和三年丁巳當寺中興心蓮社法譽上人
輪宗和尚感得せられし神像なりと云相傳ふ豊臣秀吉公

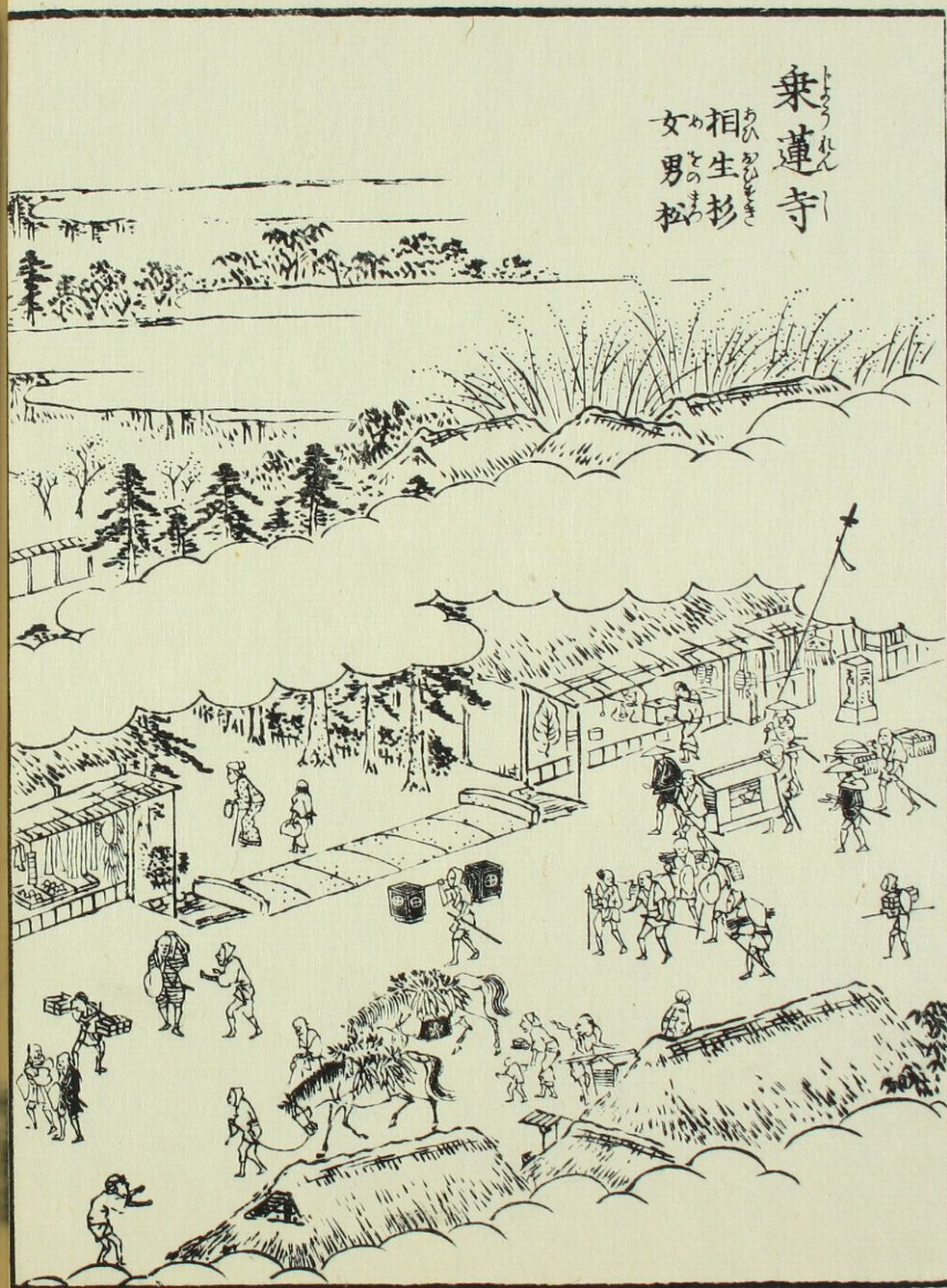
のまご木下藤吉郎と稱せられし項此尊神を崇信しあり既に
して天下の武将とありありを以て世は木下出世稻荷と稱し

清水坂 志村あり世は地藏阪とも号く舊名ハ隱岐殿坂を
呼べし昔隱岐守何某闢る故ありといふ

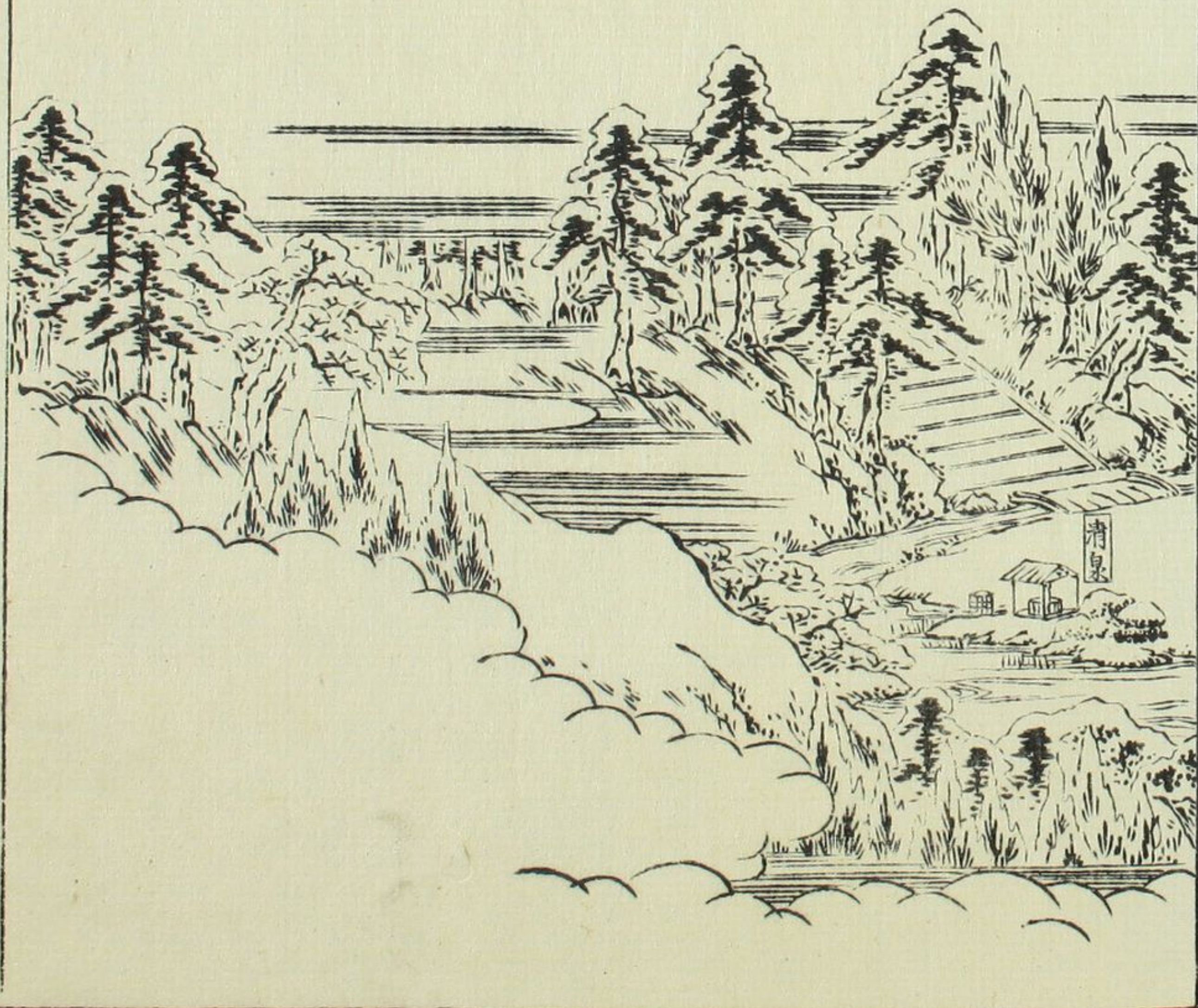
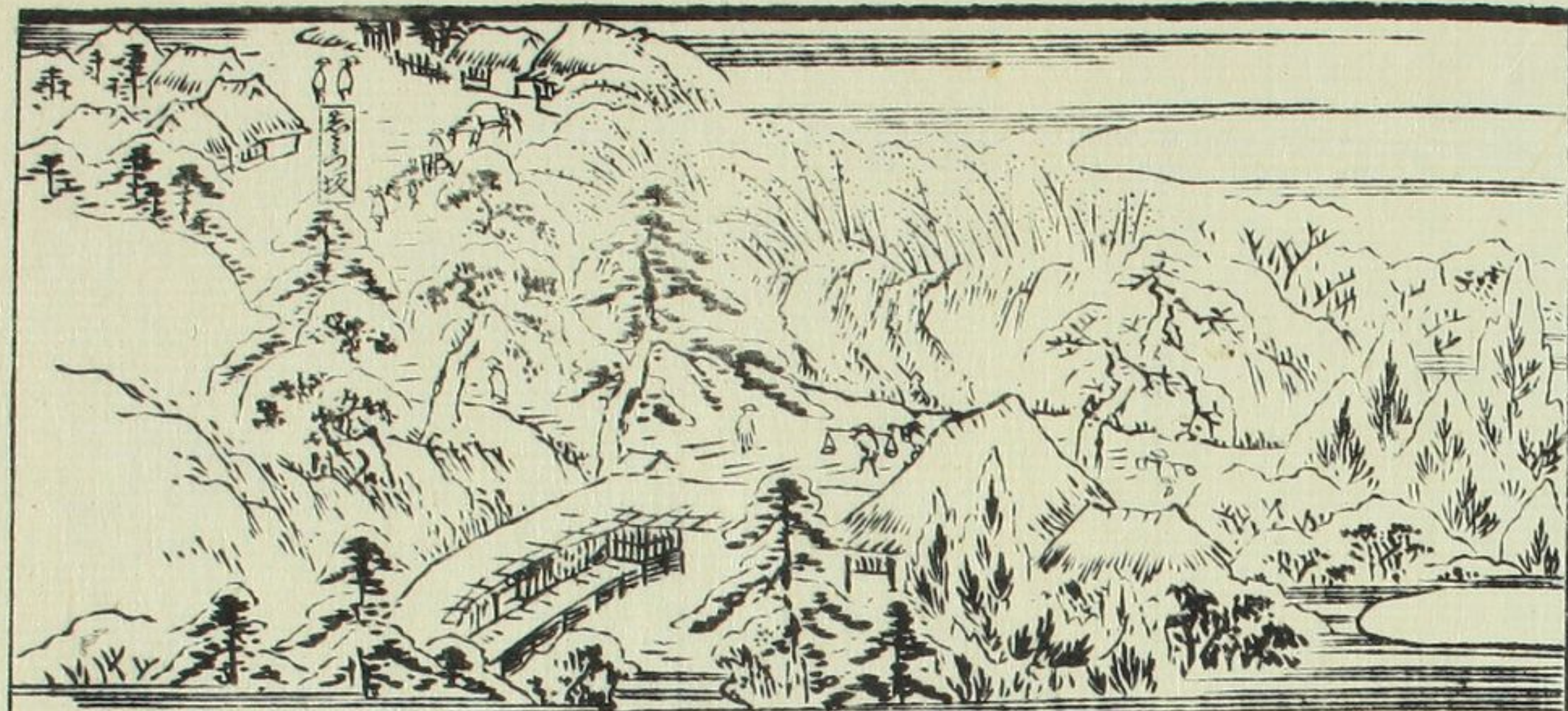
岨中へ往還の行人大ハ惱り依て寛保年間大善寺に住守



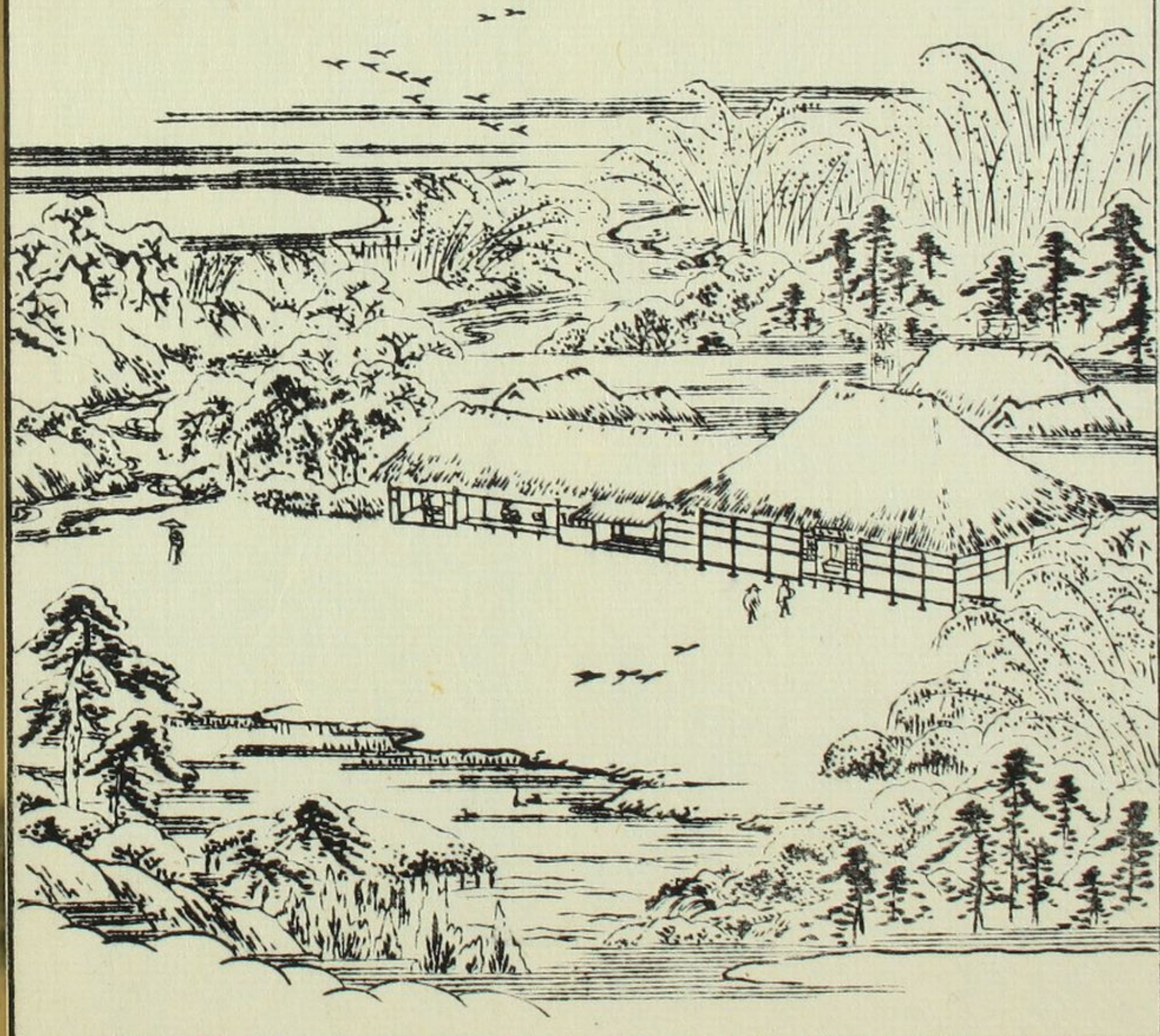
板橋の驛



乗蓮寺
相生杉
女男松



清水薬師
 清水坂
 境内山の腰
 あり清泉佛
 如く故み清
 水の号あり
 此の夏灌
 せ名産とそ
 清水堰とく
 世に賞し
 せり



直正和尚僧西岸と力を戮いせ勸進の功を慕ふ本を代刺を
刈く石を疊く階とをあらひりより行人苦難の患を道る

清水薬師如来 清水坂の下よりあり 醫王山大善寺と号し曹洞

派の禪林やと芝の青松寺に属せり 永正年間此地の農民新見

善左衛門といへる人閑基を 善左衛門法名を清雲大善庵主と号し 其後元龜

年間に至り青松寺の雲崗和尚の法孫在天禪師住職しとく

法燈を掲ぐ本尊薬師如来ハ聖徳太子の真作やとく左右

殿壇に十二神將の像を置く境内清泉湧沸を一年

大樹此地は遊獵の頃當寺へ立寄らせり此清泉ふよりて

此本尊を清水薬師と称まざる旨命あり爾よりかく唱ふ

此清泉ハ寺前山の涯下は添て沸流せり近隣の村落皆此水を

千葉家城趾 同所より西へうけく耕田に臨み一臺の地哉

指くいへる今も空塹の如き形所くは残る

此地の南の方を中臺といひ又西の方一里に小

西臺と云地ありて何もの城営の舊跡たりといふ

熊野権現宮 同所清水坂の上より三町をかり西の方涯續より

社の後ハ涯に臨み松杉等の老樹鬱蒼たり就中樟の大樹ハ

周圍三圍に餘れり當社ハ往昔千葉氏城内の鎮守たりとい

今ハ志村より西の臺邊に間 土人此地を隱岐殿やとすと字を今奥の

院と称する地は石の小祠あり十四五年前此地を穿ちて古鏡

二面と刀一振とを得たりと語りされど其故をあらわされば崇

わらんを恐る元の如く埋藏したる事あり 寛政六年志村の里正

補一華表を石や又上の宮の地は 別當ハ新義の真言宗中へ三次山

六百三十五株の杉を栽り 延命寺と号し中野法仙寺に属せり

此地の城主千葉隠岐守の家臣三次某の

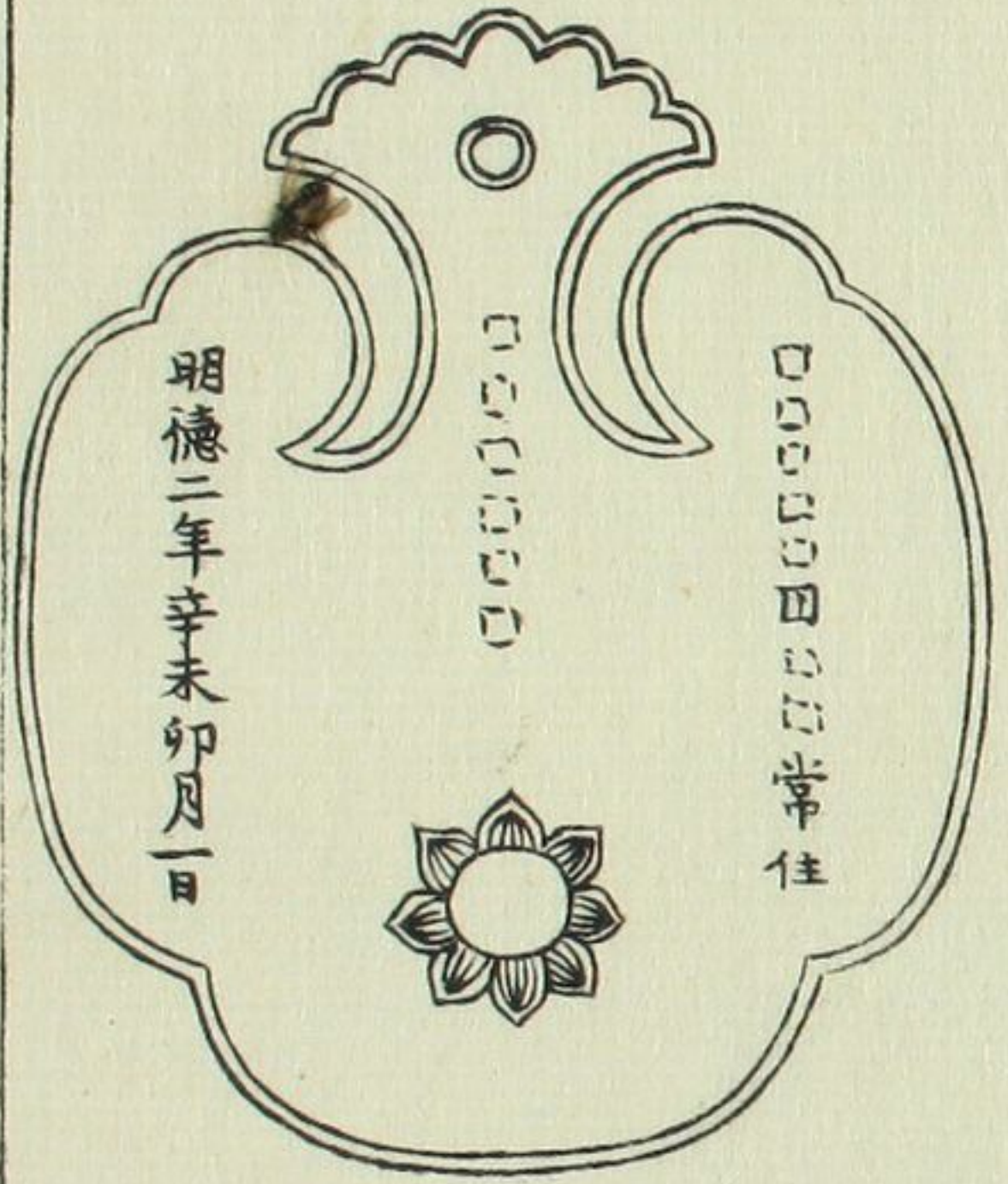
一夜塚 同所西南の畑の中より此地を前野と号し相傳ふ小田原
 北条家の時千葉家の城を攻落さんとして寄るの軍兵此地に
 於て一夜の間は炮坐を築き城へ向けく此塚上より大發炮を
 放ち竟小城兵を焼討しせしむ

西臺山圓福寺 熊野権現宮より二丁をかり西南の方西臺村より
 曹洞派の禪刹なりと芝愛宕下の青松寺は属を本尊ハ拈華法
 釋迦如来座像一尺四五寸あり行基菩薩の作なり或をのみ
 浄首をかり行基の作る所なりと全躰ハ後人の作なりともより太田
 道灌入道の開創なりと越生龍隱寺第五世雲岡俊徳和尚開山
 たり 雲岡開基も所の 當寺ハ旧河越にあり一頃ハ龍隱寺と未寺とあり
 一とあり今寺領二十石を附せる當寺は永正年間の古文書あり其支
 左のどし

志村西代より内小系三郎より原表再面し留る

為宗安公免福寺は永代寺進中作又以前
 後勅解中時寺に面し留一枚表を中表
 貞貞一絡し作爲後日寺進中状也別
 永正十年癸酉十二月十三日
 お田彦六
 老母

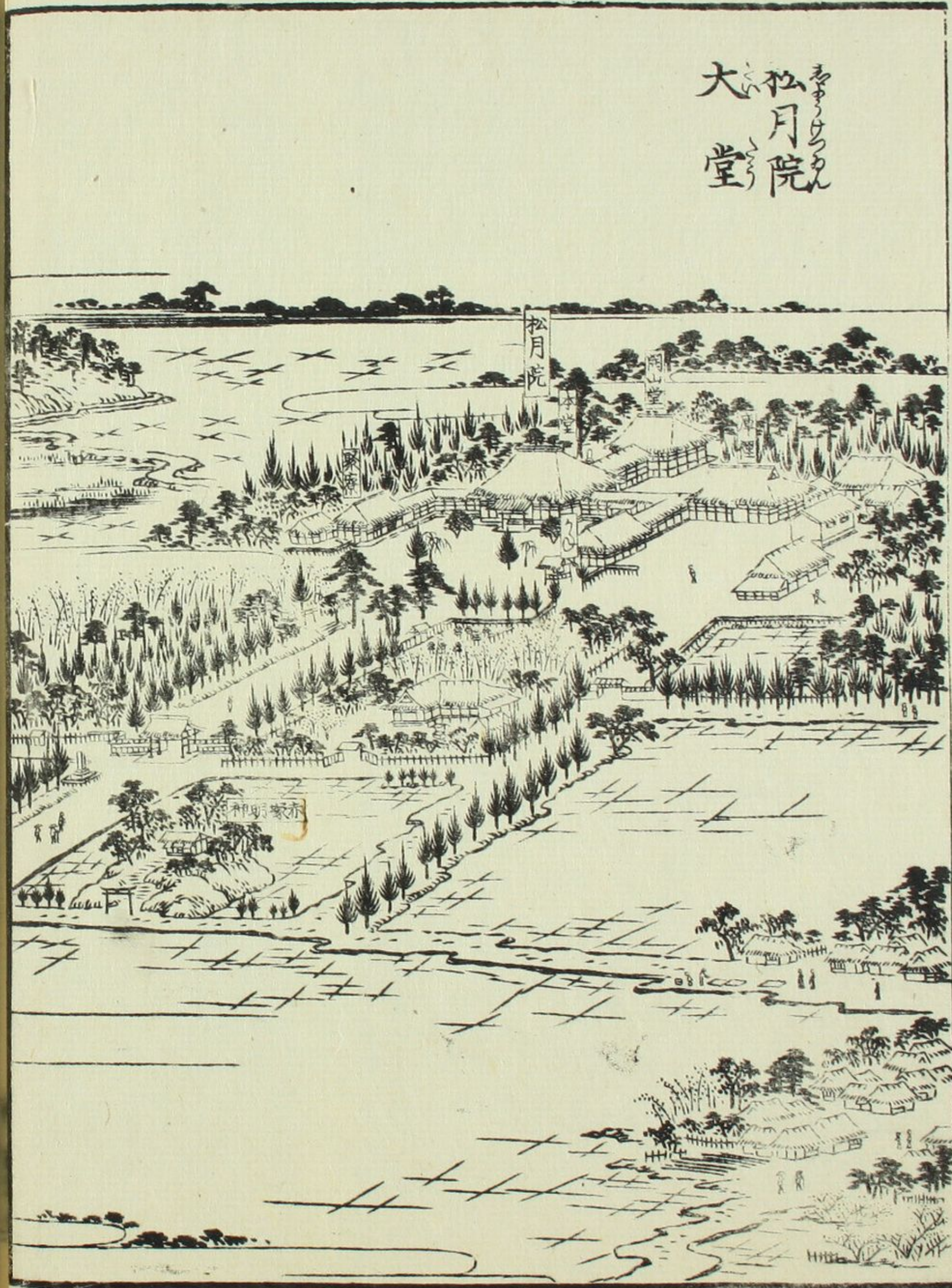
圓福寺の
 住僧の志村城山の辺農民の地より小を彫配と字する田畠あるハ此多田氏の
 遺跡なりと
 古雲版 庫裡に掛るあり其形左の如し



長一尺三寸五分
 中一尺二寸五分



松月院
大堂



大堂

赤塚松月院の南あり形をわりの草堂の内小釋迦如来の像を
安しく本尊とぞ土人傳云大同年間の開創より上古ハ大刹なりと
なりされど後世敷度の兵燹ノ罹リ焦土となりて僅小此釋尊
浄堂と舊鐘の遺残もりとあり
真福兩寺の舊跡と

古鐘一口 堂前あり長九尺五寸あり口の径二尺三寸あり
世壽七十五以上鐘倉志はゆるとありなり

武蔵州豊島郡赤塚泉福寺真福寺二寺鐘銘
驚沈潜之幽蛰破衆生之大夢莫先於鐘也武州豊
島彼兩寺者前朝全盛之時所建具體古招提也獨
欠箕簾之器可謂缺典矣今快賢阿闍梨幹衆緣鑄巨
鐘厥志勤矣若夫豐嶺霜降袂園月明揚音於大千
沙界傳蓋於未來無窮命崇右福山銘曰
哀我彦俊
武之豐郡 州之重鎮 大和鳴 鯨吼震
鳧氏茫瀟 以落以驚 劫石有消 洪音無盡
啓昏迪迷 遐邇感進

筆執 三位親慶
大工平次五郎行次
勸進沙門治部阿闍梨快賢

曆應三年庚辰四月初八日

萬吉山松月院

同所北の方通りより

右よりあり曹洞派の禪林あり

常會地なり當寺ハ千葉介自秀開創の佛刹といふ開山と曇榮和尚と号に
當寺卵塔の中ハ文明の古碑あり然るに開山と曇榮和尚と号に
文明あり前草創あり寺院あり
佛殿の本尊ハ釋尊の中ハ作者とあり脇士ハ支殊普賢あり
堂前左右ノ木犀の大樹あり禪堂衆寮方丈庫裡ハ左右ニ並ハ
て巍然として當寺ハ自秀の靈牌と稱するものあり松月院殿
南州玄參大禪定門千葉介自秀永正三年丙寅六月二十三日
とあり又其室の靈牌として中を龍興院殿了室覺公大効延徳
元年己酉九月十五日とあり墳墓ハ卵塔の中ハ大松樹の下にあり
古き五輪の石塔三基並び建中間にあり尤古く蘇
若滑なり右よりあり自秀の名あり後世造を儲たりと

地居くたふあるものを則其室は墳墓あり

赤塚明神祠 松月院の門前より所の一堆の塚上は櫛二三株あり

其下は小祠を宮と白山権現を勧請を土人云此塚の樹木等

觸るるあり時ハ必崇ありとく尤恐怖アリ按上世高貴の人を葬

したる荒陵なり

武蔵國風土記殘編曰 荒墓郷 荒墓神社

大化二年丙午所祭藤田彦也 神貢五十束三字田云云

十羅刹女宮 同所北の方より真言宗常福寺別當なり

田遊祭 毎歳正月十三日此地の農民當社は詣り後常福寺に集會一夜

造る極あるものを陸英とて三斗ありありあり夫より搗所餅を以て教品の農具

尤鄙俗のありとて以て古と決りて愛を動者其學は

太郎次とのを猿田彦の假面をかめり尺を所尺次所と号するを何れも鎌を

其席へ引出し飲食せり未至り九万町の稲一万町ハ鎮守へまわす也去年の稲を

蔵は積今年の稲は庭に積めり終りとす

今當國近在の農民の里諺はあかろくと云ひあり其故を問ひ耕田の中尤

中問上の稲を公にせりとてあり唱へり井田の意はかかへり

千葉家古城趾 同所西より岳をのり土人城山とて今官林と

なり頂は畑ありされども空塹は形杯其傍は残り迂城内城と

覚しは所を殊に今も城壕の形ありと水を湛へると鎌倉大

草紙小康正二年正月成氏市川の城を圍む同く十九日落城

しは實胤ハ武州石濱へ落行自胤ハ同く赤塚へ移るとわれハ

此所を自胤の居城なりと必せり按松月院の開基とす

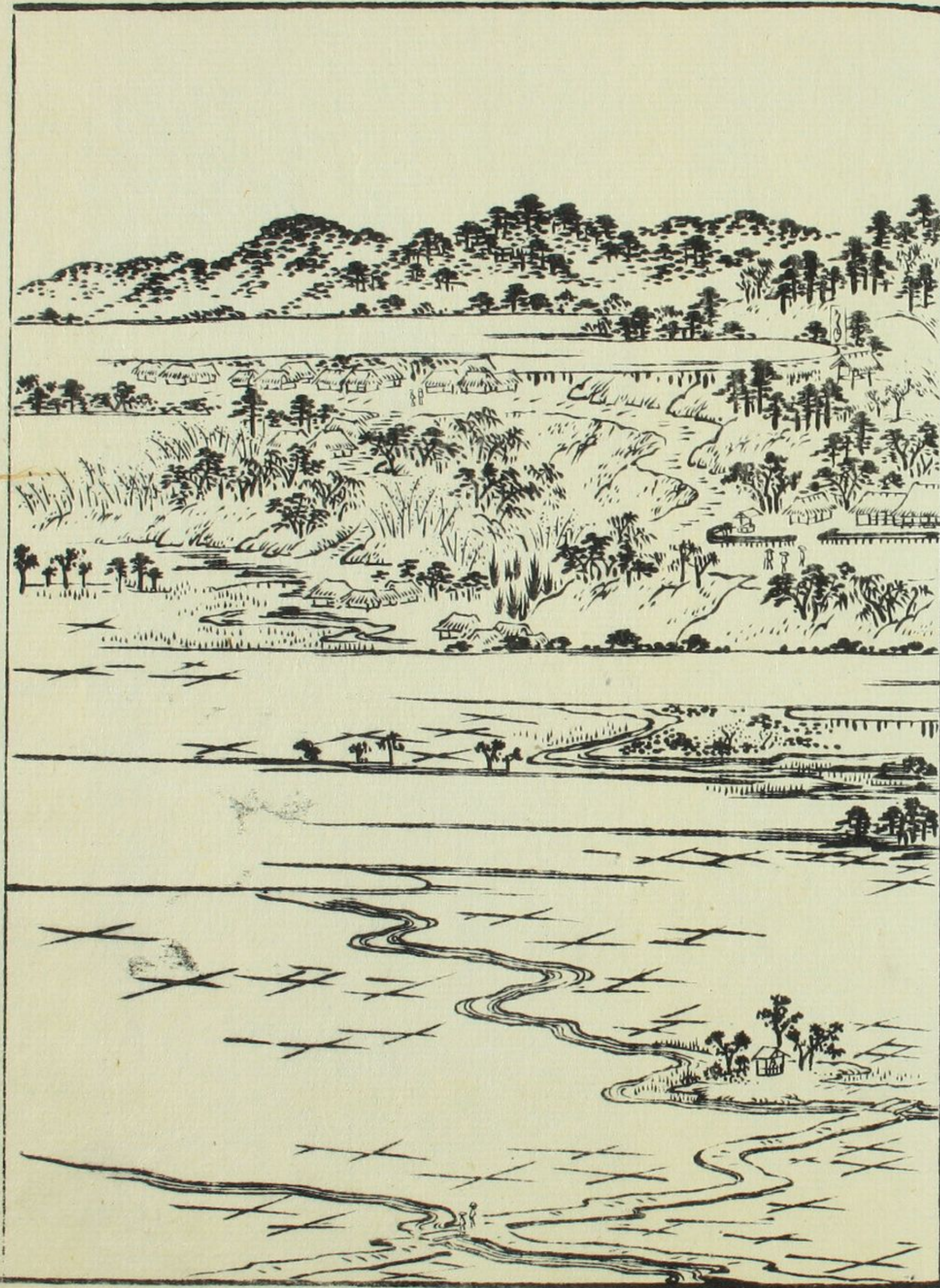
所の自秀も此自胤の氏族あり

按松月院鯨鐘施財の人名の中は當邑春日氏の人多し土人云く春日氏ハ

千葉家の末裔なりとて殊に此地は其氏族多く今春日平右衛門との

人の家は古文書ありといふ又田原記は天正元年十月下旬下總関宿戦ひの

時武州石濱の城主千葉次郎討死を此時石濱の千葉家女子をとり



吹上
觀音



なりし北条氏政の下知とて北条常陸介氏繁の三男を養子とて彼息女也
歎合せらるるも幼少なり本内上野に預り上野村の後に宮内少輔文能
あり彼与かむ板橋の城主肥後守赤塚の城主松戸越前守なりと云然時を
石濱の千葉家の城主幼少ありしゆり松戸越前守此城をあらうりか
御弟五卷平塚の弟下等とありて六卷石濱及び
弟七卷市川の弟下等とありて

吹上観音堂 下新座村あり臨濟派の禪刹なり福田山東明寺

と号を同邑金泉寺に属せり開山ハ普明國師中興哉浄西

和尚と称す當寺寛文十二年の鐘の銘は勸進普田浄西とあり縁起は
元禄中信州より此地に來り沙門浄西とあり尤不審なり

本堂本尊聖觀世音菩薩立像あり長八寸
相傳聖武天皇於天平年間行基菩薩此地に於て天竺の掠樹

と以て聖觀世音丈八寸の像を彫刻し赤池との池の傍に

安置ありと開山智覚普明國師鎌倉志曰國師ハ妙葩春屋と云
建長寺五十五世嘉慶二年戊辰 當寺を開創しあり安置せられり
八月三日化寂と云世壽七十八 此禪師ハ大永四年
りども其後弟三世玄嶺禪師住職の頃 甲申三月九日寂 寺院大に

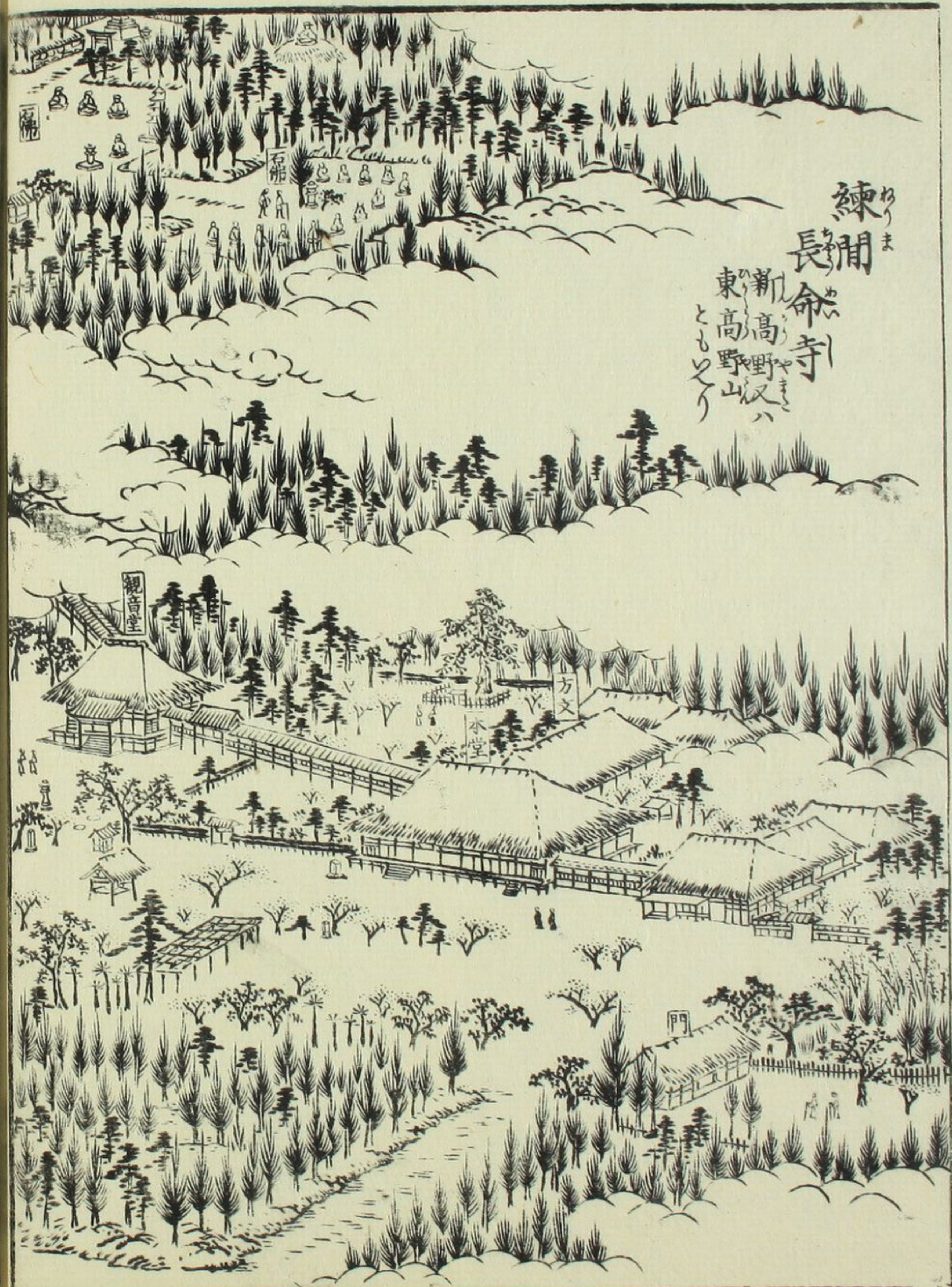
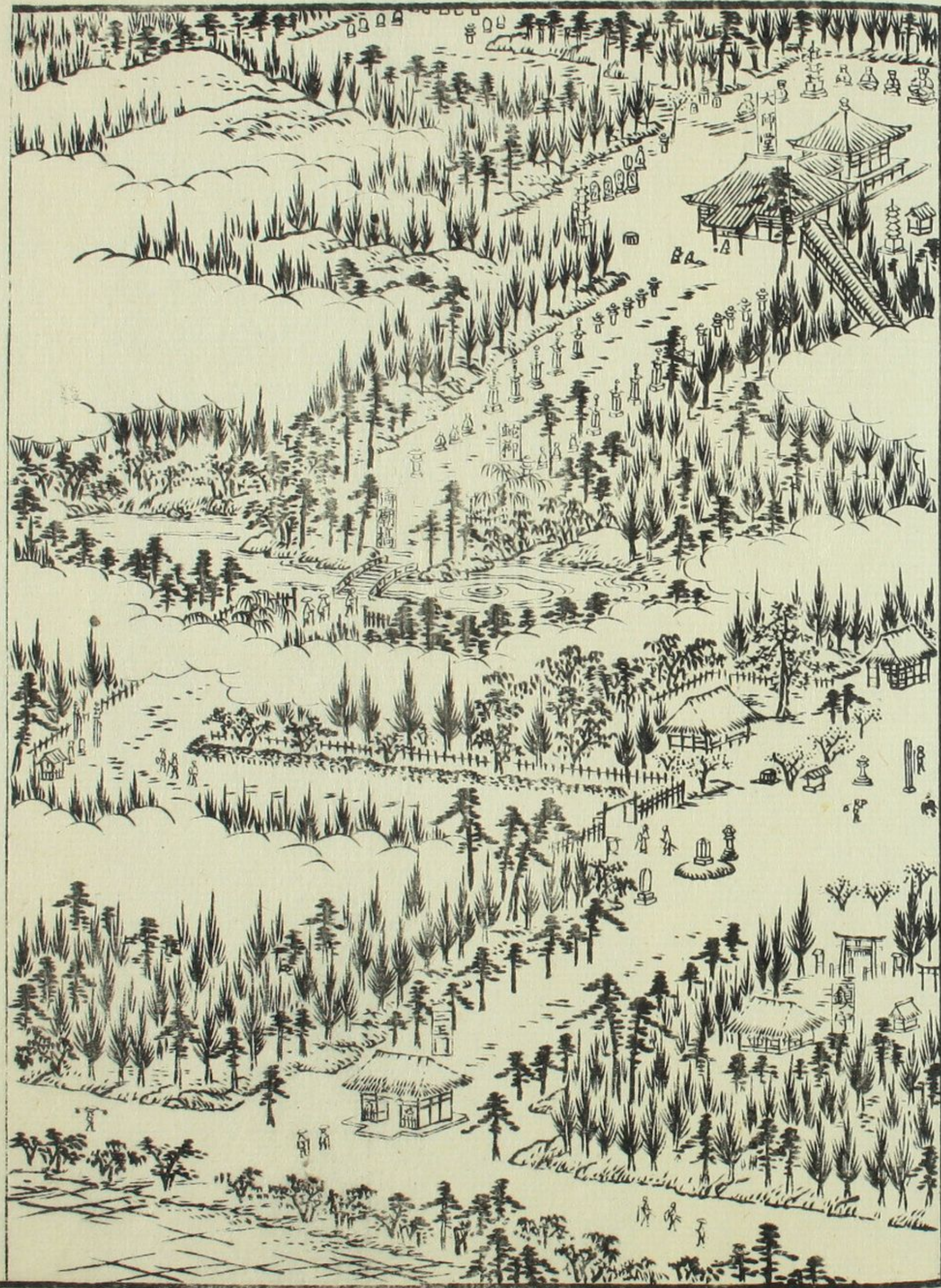
荒廢せり仍本尊ハ同邑金泉寺といへる禪林に移しありと

元禄年間信州より沙門浄西なる者此地に來り一頃
脚痛ありて行歩かむひびく金泉寺に止りありて夢中
靈感ありて其痛全快しこれ本尊の加護なるをを
報恩の爲當寺を再興し又新ハ沙丈二尺三寸の尊像を彫刻
し前の靈像とバ新き佛髻の胎中ニ籠りてありと
なり然る往安永五年丙申十二月十日夜二更の頃觀音堂の
内陣より出火し火焰盛なり衆人近寄りありてどかきハ既ハ
火中ニ埋れあり然る唯左の佛と右の佛とを焦のそゆく
全髻恙なし同邑ハ伊三郎といへる農民あり夜明て灰中ニ
探し佛尊を得たりとあり

同十六日に至り

古鰐一口 渡り六寸五分を厚サ二寸餘あり保三年丙戌十月觀音
堂再建ハ佛供養の爲開帳なりとあり時寺境赤池

其銘は曰く



練間長命寺
新高野山
東高野山

面 吹上聖觀世音堂用之

大工飯田弥七

背

武州新座郡下村福田山東明禪寺存貞代置之
于時元龜二年癸六月朔日河村弥二郎殿寄進

谷原山

長命密寺妙樂院と号し上練馬谷原邑にあり
按は河村弥次郎ハ小田原北條家の屬下あり永祿二年小田原北條家の
所領從帳ハ河村百七十八貫五百六十文の内五十貫文江戶新倉とあり
永祿より元龜天正の頃迄ハ河村氏此地の領主たりとあり存貞ハ當寺第三世の住
僧なり松岳存普右貞如南禪師と号し元龜二年辛未六月朔日ハ寂しと此人なり
帳ハ石神井の原谷原在家岸分の
地ハ太田新六郎知行の中ニ加へり

眞言宗

本尊ハ藥師如來の

像と安置せ慈覺大師の作なり慶安四年辛卯慶弐阿闍

梨といふ本食の沙門當寺を創基せ

阿闍梨ハ伊豆國の産北條早雲
長氏の曾孫なり増島氏に

俗稱ハ勘解由重明といふ天心中北條氏規ハ屬し豆州龍居北條
家滅せの後此地ハ退居して農民となり後其弟左内重國の子新七郎重俊に
家を譲り入道深衣の身となり慶弐と改め室を備け蓮中庵と号し元和
二年三月十二日ハ遷化せし時ハ年八十餘歳なり

觀音堂 本堂の西にあり觀音の像ハ行基菩薩の作あり和州初瀬
廟とも寛永十七年の九月長谷の池坊秀弐僧正當寺を長命寺と号けらる慶安
元年の冬 台命あり觀音供養の料として若干の田園を附しあり

鐘

同所不あり銘文ハ
當寺定昌師撰也

大師堂

本堂の西北數百歩あり是と興の院と稱せ今本堂より大師堂まゝの
間ハ廻廊とあり其廊中五百羅漢の小像と安置せり此興の院を
地持ハ同前庭より左右七規を六地蔵等の石像其石像五輪の塔
塔頂ハ増島氏累世の墳墓なり又堂の四隅ハ五重の宝塔立十三佛十五地
石像等の類ハ累々として野山の規制となり三絶の松と稱せりあり

今ハ枯失し樹林鬱蒼 弘法大師の法影を當寺開山慶弐阿闍
梨感得の靈像なり

寺記云開山慶弐阿闍梨紀州高野山より入り五穀と斷本

實と食ひ阿觀禪念をありけり年あり一夜大師夢に

告く曰く我昔諸國化度の時讚岐國にありて自像を作せり

其像ハ今同國多渡郡劔の山とて地の人家に存せり汝が本國

我山は遠く急ぎゆく彼像を得汝が舊里に安置し此山と摸と

あふ恭詣なりわきき婦女子等のあふ結縁せし然時を吾山に

登る等しわききと云々遂ハ阿闍梨其地に至りて靈像を

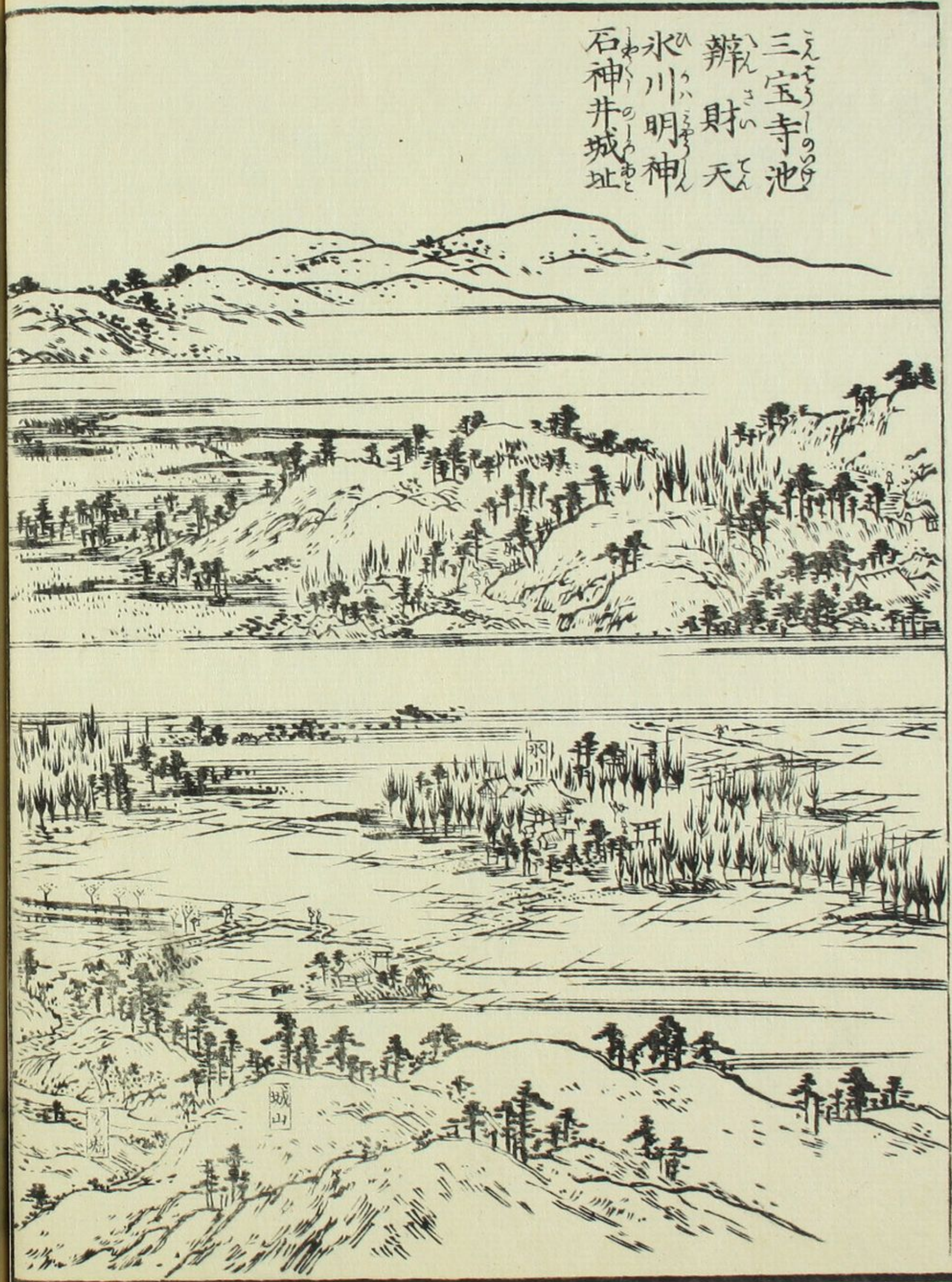
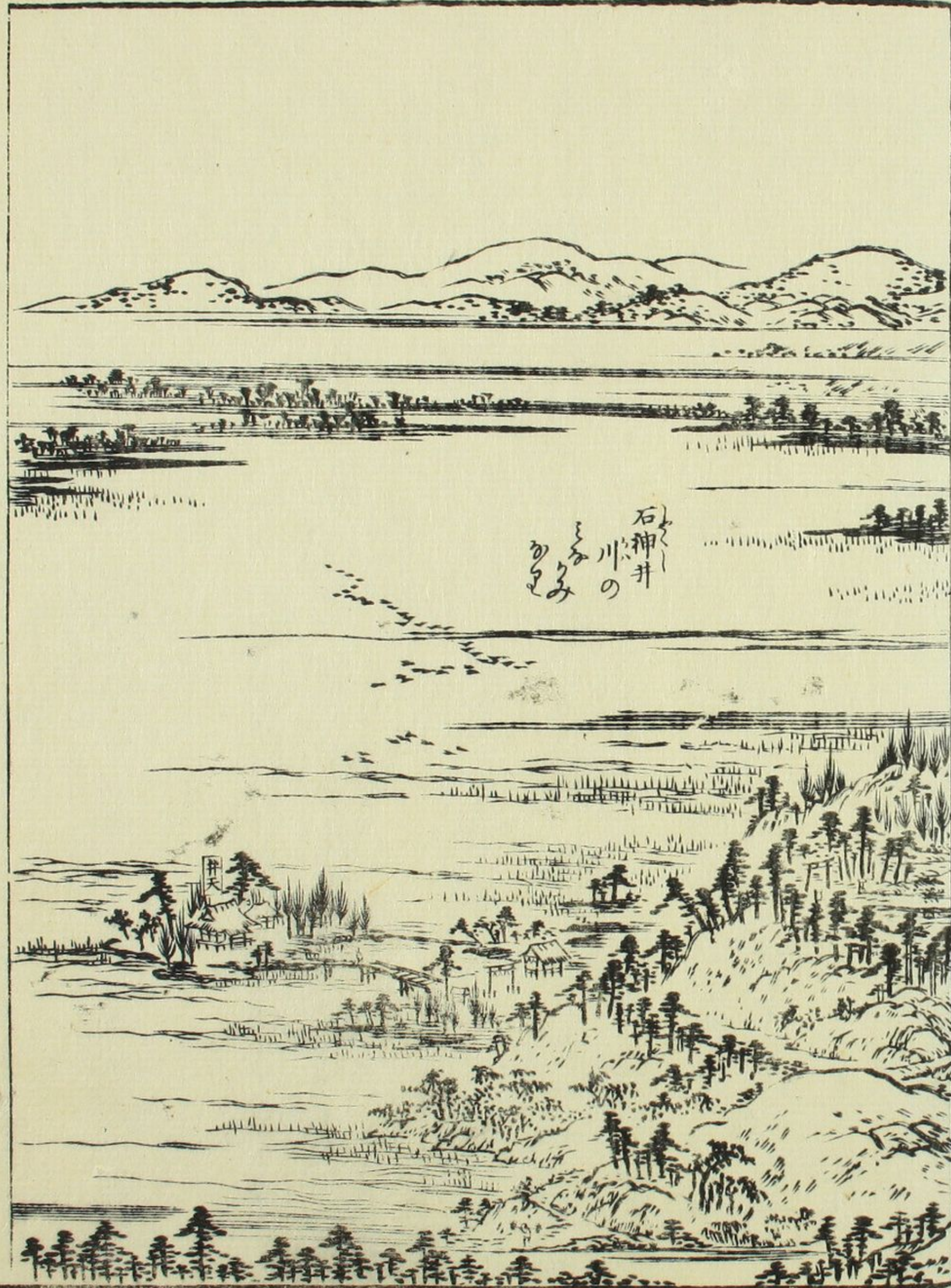
感得一奮里一宇を宮く是を安置しなる當寺阿闍梨化
寂の後も志を繼其子重俊新荷土を催し工商をうけがし
諸堂を宮く紀州高野山大師入定の地勢を摸擬して永く衆生
化縁の佛場となせしをあつしの世に東高野山又新高野
とも唱へしを重俊の嗣平太夫重辰より重俊に諸堂舎と修復を
其季子幼より三室を信し九歳の時より利髮得度
住職し正僧正に任じ學業あり小僧もあつし
當寺昔ハ東光觀照等の子院ありてまづ諸堂舎輪煥せし
覺を並べ實は野山の傍をわさしその年や火災不罹して徑
宮悉く鳥有とありり依元祿中再建ありしとも旧觀も復せし
りわくを今ハ其十が一と存せしの

龜頂山三寶寺 密衆院と号を上石神井村ありと真言宗の道場の
く頗大刹あり法印權大僧都幸尊應永元年甲戌に創建
たを往古ハ勅願の地あり故勅書數通を藏せし慶長十一

年丙午當寺第十世賴融上人檀主尾崎出羽守資忠といへる
人と共よ力を勸せ寺院修復の功を全しを當寺ハ則尾崎氏第
宅の旧趾なりといへる

本堂 本尊勝軍地藏菩薩 傳僧形中馬に乗したるハ影なり
其夜本尊住持の夢中よ告て曰く我願くハ化を垂し六趣の衆生を救はんといへる
と乘する所の馬ハ猶く止むと云々住持曉に至り堂中に入り拜せり其夜火起る
彫造しなり古の馬は安し其の事と云々箱荷祠 上代當寺の住持其權頂修の
日老狐鳴く寺院を廻り二三回其禍福とありしを言ひ然り其夜火起る
千體地藏堂 表門の左ハ幡宮 同ト右

寺寶 後奈良院勅書一通 正親町院勅宣一通
小田原北條家氏秀證文 當寺第七世尊海法印大僧正官勅許之
證狀 同ハ世賢珍法印權僧正官勅許之證狀 同當寺住職
勅許之倫旨 北條氏秀制札 同ト松制札 同岡入道江雪老
制札



佛舍利 寺僧の往古の記録を十一粒あり又持古歌録のハ

愛宕権現宮 同所西南の林岡にあり三寶寺本尊の垂跡を其地

東西百五十歩南北百餘歩相傳太田道灌の城跡なりと土人ハ字

城山と唱ふ前ハ開川を懐き後ハ進井を負ふ北ハ小阜あり

富士峰を望む南の方數百歩を過く直塘あり道灌塘と号く之

云江城ハ至るハ直路と云と云云

氷川明神祠 上下石神井二村及び田中開谷原等以上五箇村の鎮

守とて例祭九月十九日なり江戸芝の神明宮より社人巫女等来

てて神樂を奏て是旧例なり又同日廿日ありて神事修行せし

三寶寺池 同所ありて回帶凡五百三十餘歩中ハ一小嶼あり則

池靈辨財天の祠を建り此池水冬温夏冷あり洪水は溢る

早魁ハ酒冷湯汗として數十村の耕田を浸漑下流ハ板橋王

子の邊を廻り荒川ハ落會へて

照日塚 同所あり嗜老相傳當寺開山曾在京の頃八月十五夜雲上座外ハ侍

此塚ハ後ハ中蔵ありて照日上人の号と賜ふと云

石神井城址三寶寺の池の傍あり其地北ハ池水を帯びり大手と稱

此城ハ住とて

或人云豊島家譜ハ豊島三郎兵衛泰友ハ子三郎兵衛入道泰景

の跡を継ぎ武蔵國足立多摩郡倉豊島五郡を領し石神井の城ハ住

下ハ載たり如く文明九年四月十八日太田道灌の兵ハ攻落され

北條家の臣太田新六郎石神井の地を領し

石神井明神祠 石神井村にあり三寶院奉祀を神體ハ一顆の靈石あり

往昔井と号す其土中ハ是を得たりと云

依石神井の地名あり起る

練馬城址 上練馬村愛染院の側にあり豊島氏某ハ居城の地なり

石神井神明



一とつ以ては、先の石神井の城跡の跡下と合せ、永祿の頃、小田原北条家が
 新也、練馬を領する由、北条家の分限、懐ま、豊前方の地と所領の中、又金曾木
 といふ人の所領の、り、豊島清光寺分練馬、り、有之、也、注、せ、ら、し、
 鎌倉大草紙曰、文明九年正月十九日の夜、頭定憲房、定正三人、小勢
 め、を、叶、ま、り、と、上、杉、方、申、合、上、野、へ、打、越、大、勢、を、催、し、景、春、を、退、治
 せ、べ、し、と、太、田、道、真、と、殿、々、利、根、川、を、渡、り、那、波、の、莊、へ、引、退、景、春
 一味の族、中、を、武、州、豊、島、郡、住、人、豊、島、勘、解、由、左、衛、門、尉、同、弟、平、左、衛、門
 尉、石、神、井、の、城、練、馬、の、城、を、取、立、江、戸、河、越、の、通、路、を、取、切、云、く、又、同、書
 曰、文明九年四月十三日、道灌、江、戸、より、打、ち、出、豊、島、平、右、衛、門、尉、が、平
 塚、の、城、を、取、巻、城、外、を、放、火、し、て、歸、り、所、は、豊、島、が、兄、の、勘、解、由、
 左、衛、門、を、頼、り、る、間、石、神、井、の、城、練、馬、の、西、城、より、出、攻、来、り、れ、ば、太、田
 道、灌、上、杉、刑、部、少、輔、千、葉、自、胤、以、下、江、古、田、原、沼、代、袋、と、云、所、小、馳、向、ひ
 合、戦、し、て、敵、ハ、豊、島、平、左、衛、門、尉、を、初、と、し、て、板、橋、赤、塚、以、下、百、五、十、人
 討、死、せ、同、十、四、日、石、神、井、の、城、へ、押、寄、責、々、れ、バ、降、参、し、て、同、月、十、八、日、小

罷出對面まひりだす一々ひとひと要害破却やうがい却かえりき由申よしまうあつ又敵對たてまへの様子ようすよ見え
くまバ攻落せめす云い

立野舊跡たちのふるせき今指所いまさしどころ一むととととも新座郡あたらしくり屬ぞく引又村ひきまたむらの南みなみに

隣りんに館村たんでむらと稱なづる地ちあり是これ其舊跡そのふるせきなるん
自みづから古名ふるなをうしひる中なかつ古ふるに至いたりて又またありて土人とじん云い黒馬川くろまががわといふと中なかつに狹せまく梁瀬りやうせ

多知たぢとも多天たてんと稱なづれし字あざも今いま八館村やつかんむらと更さらなり
川か白子しろこの邊あた近ぢかの地ちまへて古ふるの牧野まきのの田いり跡せきありと云い依よて考かんがへるふ

其地水濱そのちみづのひんやと地勢ちせい尤なほ馬まを牧かまし便たすよりとと土人とじんの説せつ頗たう提たいあるも

似にたり同名の地足立眞美 又大江戸西の方此地は練馬竹馬澤内牧

馬馬川うまががわ引馬ひきま多おほ今いま馬多まおほと馬引澤うまひきざわ駒林野こまばやし牧まき今いま野馬のま等らの地名ちのな多おほきも

牧野まきのよ因よて證あかしする也なり

拾芥抄しゅうがいしょう曰い年中行事部なかつしぎぶ 八月二十日はつがつにじふにち韋武藏ゑぶさう小野おの柳馬やなぎま中なかつ略りやく二十五日にじふごにち韋武藏ゑぶさう

立野馬たちのま 同書曰どうしょい牧名まきのな 石川いしかわ 田比たひ 立野たちの 小野おの 秩父ちちぶ 己上武藏こじやうぶさう云い

公事こうじ根元ねもと曰い 八月はつがつ廿日にじふにちハ武藏國ぶさうのくに小野おの柳馬やなぎま四十足しじふあしをひく其外そのほか秩父ちちぶの所馬ところま

後撰集ごせんしゅう 廿足立野にじふあしたちの所馬ところま十五足じふごあし毎年まいねんよよめてしる云い 兼輔かねすけ朝臣あそみ左近さこん以持もちよとてしる時ときむとては所馬ところまむとてふ

新勅撰しんしつせん 日ひをたてハ娘むすめ風かぜをてて持もちのたらしむるの事ことをいふなり

續千載つづせんざい 花はな房ふさのつにハ秋あき昔むかしの立野たちの事ことをいふ男おとこ麻あしかたの事こと

夫本つまもと 今いまもそのとらふ所ところなる娘むすめの立野たちの事ことの約やくハとて引ひら

同どう 族しゆ人の立野たちの事ことの約やくハとて引ひら

同どう 持もちの立野たちの事ことの約やくハとて引ひら

伊平家いへいけ奇合きあひ 今いまもそのとらふ所ところなる娘むすめの立野たちの事ことの約やくハとて引ひら

古今ここん六帖ろくてつ 今いまもそのとらふ所ところなる娘むすめの立野たちの事ことの約やくハとて引ひら

藤原ふじわら 忠房ちさふ 信實しんじつ 入道にゅうだう 太政大臣たいていだいじん 新院しんいん 冷泉れいせん 太政大臣たいていだいじん 公朝こうてう 有重ありしげ 通平とうへい 貫之つらゆき

膝折里 新座郡に屬す江戸より河越へ至るは街道中々白子まで

行程一里驛站あり所澤よりを良し當り其間三里あり

ひし 北条家の分限帳より六郷殿所領とあり中々河越内藤折世貫文とあり

四國雜記 例の御社と云ふ里より市へ至るは河越よりなり

商人のついでと云ふ種々の市は物多し借れあり

此和奇の脚氣と云ふ病は家寄或は家寄は作ると正字は此地の農家

古来より飯器と云ふの具なりと云禮記の註小節ハ食を盛の器なりと云ふ

協しと云ふ茶碗を入る具と云道典註后の註ハ膝折といふと云ふ

家寄を脚氣よりかされり秀句あり

岡宿 引又の宿より北の方内川といふを隔て向ふあり

引又の新座 此地ハ古の興州街道中々其頃相州鎌倉への通路あり

今の中仙道上尾浦和等の地より入て宗岡引又及び野火留の南を

折り清戸の邊より多摩郡の府中へかき今の大山通道といふを

徑て鎌倉へハ移しと云ふ 此地ハ用水あり引又の宿の中を流し内川の橋

を通過し宝永の頃秋元侯川越を領せり野火留の用水を

引又の宿より其頃白井某ある人此地の懸架を工夫なり四十八段あり

たりといふ此故ハ土人字とい

つろは掘り種せり

四國雜記 此の岡といふ所を通ると云へり

夕煙ありと云ふをそそり家寄くのひのふの言

内川 水源ハ多摩郡秩父郡等の山谷より發する所中々入間郡に

入る川越の北を東流し引又と宗岡の西を梁瀬川の水流と合して

内間木の南を流し荒川は會するものをと云ふ内川と稱せり

荒川ハ入間郡の北の際を流れ此川宗岡引又の間に至ると云

川ハ其南を流すゆゑ内川の号あり

引又と十五間ありとあり引又の方ハ船路運送の地あり

江戸迄凡九里計あり

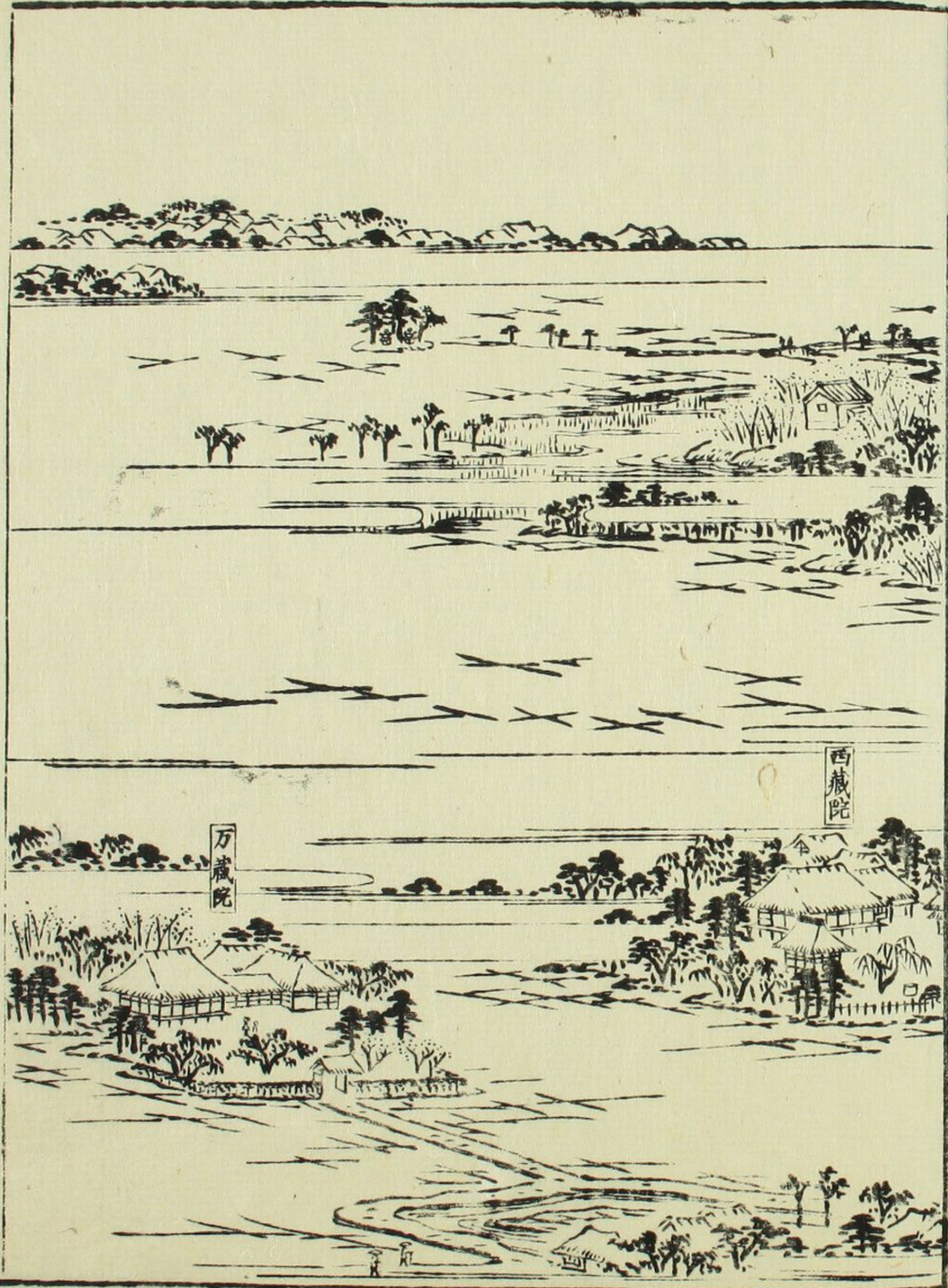
十玉院 南城山ハ幡寺と号し宗岡より十八町程を隔て西北の

方下南畑村あり本山汎の修験中々本尊不動明王立像一尺

七寸脇士二童子ハ一尺半ありて共智證大師の作ありといふ

此地ハ難

軍に死せり曰此處に當院あり同郡水子村あり後清戸芝山の地に移り又難波田



河越の松山に今其地一宇と創立し観音寺と号せり此南極あり
との地より之跡と覺し一寺と當寺より百歩あり西の谷は櫓下と号せり地あり方
十五間あり一丈三尺あり土人相傳ふ古の櫓の跡ありと
今此所は稻倉と置けり此下は櫓の跡なり残りあり其餘は空堀の形と存せり
故に此地の字と城と号せり

回國雜記 武州大塚の十五の夜のとほり江山のくまひ

山攀峻險海波瀾 到處多其行路難
疎屋終宵風雪底 凍雜嘆夢月西寒 道興准后

按此紀は西とあり高麗郡藤井の事と云ふべし又或人云大塚の十五と
はゆけくかきしるを十五院古水子村ありと云ふ水子村の川地名大塚と云ふ所
とてかくわかししん状と云ふ

古文書六通を蔵せり 其一文明十二年七月二十七日清平年中行事職の事申請
又其一ハ七月二十六日と云ふ又其ハ文明十九年正月十八日の證文中より上は等しき文義あり
又其ハ七月二十六日と云ふ又其ハ文明十九年正月十八日の證文中より上は等しき文義あり
又其ハ七月二十六日と云ふ又其ハ文明十九年正月十八日の證文中より上は等しき文義あり

又其ハ七月二十六日と云ふ又其ハ文明十九年正月十八日の證文中より上は等しき文義あり
又其ハ七月二十六日と云ふ又其ハ文明十九年正月十八日の證文中より上は等しき文義あり
又其ハ七月二十六日と云ふ又其ハ文明十九年正月十八日の證文中より上は等しき文義あり
又其ハ七月二十六日と云ふ又其ハ文明十九年正月十八日の證文中より上は等しき文義あり

氏照領分年行事を撰りてを撰院及任事記文と
しり月日仍後日状如件

天正七年庚辰二月三日

十五坊

氏照判

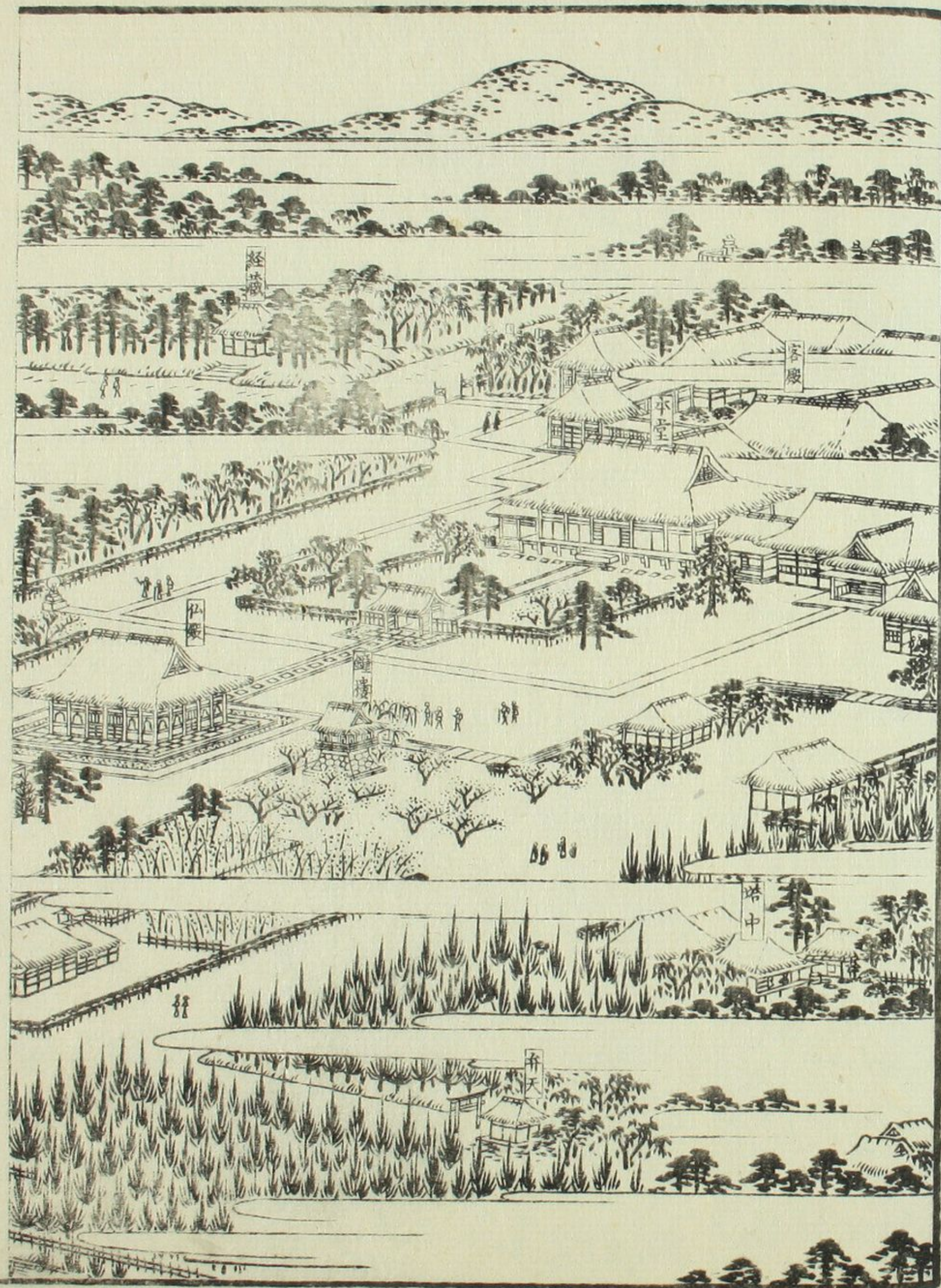
難波田彈正舊館地 十五院の地を云 難波田今南波田或ハ南極と作る此地
水損の患ありて終に官舟の 難波田彈正忠ハ扇谷上杉修理太玉
免を降し文字とありてありと云ふ

朝興の家人ありて同國松山の城を守りて天文十五年四月廿日
河越の夜軍は燈明寺口ありて古井へ墜入りて横死せり 小田原記等
今河越の市中に遊行二世上人真教坊開創せり古刹ありて 燈明寺と作る

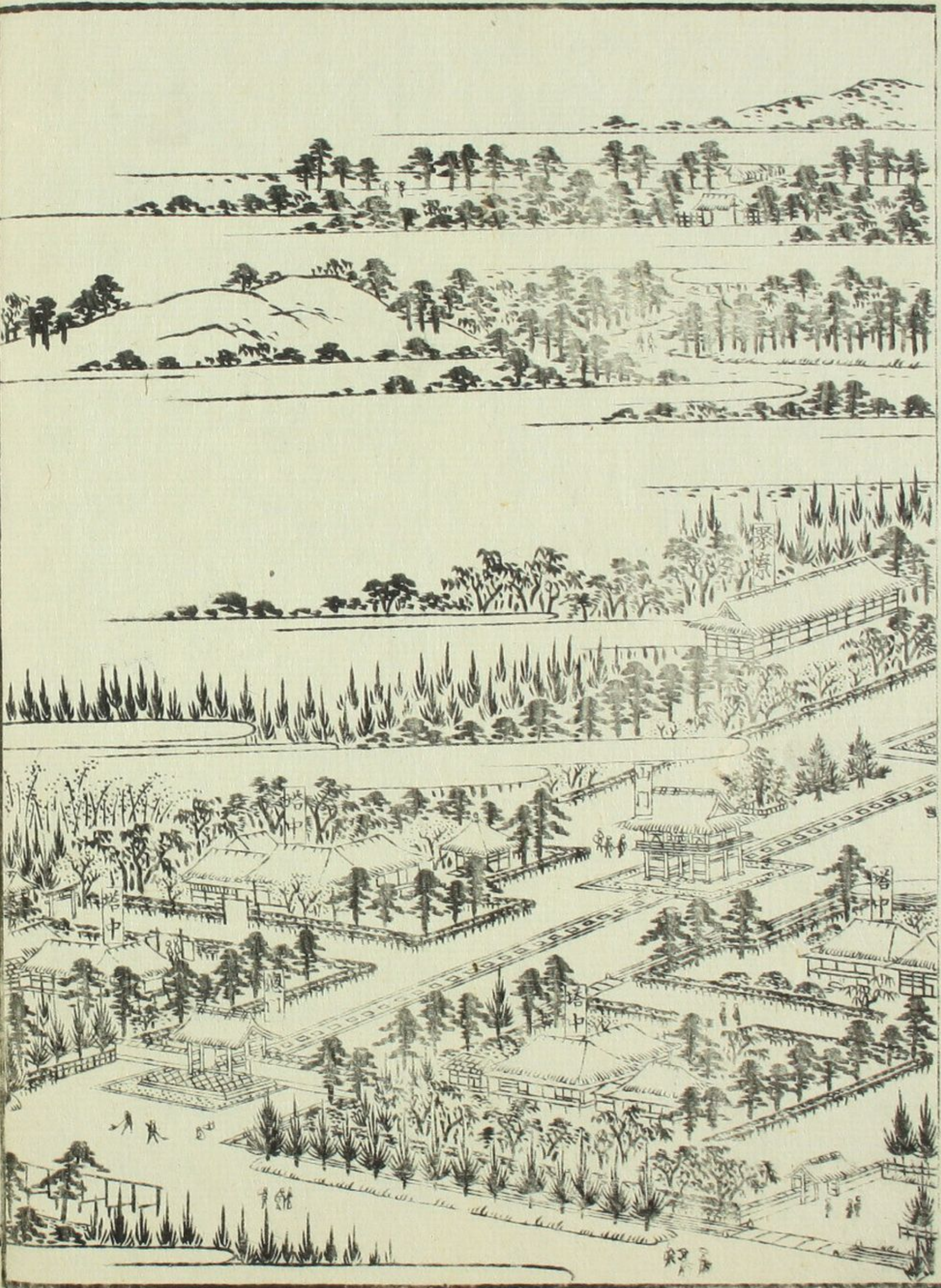
東明寺と号するもの其田跡ありて燈と東とを考ふ 彈正忠の墳墓と稱
るもの今水子村日蓮寺とのあり 墓碑は日蓮大居士とありて天文
五年丁丑四月十六日と銘し

西蔵院 同所十五院より四町斗西にありて本山派の修驗やて東廓
山觀音寺と号する正觀音ハ座像沙長五寸八分弘法大師の彫造

中へ古大師此地に至るまで一頃靈夢は依くらんと造りてと云
仍今堂宇ハ新造なりて應永年間古谷七郷の領主中筑後守



平林寺



同額
石川
華多

金鳳坐

愍門額
同筆

凌霄閣

客殿額
同筆

孚林禱寺

鏡樓
佛殿の
前あり

額
近水臺
松平
豆州
侯筆

鐘銘

大日本國武州崎西之郡岩葉山莊金鳳山平林禪
寺良之健產無家華之族吾河內法參州無為郡
吉壽與鳳山其功德也士有孝心感命治鐘亮
鐘以數家門之榮著幾萬年矣祝也積岳餘慶
猶根清淨鮮百八拱寺門吼則不孤德兒孫億
天曙樓閣外明月寺前檀越不孤德兒孫億
兆于時元和九年癸亥九月十日雲峰宗怡誌
寺者同州在岩葉城西寬文初移地於此辰堂
載寺記于延寶甲寅之夏來司其事者有尺且
外微火鐘樓壬戌之冬遂命冶鑄者有尺且
暮病諸天和壬戌之冬遂命冶鑄者有尺且
全該制及其銘願輪永保寺門中興之基業祝
切乘祖越初度之願輪永保寺門中興之基業祝

戴溪堂
櫻車道



當寺開山石室和尚住山の願
 寺の鎮守の幡宮の社あり
 江那藤原中務丞政行慶雲禪寺此丘至光小谷野三郎左衛門尉李郷奉行赤木
 左近將監朝貫保屋山城守修理の逆井尾張守以常宗とあり古の關東
 共上亂獲あり頃陣撞撥ふ奪ひとせかふあやや河崎勝福寺の港
 養心庵あり内よの観音の像と安と堂教弘安四年辛巳と贈一松禪堂

云劫石有消日洪者無盡時遠也大也
 武州新座郡野火留莊金鳳山比丘然雲禪宜書
 吾鳳山嘗有梵鐘一口其型小而且有蒙際樓末
 之華飾與樓不同時提疏普德有緣體天加護賤不己客
 之梵音大而器須圓成山銘野唯賦者獨祝速大峰然雲兩祖
 維時寬延三年龍冶工武
 西江山比丘東嚴禪海誌焉
 和泉守藤原政時

憤矣事未師崇初以捆峰聯分重刹善師三臘抱集山更善十殊容
之稍之芒書也七覆載禪芳支建匿之無月月素若侍師庵一七貌
言有輩安賜左日蓋以師軒折也山以妥朔遙懷于從呵托月十七生
慷志悉得者奉也聖至其函泐墾日為像日奉負巷慧々未後六夏玉
慨氣聯延旌師扁以卜老北委關金可之賜聘恩唯明而笑事日臘柱
不之翩至其像曰瑾吉師之給曠鳳圖區殿書極哉護笑和曰也一
容存而於三以戴壁架照隅庖塾寺也願見夙矣吾送和曰也一
刊必去此率莫溪匪梁雲有涵樹日距言命夜積師靈尚即示十隻
者效抵而坐之堂日翼和隙元之平柳數入戒愧棄骨便今寂九尺
凶其今自關扁中而然尚地早松林鹵椽翰途性世寔起甚前一實衆
慮觀吾明也題位告僚合即不杉前吾十構顧庚莫已黃為持日寬皆
數已止於噫梅供竣東議可竭導伊十獨謂寅可四壁下候請文驚
十伏一世時花範時僅可就人水豆里獨謂寅可四壁下候請文驚
扁念子乎不關金正三之而各玉守外有身二與十山火答千十異
今吾遺回俱主大德楹乃起便川源武源已月計七有閣曰朵二悲
略師耳意霄乃士丙間庀匱之控君州為充直詎率天維日和尚上悼
表一率舊上普導申方工住其之信地政選抵謂於外於午尚上悼
而生又勤恩照師三之護持子紆綱有聞其武已茲老聖打於子已
出忠老共之國歸月菲木雲院迴之鉅而奈城丑空人壽三廣冬春

他筆非時後持然尚猶如嘗礙時假司才戊流夢落立國甲七軒長
凍書病健省就而開如書謂其寬還源之戌亞之々號師命月懷崎
抑曰何啖觀山往山鍾法濟緣文崎正德九明同山天座有普戴奉
梅馨事猶國中不豐王正人術三庚重之月曆塵袍下下絕照于行
花々藥壯師起憚之墨鋒及同率子欲笑侍乙也躡一薙何國曼橘
影塵為率途靜餘廣蹟遍物道癸入師出國未並躡間添矢師公正
接々倒至此疾為出東亦神薩治三幻錫時東月儒爽師率脫聘芟請
却傷卧此疾為出東亦神薩治三幻錫時東月儒爽師率脫聘芟請
江海匡稍作憇力師絕氣本不月寄事革朝從釋殊謂臘白東向留
南邨牀械而息備邀品含行視八山阻之武侍博可棄月用渡日馳
白不吟衆回之至駕也芒應方日三不右戒普決啣儒八畢大東書
玉忘哦勸遣所豐虛乙獲機活也載果執宰門典而歸日殘振不上
魂殘自服侍自主半已其施潑嗣出萬政官掌籍無釋也喘法歸乞
書夢娛藥徒扁感座春片用施後關治源長書識可酬諱狀威之師
罷繞忽不祖曰師以雪紙視藥居止二君者記者計同曰求師歌便
溘空朝聽命白老而師即峰隻老箇不幾率信莫萬云者一性出嘆次住
鬻軒起曰代雲而師即峰隻老箇不幾率信莫萬云者一性出嘆次住
而啞坐報書室精輒非珍路稱地灾亥暨嘆元地天風字乃衆甲濮
逝任索身平厥勤翩和襲至神無發病有師率之白光獨歸六午澹

陳平為用慕否於如踏遭之哉挾藩地身與突天被於極之統之
身跡所盛光之耶聲師海時言只勢大中與高忽若平上軒成中々其
非因親固吾誠信詩所終亂非此子創妄作法四妖重顧御下而業明高
漢作災謂不遺欲仰而世名外苟之私繁弟義亂相王姚濛氏體盛乎誇皇
使銘微不安事以乞仰能業狀於憤萬世兄蔓逆而天孫無兼一至命變之僧月夜見成尊中德至天
誓曰其矣勤之或鉅公斯皆自見而風復公光矣確乎哉侃天々下長燕照也敢也高化明土數
不心然求之弗克寧將自不德一莫能慨原以也者播磨以也
生事照然者不恩避文之繫恭志
選然者不恩避文之繫恭志
出然者不恩避文之繫恭志
處然者不恩避文之繫恭志
惟然者不恩避文之繫恭志
義然者不恩避文之繫恭志
備然者不恩避文之繫恭志
嘗然者不恩避文之繫恭志
險然者不恩避文之繫恭志
難然者不恩避文之繫恭志
朱然者不恩避文之繫恭志
家然者不恩避文之繫恭志

多士弄矢河山清宵撫躡踐跡重關豈道佛性
顛頂其顛醉爾遺靴後人追攀天開武藏沃墊
遙環金鳳攸止碧水潺湲
享保三季戊戌四月穀旦
弟子高松李江直英等拜建

當寺の境内と周流する所の水ハ兼應元年野火留新田墾闢の
時伊豆守松平信綱朝臣ニ里餘り南の方小川村の地ハ
多磨川の水と分るこゝ引しむとわつる
野火留用水と宗岡と領せり
多磨川の水と分るこゝ引しむとわつる
野火留用水と宗岡と領せり

安松山長源禪寺同一西の方安松材ふあま洞家の禪林ありく八王
子の乾晨寺は属せし開山ハ傑用禪師徳英大和尚と号す
元龜
壬申七月
精舎中々大石道春公の草創ありとありしが
後卒の年月忌日と詳せしむる
本尊釋迦如来
座像七八寸計の本佛なり
作者洋當寺ハ北条氏照の靈牌也

まはるものありて古色のりて文字つらうこし

飽間齊藤氏戦死墓碑 野口村の中西宿徳蔵寺と号する禪院の

後園 浄家の禪宗ありて江戸赤坂の種徳寺に属せり相傳へて永祿 竹藪に

中ノ建あり 三季に創立ありといふも 四代に比ぶく詳なる事と傳ふ 狭山の續なる山の中

波門中興せり 今ハ徳蔵寺の寺境に 移ししる所の草庵の岩のこのりて

高廿五尺計
碑面三尺五寸餘
幅一尺五寸計

飽間齊藤三郎藤原盛貞生年未詳進退陀佛
於武州府中五月十五日討死
元弘三年五月十五日 致
同孫七家行廿三同死飽間孫三郎
窓長世五於相州村固十八日討死 執筆扁阿弥陀佛

飽間氏の墓碑ハ實ニ五百年の蘇苔を帯るといへども三士の雄名を
今ノ埋まれば七十載ノ不朽なり 執筆扁阿弥陀佛が書ハ暗ニ元人の
骨法あるを以て普く風流好古の徒此地に至ると称揚をばふもの

少

按元弘三年ハ光嚴帝の正慶二年癸酉なり此年後醍醐天皇隱岐國を出て
歸洛し重祚の後ハ正慶の年号を用ひらるる元弘三年とて此年新田
義貞朝臣相模入道と云ふと同年五月十五日武州府中の分倍河原へ押寄入道の
舎弟四郎左近大夫入道慧性と合戦を義貞打負く終ニ堀兼とて引退く由ハ
平記より考へたり太平記ハ此人の名を注せざれども
此日ハありて討死せり此碑ハその明

將軍塚 徳蔵寺より四五町を隔て北の方狭山の嶺の終る所ハ

あゝと塚上ハ老松一株雜樹ニ交りて繁茂せり 此地ハ余村及び余川

口村ニ属 元弘三年癸酉五月 新田左中將義貞朝臣上州の笠掛野ニ

於て此地ハ屯一歩を隔て東西ニ塚を築き旗を建て其備へを

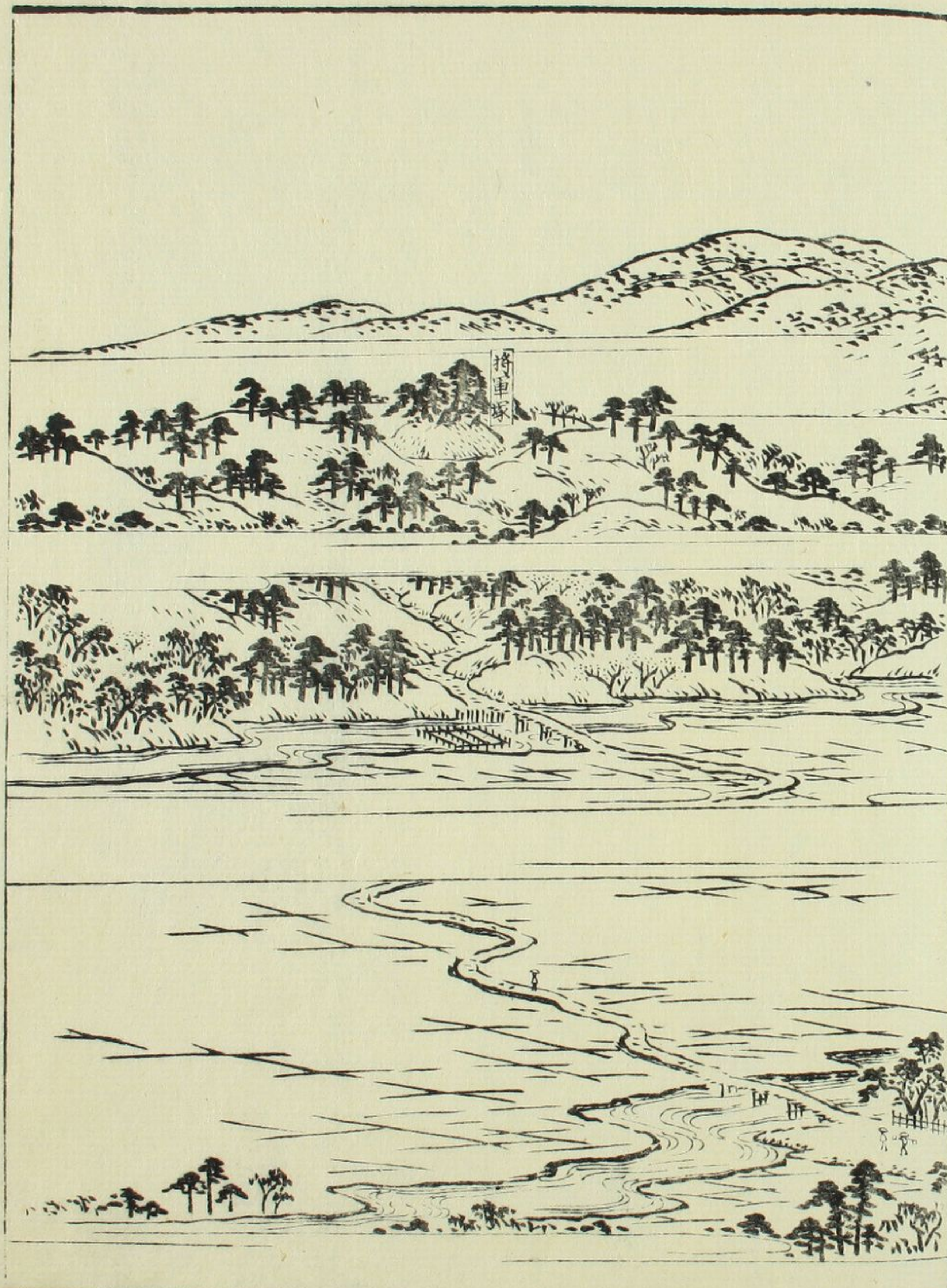
なす越後信濃の勢を集め竟ニ朝敵を平げたる一奮跡なるに

土人其武功を慕ひ將軍塚と唱ふ 西の塚上ハ義貞朝臣の靈を祀りたる

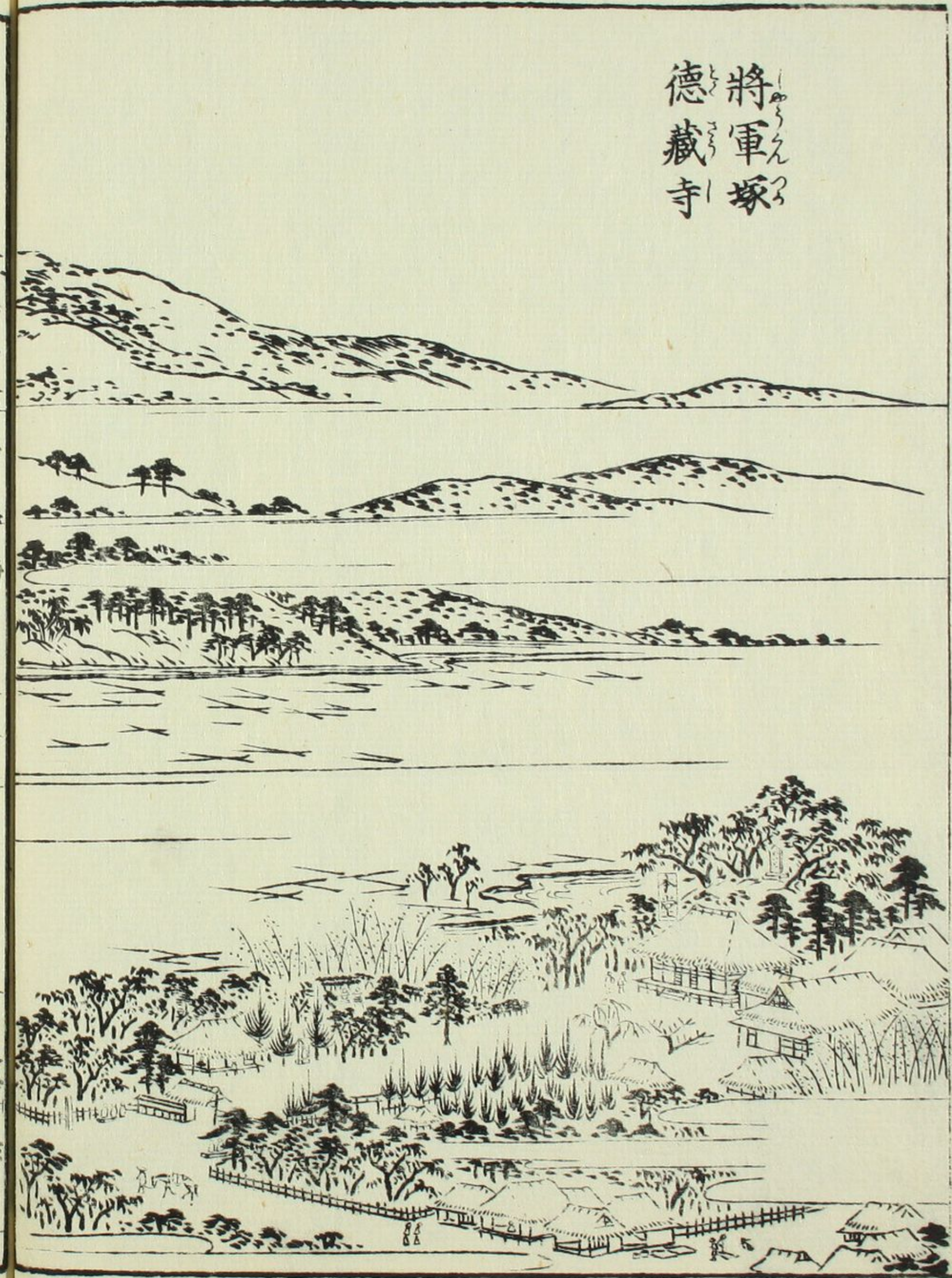
狭山の池 箱根ヶ崎驛舎の西北の脊ニ存する所の池水を狭山ヶ池の

舊跡とす然もども箱根跡ハあるものを箱の池といハ狭山の池と称

するものハ狭山の麓ニありて一所をさそふありて今も亦も三所を



將軍塚
德藏寺



この山ありて土人何をも狭山が池と称せり次は奉る所の北國
記形小山の裾とのあまきある一清少納言曰池ハ狭山の池みく
まとの一弘のまをうく地味ゆるあやあらんなどありくみりあやめ
ぬなハを名物とを
三後 菅蒲

奇説

あやめを狭山池のまを根とせしむり此れかひを引

兼昌

日

みくまを狭山池にたよりやむらひひれぬま柳の糸

隆祐

日

まゆを狭山池の裾ぬかひのまをひけなをそれかや絶ま

仲實

松葉集

武蔵なる狭山池のみまをひけなをそれかや絶ま

ゆるけ一狭山池のまをひけなをそれかや絶ま

秀能

新撰六帖

狭山のまをひけなをそれかや絶ま

北國記行

ゆるけ一狭山池のまをひけなをそれかや絶ま

ゆるけ一狭山池のまをひけなをそれかや絶ま

光惠

狭山

久米村より發る西の方箱根崎近凡三里は餘る連岡と云

同一東の土人一名を尾引山と稱せり嶺の徑路ハ多麻入間の郡境小

して南より北より麓より登る所二百歩あり河を或人云武蔵國

風土記殘篇ハ多磨郡北ハ向の岡を限るとあるに於て此長岡を

以て向の岡とて可なりと云

群山ハのまも狭くして堅長きとの數條あり此故ハ山と稱せり

千載

十月間狭山を登ると此山ハ平の絶るはまをうとをみる

顯季

續古今

秋風ふなひく狭山のまかつてゆるゆるゆるゆるゆるゆる

後鳥羽院

新撰拾遺

ゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる

前中納言 匡房

新撰古今

ゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる

家隆

大木

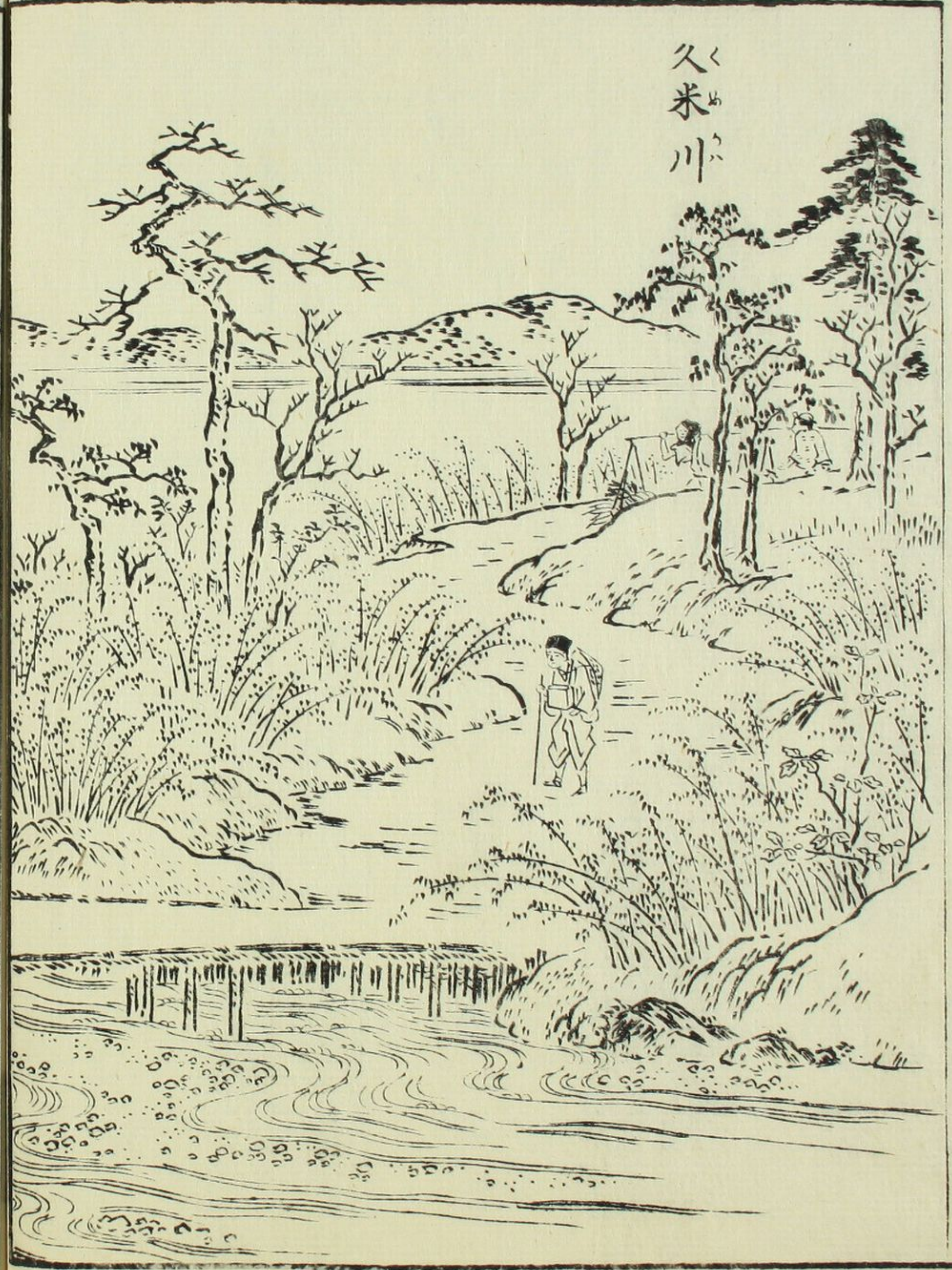
ゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる

匡房

八國山 采村ハ屬屯將軍塚の西十八丁をりて同一狭山の續ハあり

て少く秀出する西を号くそれぐる雲を凌ぎ碧空に連るおもあり

久米川



回國雜記

くめ川と云所
まへり里の勢く
み八井 なること
まへりたつ川
と流れておる
ひまふとあま
しうれハ

里へのあけ
川と

あみくれよ

ありのなハ
あハ

こゆり

こせせ
とそ

道真推后



曼茶羅淵

日蓮上人佐州
配流の時此川水
と以て曼茶羅
と書しむといふ



けりともあふ登るとは眼を眼界蒼茫とく實は駿河伊豆相模
甲斐信濃上野下野常陸等の八國の遠嶂と一望は覽る故なり
此名あり

久米川 久米川村の西回田村清水村等の地より發して二條の小流野口

村徳藏寺の裏の方より落會ひ糸川村を流る故は久米川と号す

又二瀬川と号するものも入間郡糸村秋津村等の地より發して

多麻入間の郡境を流久米川村より落合夫より一里計未至り川中漸く

四五間より共引又新座の辺を経て未ハ荒川は會流を正慶寺

徳の昔武藏野合戦の時多磨川及び入間川糸川より陣營を假

たりしは曠野ゆき水は急き故はかく水辺はたよりし多磨川

又云堀兼の井杯よるも古水は急き故はかく水辺はたよりし多磨川

回國雜記 ちかく川といふ所を里の家々井をめぐりて

里人のとめく川といふれはありなはるハ水邊をたよる

大龍山永源禪寺 糸村にあり八國山より北の方小川の流を隔て

五丁斗ふあり曹洞派の禪林中より龍谷竜隱寺に屬す昔ハ鎌倉建長

天文年間大石氏開創せる所の精舎ゆき開基大石氏法名を

英崑衛俊大居士と号 安松の長源寺に衛俊を 開山ハ一種長純禪師

と号 北条氏照の舎弟ありと云 永祿八年二月廿七日示寂す 本尊釋尊ハ二尺をかり座像なり

行基大士の作ありといふ

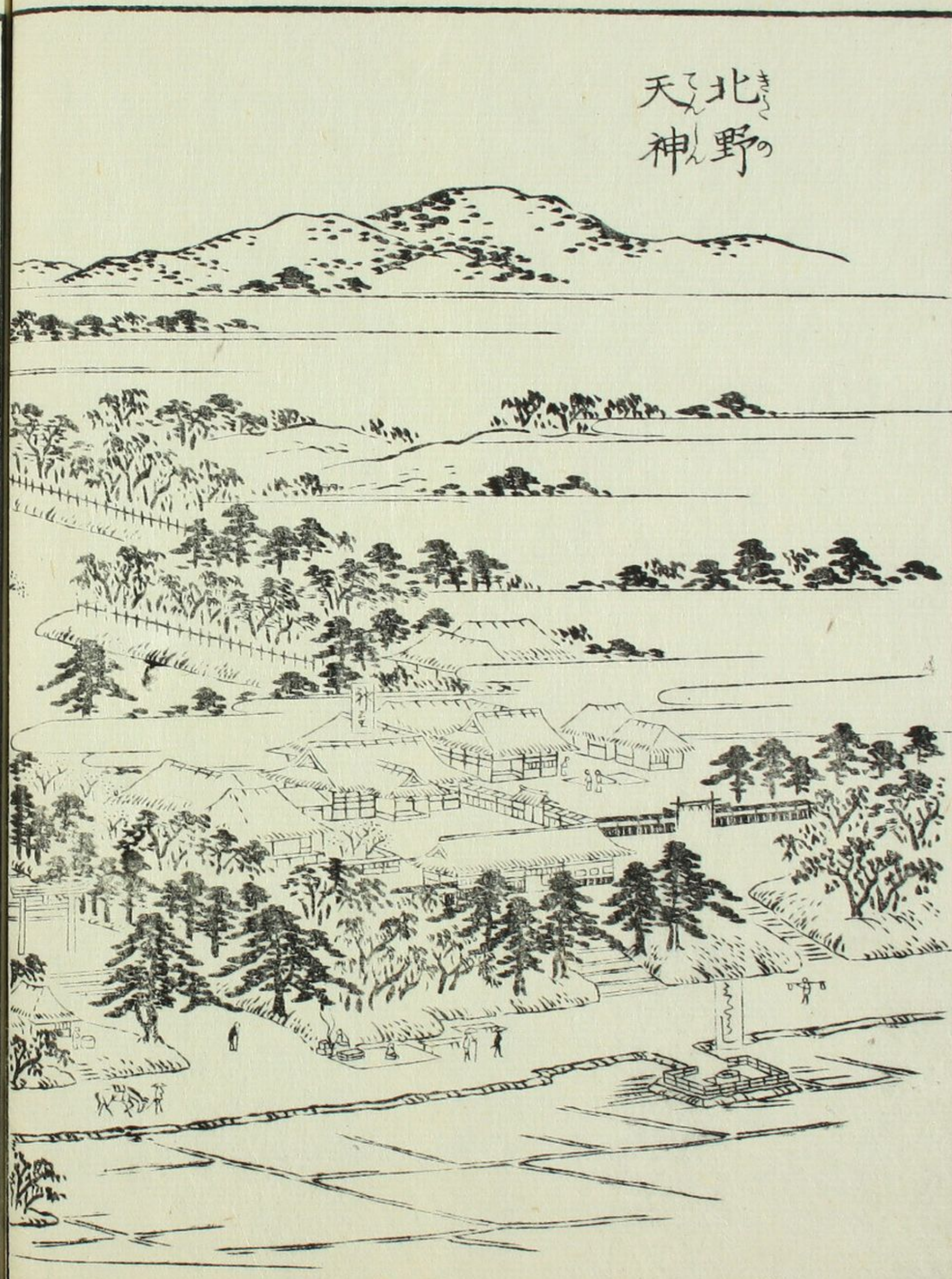
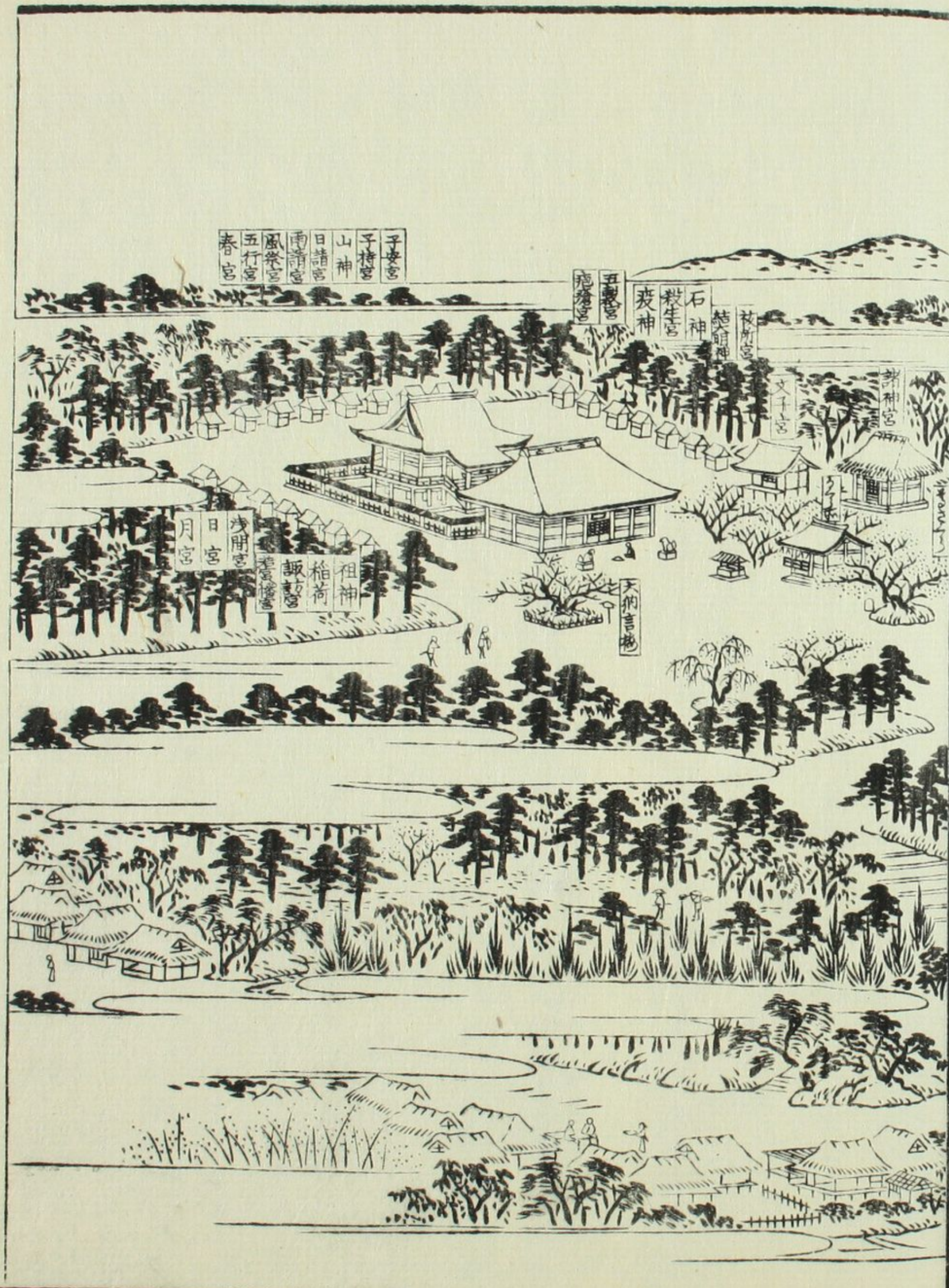
當寺開基大石氏靈牌 牌面右は透岳宗関大居士中は英崑衛俊大居士左は

當寺鐘の銘は奉る大石遠江入道が 直山道守 觀司とあり三人の法名を注し道守ハ

洪鐘 當寺の住持雪巖和尚 土中より穿出せりといふ

武州入東郡久米郷 大龍山永源禪寺
住持雪心叟融立 本願檀那大石遠江入道
直山道守
應永廿九年壬戌九月初吉日

按文明の頃大石駿河入道二宮の城に住り天文の頃上杉家の老臣大石源左衛門尉
定重戸倉の城に住り又其父定文一書定文と滝山の城にありたり然るは此定文後



北野天神社 永源寺より二十三丁西の方北野郷あり
又北野と武蔵野の大宮司栗原氏奉祀を
相傳天兒屋根命二十六代大御臣
北野といふ事なり
朝臣今麻呂の長男多美丸の苗裔
每歲正月十七日奉射二月廿一日ハ物部天神祭同廿五日ハ天満宮の
祭めく遠近より群衆せり

北野天神社 永源寺より二十三丁西の方北野郷あり

又北野と武蔵野の大宮司栗原氏奉祀を
相傳天兒屋根命二十六代大御臣
北野といふ事なり
朝臣今麻呂の長男多美丸の苗裔

每歲正月十七日奉射二月廿一日ハ物部天神祭同廿五日ハ天満宮の
祭めく遠近より群衆せり

本社祭神物部神出雲伊波比神國渭地祇神天満天神菟手差

原明神等の四神を相殿とす

武蔵國八間郡の人物部直廣成等六人

尊櫻 社前あり枝葉繁茂花ハ單瓣あり

大納言梅 天正十八年庚寅加州西相利家郷當社を再興あり

社記曰地主物部天神國渭地祇社出雲祝神社ハ

人皇十二代景行天皇の四十年皇子日本武尊東夷征

討の時武蔵野に入賜少諸軍大ニ渴を

時ニ老翁忽然とて来り

尊と導く此地に至り清泉あり諸軍の勞を救ひ

尊其時天神地祇劍の義神を祭多ハ戦ひ

目伏しとす

同四十一年辛亥正月

十七日土人集り方八丁の地ニ三神の社檀を經營す

此遺風 同年二月二十一日遷宮あり

欽明天皇の十二年辛未十一月十五日武蔵野小手差原の靈神

及び日本武尊を合祭し小手指明神と崇まる又一條院乃

御宇管丞相五世の孫菅原修成武蔵國の國主とり時管公の

靈ルある後長徳元年乙未二月二十五日勅許より花洛北野

天満宮を始り關東に移り奉らる依坂東第一北野天神也

稱しなる源義家朝臣奥州の朝敵追討の時も宿願ふりて
 惣社建立あり其後建久六年乙卯九月十九日源頼朝御正
 八幡宮一字を勸請ありてまをく本宮九社共ニ修造せられ
 土領二百貫文の地を寄附し此時式内の諸神勸請神宮也
 領地二千貫文ありしをまをく此時式内の諸神勸請神宮也
 二十二百貫給ふとたり時建武延元の争戦社頭兵變に罹り
 夫より後大に荒廢せり然に延文元年丙申尊氏將軍諸社を
 建立し多ひしが又應仁の火に破らるるを天正十八年庚寅加州の
 大守利家卿再興あり殊に忝も御當家より於て伊崇敬此
 餘に社領を添せしむる慶長十三年戊申伊造堂あり大久保
 題と司ありしを武門擁護の伊祈禱忘るるなり
慶安二年申も又四十二石の社領を増しありしを
 源氏滿證狀一通社司栗原氏の家に蔵せ
 寄進 武花園山野天長

同園山口郷内北野宮殿 虫食
 并田畠在家 虫食
 在別命虫食

右任先例被沙法可祀多し状也件
 應永口年八月廿五日

左兵衛督源 虫食 在判

按此古文書源氏滿なり虫食其名ありしはもと其花押を以て
 大石源左衛門古文書同家蔵也
其文たのめ

北野宮神主職しりしを御し
 兼其其のこゝろに御し

天文十一年二月十五日 道俊在判

北野宮 神主殿

按道俊大石源左衛門の御子あり
大石源左衛門の御子あり
此二通の外は小田原北条家の朱印あり其文を

小手差原 北野神社より西北の方十三四町と隔て河越入間川等の邊
をへく小手指原と号せり 豊島郡下練馬村に小手指差原の舊地残る由
其土人云傳ふととも證なきなり 新井白石先生
云く小手差原ハ北野物部天神社より西北の方六七里四方の地をいふと今ハ壘田を
終り七百餘石の地となりと云く

新葉集
むさしの原へおびえく小手指原とつらふおひのり
おひのりおひのりおひのりおひのりおひのり
おひのりおひのりおひのりおひのりおひのり

中務卿
宗茂親王

太平記曰正平七年 北朝の文和 閏二月二十日の辰に越後武蔵野
の小手差原へ打臨み一方の大將ハ新田武蔵守義宗五萬餘
騎と五ふ分り一方の中道より寄られ去程小新田
二萬餘騎四方六里と扣へり一方ハ脇屋左衛門佐義治を大將ハ
て二萬餘騎是も五箇所陣を張敵小手差原よりと聞えられハ
將軍十萬餘騎と五ふ分り中道より寄られ去程小新田
足利両家の軍勢二十萬騎小手指差原に打臨敵三聲時を作とバ

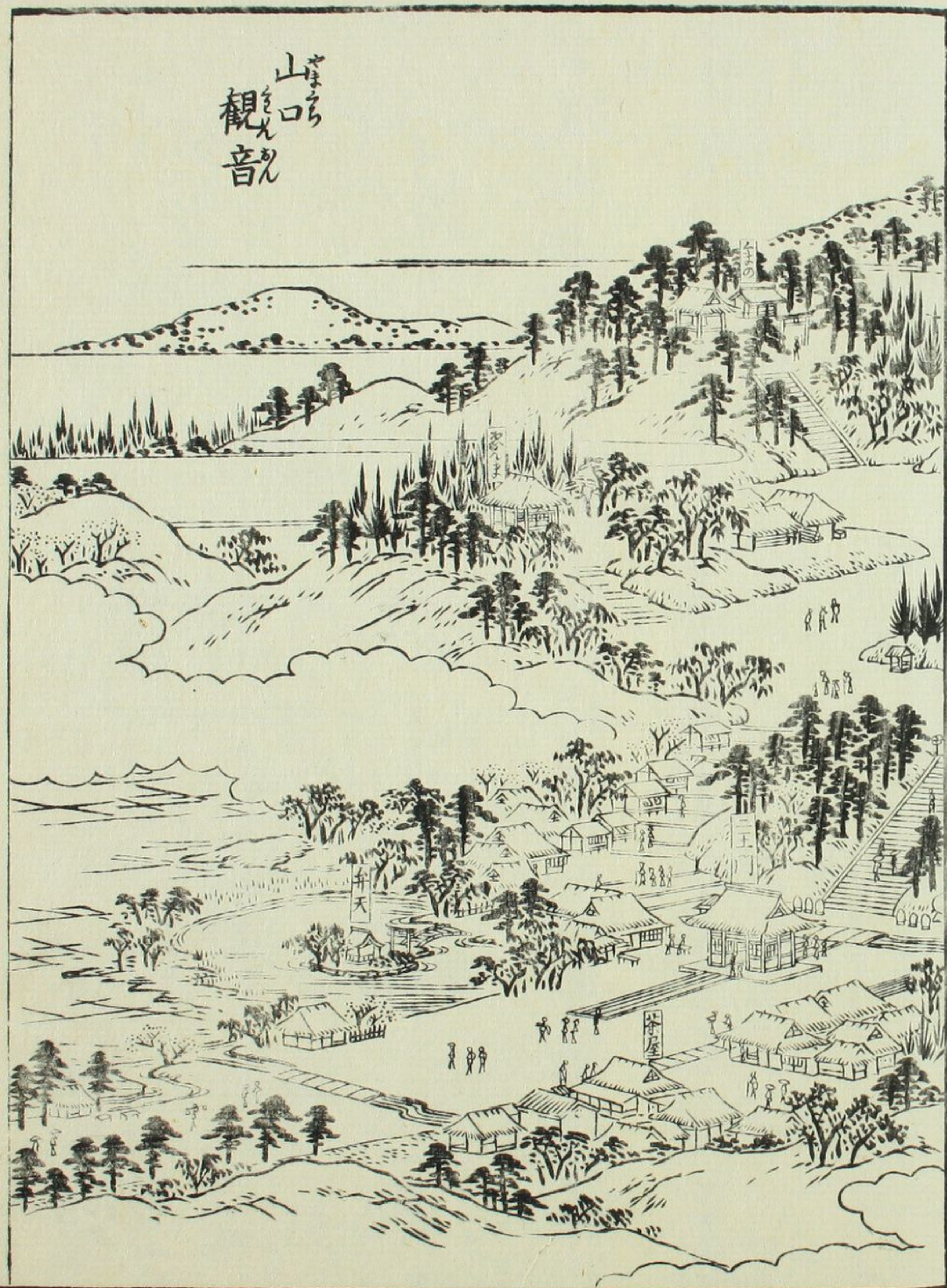
御方も三度時の聲を合せ上ハ三十三天迄も響き下ハ金輪際迄
削ゆんと震し略中 饗庭の命鶴生年十八歳容貌無雙は兒
なるが今日花一揆の大將なるバ殊更花を以て出立花一揆真先
ハ懸ゆると兒玉黨七千餘騎と戦ひ揉立ち一返も返さず
その引程と有るれ將軍は十萬餘騎混引し引立ち曾て
後を顧む新田武蔵守義宗旗より先に進むて天下の為ゆを
朝敵なり我らハ親の敵之只今尊氏が頸を取る軍門は曝さむ
むハ何の時をり期まべきとく自餘の敵共の南北へ分れ引をバ
少も目おかけも只二引西の大旗の引お付く何く迄も追蒐はま
引も策を奉追も逸足をゆせバ小手差原より石濱まで坂東道已
四十六里を片時が間お追付し將軍石濱を打渡おひる時
近習の侍共二十餘騎返し合せ追蒐敵の河中迄渡懸し
引組く討死し其間ハ將軍急を遁も向の岸へかけ上り入

落行敵ハ三萬餘騎追蒐る敵ハ五百餘騎河の向此岸高く扇
風を立たるが如くある小數萬騎の敵返し合せく此を先途と支
多り日己酉の下ま成る河の淵瀬も又え分む新田武蔵守義
宗續つて渡も小舟をせず跡より續く御方ハな安りぬ者哉と
牙を嚙く本陣へと引返さる新田武蔵守將軍を討漏しぬ今日ハ
日己酉暮ぬもバ勢を集く明日石濱へ寄むとて小手差原へ打
兵衛佐敷何所中扣へむひぬると行合ふ兵共は問ふバ兵衛佐敷と
脇屋殿とを一所に扣へく御渡を候つるが仁本殿も打負て東の方へ
落させむ候へくとと答ふるさて爰小見えくる筋ハ敵を御方
を問ふバ此辺御方ハ一騎も候まじ是ハ仁本殿兄弟の勢を白
旗一揆の者共が焼くる筋を候らん小勢あり此辺は御座候とん
るハハ何と覚え候へバ夜小紛もく苗吹峠の方へ打越させむ候て
越後信濃勢を待調へらと重て御合戦候くと申されバ武蔵守

暫思案してごぢ此義然るべしとて苗吹峠ハつごごと問て夜中ハ

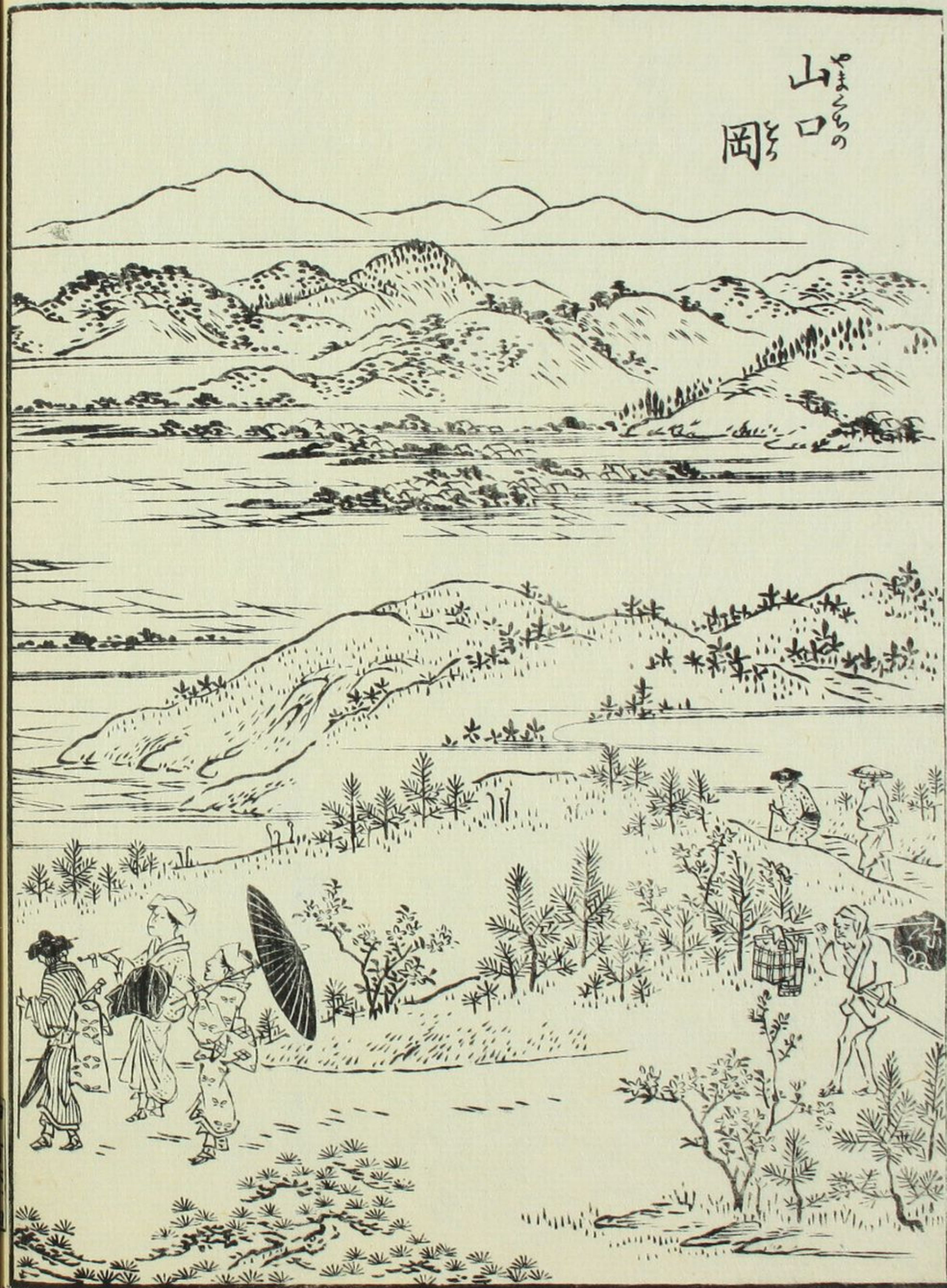
落るふ云云 以上其要
太平記ハ新田義宗朝臣尊氏將軍を追く小差原より石濱迄東道四十六里を
時分間遊休しりとあり又苗吹峠の石濱より多麻川の濱日野の津より上
牛瀨と唱ふる地其旧地なる由也云々依擬は牛瀨の地より多麻川と際て向ふ
於西南の地を二の宮と号く絶壁ありと太平記ハ河の向の岸高く扇風を立
この小地勢相なるへり又同書ハ苗吹峠等吹峠と書く宇須伊と訓し上野と信濃
國東とを記す証者之誤あり當國此企郡將軍澤村とて此地ハ古田村將軍東征の時
陣營を布ゆひ田中其地を封じ今市宿とて西地あり其地軍
かとハ入間川の地より上州への通路なり今市宿とて西地あり其地軍
澤と前ハ苗吹峠と号ふる山あり義貞朝臣分倍の軍破まされ川へ勢を移し
ゆび入間川へ陣を引き其夜苗吹峠へ陣を引き上州信州の國界ハ
あつて上信の國境ハ約程二十里あり其夜中容易至るべきあり入間川あり
此峠近四里あり其夜中容易至るべきあり入間川あり
山口觀音堂 北野村より西南の方半道を隔く新堀村あり 狹山
の方入間郡は接する地の惣名と山口と号 吾菴山金乘院真光寺と号真言
土俗云此地ハ山口平内なる云人の城跡なり
宗江戶大塚護國寺は屬せし弘法大師を以て開祖と稱す
本堂本尊千手觀音 立像二尺三寸あり 脇士多聞天不動明王 西像
三尺あり 行基大師の作なりとも
或ハ同大士感得の靈像といひ入

山
觀
音





山
岡
口



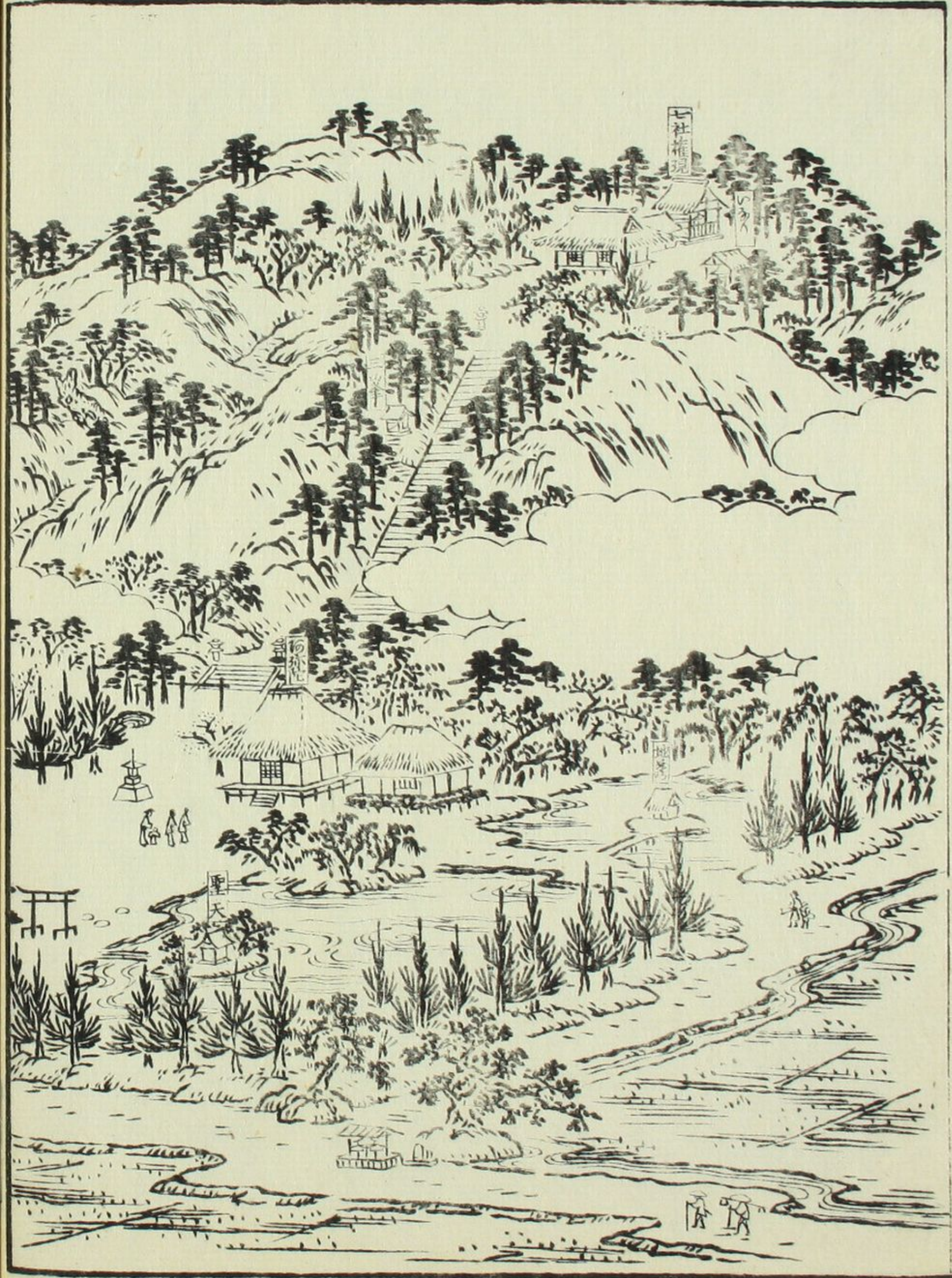
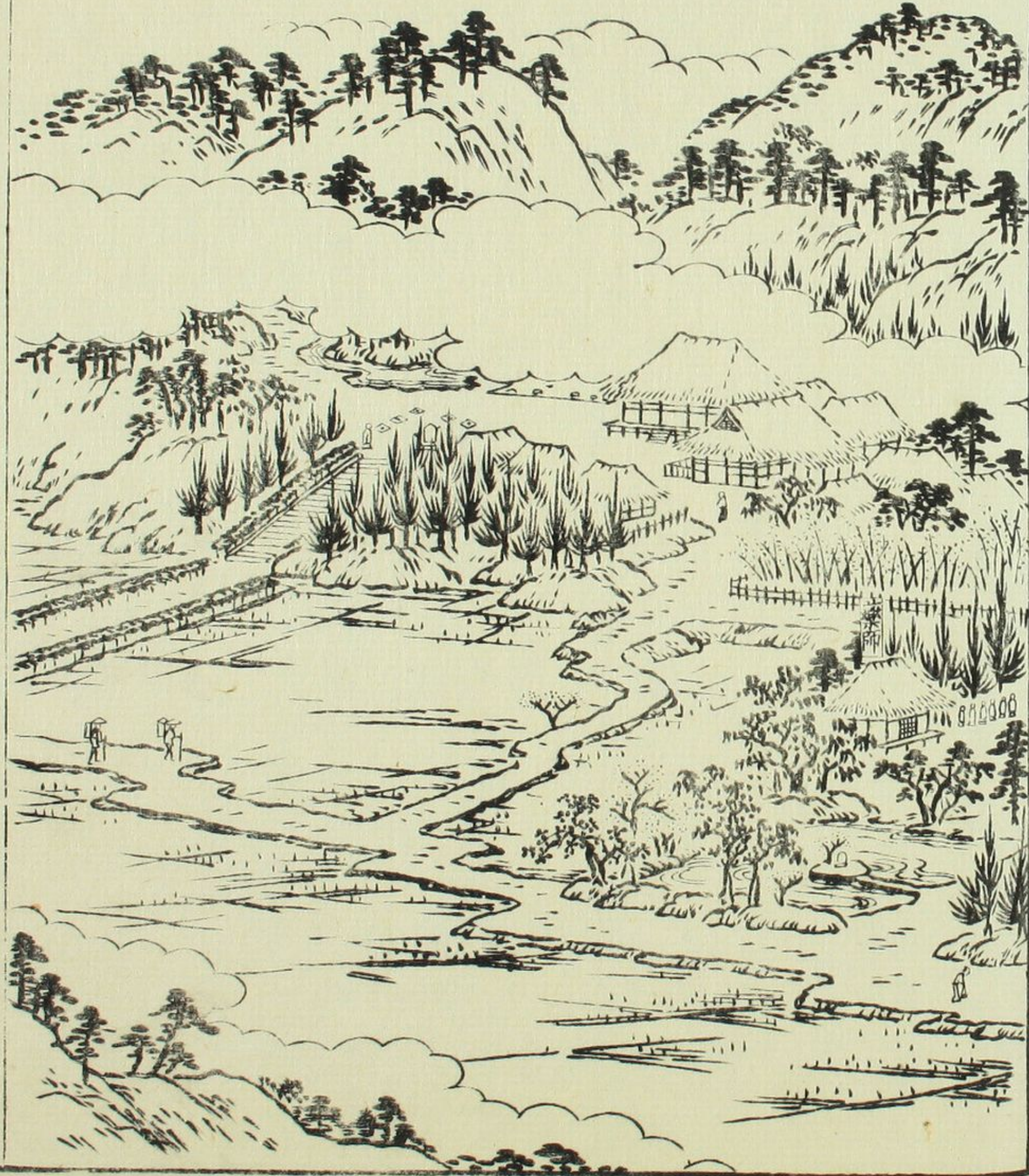
額 圓通殿 根嶺大傳法院僧正八十八翁筆

影向加持水西谷ふあを 柱古弘法大師一夏の間に千座の獲摩供修行を以て
大悲の影と拜するありし影向の号ありし其地は清泉と求得ありし
比琵琶島辨財天祠 千手谷の東口の池の中洲あり琵琶の形なる故に号とす
二基の石碑と採り得たりとす 碑面辨財天の字及び年号と銘を一八八五年
己巳一八八五年癸卯とあり
二王門額 吾菴山 筑波山前護持院八十八翁權僧正光星筆

縁起曰往古聖武天皇の勅願ありて行基大士諸國遊化の砌此
地に至るあり日既暮ぬ仍樹林の下に錫と掛通夜誦經禪觀せ
深更小違ひて林間千手陀羅尼を誦する聲あり大士奇異の
思ひし終に其辺を求めたり異香薫り靈光赫奕とす樹上に
輝き千手大悲の聖容忽然とく影向なり久し則曉を待て彼
靈樹を伐くとの拜する所の影を摸刻し永く度生のふえ
あふ安置せし 此地と千手谷と號す此處に 其後弘仁年間弘法大師羽州湯殿宗

行ひとせし途ゆく此地のよきあり一人の老翁来り告て
曰く此山中は行基大士作る所の大悲の靈像ありと又よ人其靈
あるを告て我大徳の此地に至るを待て適に堂宇を営むると
云て後其翁が行方を告て 此老翁と地主権現と稱して今猶山中あり 依大師山中入て
求むるあり翁が告する所は千手大悲の像及び脇士多聞
不動等の二尊とも感得なりあひ一字の草堂と建立せ 當侍の權
其後弘安年間國中大小疫癘流行し死に至る者少くは時二人の
老僧ありて家毎ふ至り告て曰く吾菴はよき大悲の尊像たせ
多し来り祈る輩は病患悉く免るべし又吾庵をあらんとす
深夜山中光あり地に至るべしと云く里民其教をあふひ夜光と
標し此地に至り此靈像を拜し病を祈り大に靈驗とす
歡喜踊躍し諸人日夜絶む 老僧の言語を就く山を吾菴と号け大師
院と号く光明と放る 修禪の地と金剛衆嶺と稱せしを以て金兼
地ハ山口の辨財堂なり 又元弘三年癸酉の五月ハ新田左中将義貞朝臣

勝樂寺



上州より義兵を起し武蔵野に旗擧し、あゝ鎌倉勢と府中分倍河原に戦ひ軍敗れ、余川に引退き當山の東の峯に陣營を構ふ。此時義貞公觀世音へ願書を捧朝敵退治の軍功を祈らせし、其夜義貞公の夢に千手大悲馬上に現れ、親沙手は弓箭を与へ、夢覺て後感悦淺く庭前の櫻枝を策とす。盟て開戸の陣に發向し、然る越後信濃の方より數万の軍勢差加て不日は相州一家を亡せ、地を今將軍と号義貞誓の逆の後天正年間泰も御當家於て櫻と云との今鶴榮をとり、崇敬なり、あゝのあり寺封の朱壘を下し、ありあり繫昌古よ百倍一人天護持の靈場となし。

辰

爾山佛藏院勝樂寺 山口觀音堂より十二丁をり、西の方勝樂寺村あり、新義の真言宗中戸の真福寺に屬せり、中興開山の真惠上人と号、元和九年正月十四日化誕を本寺に近頃火災お亡びて新

座像二尺を、その十一面觀音を安置せ、此火災お仍て悲く日記

と亡たりとて草創の時世等詳なく、中興上人とて

洪鐘、當寺大坊の前方あり、銘文高麗郡とあり、元禄年間災に罹り、損し、とて銘文の後、再興の旨趣を注し、添く改鑄とありと

其銘云く

武州高麗郡山口郷勝樂寺村奉新造立鐘銘曰
諸方空相寂滅異名常樂我淨箇々圓成

奉日待講供養 奉庚申講供養
奉念佛講供養 奉誘奉加供養

願主 藤原重信

奉修山王七社大權現御宝前儀 願主 尊海上人
辰尔山別當佛藏院勝樂寺大坊 住寺中興開關 法印權大僧都 奠榮上人

延久三年辛亥九月十九日 開關 奠有順說
本願 二見相覺妙性
初誓

明曆三年丁酉九月吉辰 日敬白 御大工 推名兵庫頭吉繩

此寺境の地ハ入間郡小属一ノ再び按ハ高麗郡也勝樂寺ト号スル寺ありト後高麗山
聖天院ト改ヒトシ此寺の法を承ク者ト云
七社権現宮 勝永寺ナリ百歩を東の方山の上ニあり山王二十一社の中七社の神ト
古當社の一ノ鳥居ありト曰ク此寺の東ニ鳥居場ト号スル地あるト云
開山塔 七社権現の邊ニ開山塔ト稱スレドモ唯其唱ノハ中興ニ由ル廟塔也地ハ
當寺往古ハ大伽藍ありト鎌倉將軍家累世の祈願所トナリ

開山塔 七社権現の邊ニ開山塔ト稱スレドモ唯其唱ノハ中興ニ由ル廟塔也地ハ
當寺往古ハ大伽藍ありト鎌倉將軍家累世の祈願所トナリ

今ハその名ノ存スル田園の字ニ残スル 勝樂寺ト大坊
對シケル稱ト覺シ又大坊の西南堂地入トシテ所ハ古瓦ト穿カセテあり古伽藍の
遺心著シ又文永嘉元正等の古碑數枚ヲ存セリ

鳥羽 日本紀ハ敏達天皇元年壬辰夏四月高麗の使人來テ表疏ト上ル其表疏
爰小船史の祖玉辰爾ト云ト羽を飯氣ト蒸ク帛ト羽ト印ク其文字ヲ
写トシテ詳ク讀ム當寺山号辰爾山ト稱スル所也今日記トシテ其古ト云
ウケト遺歎必ク云

新堀 玄蕃居住地 山口新堀の地ニ住セト云太田道灌の家臣に
シテ江戸谷中ニ新堀ニありト故ありト必時此地ニ移住ト太田

家ニ傳ル所ノ稻荷の神像を以テ一社ニ勸請シ今當寺ニ
護法神トシ 天文稻荷ト稱 玄蕃後小豊島の新堀小坂住セト云

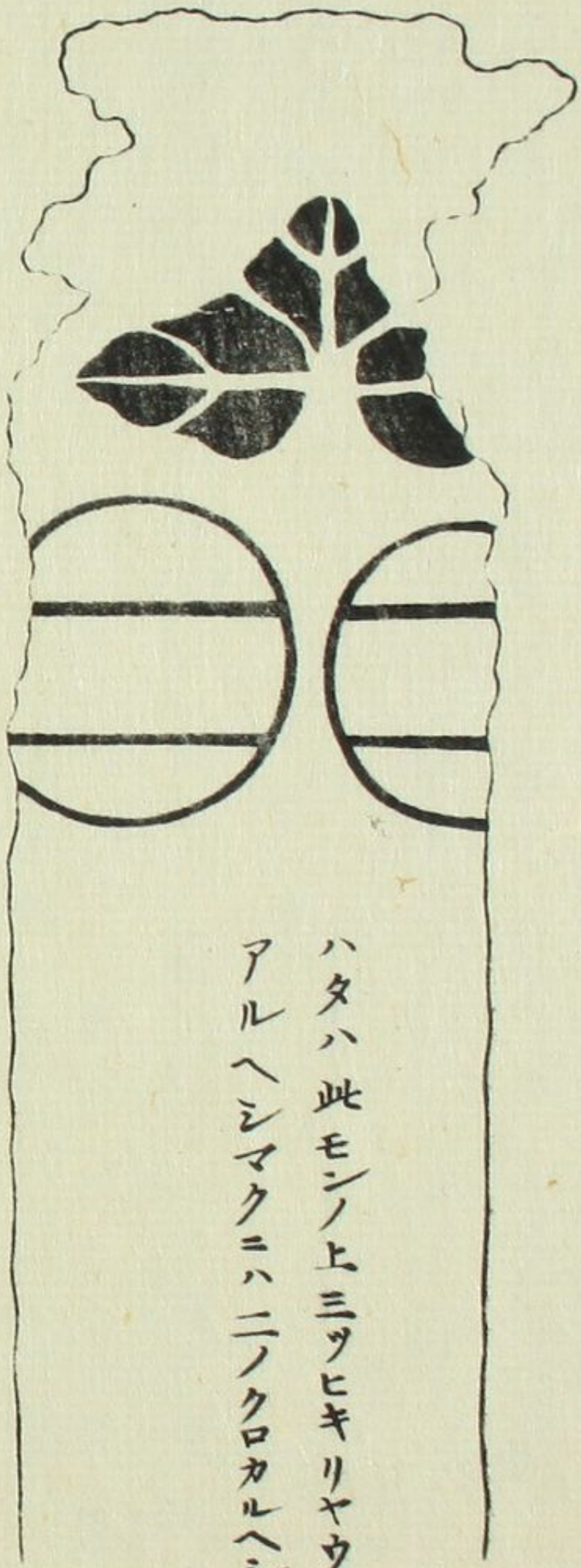
山住彦三郎旧趾 七社権現より良の方三丁を隔テ小岡と
云土人ハ山住彦三郎某の城壘の跡ナリト云 方三四丁の間と云
此地ハ旧家十四五軒ありテ其中二見家の古文書及び旗幕の

注 文書等と蔵スルものあり 鍛冶職ト業トスル儀也其家ニ蔵セ
又此岡の根ニ諏訪の神祠ありト石剣と神體トモ 其質青銅
其古文書曰

先日小室御淨働ト時迄ト有能人
中有律妙ハ仍大カ一腰を以テ向後
承ノお掾者ト状也件

十一月二日

空哲判



ハタハ此モンノ上三ツヒキリヤウ
アルヘシマクニハ二ノクロカルヘシ

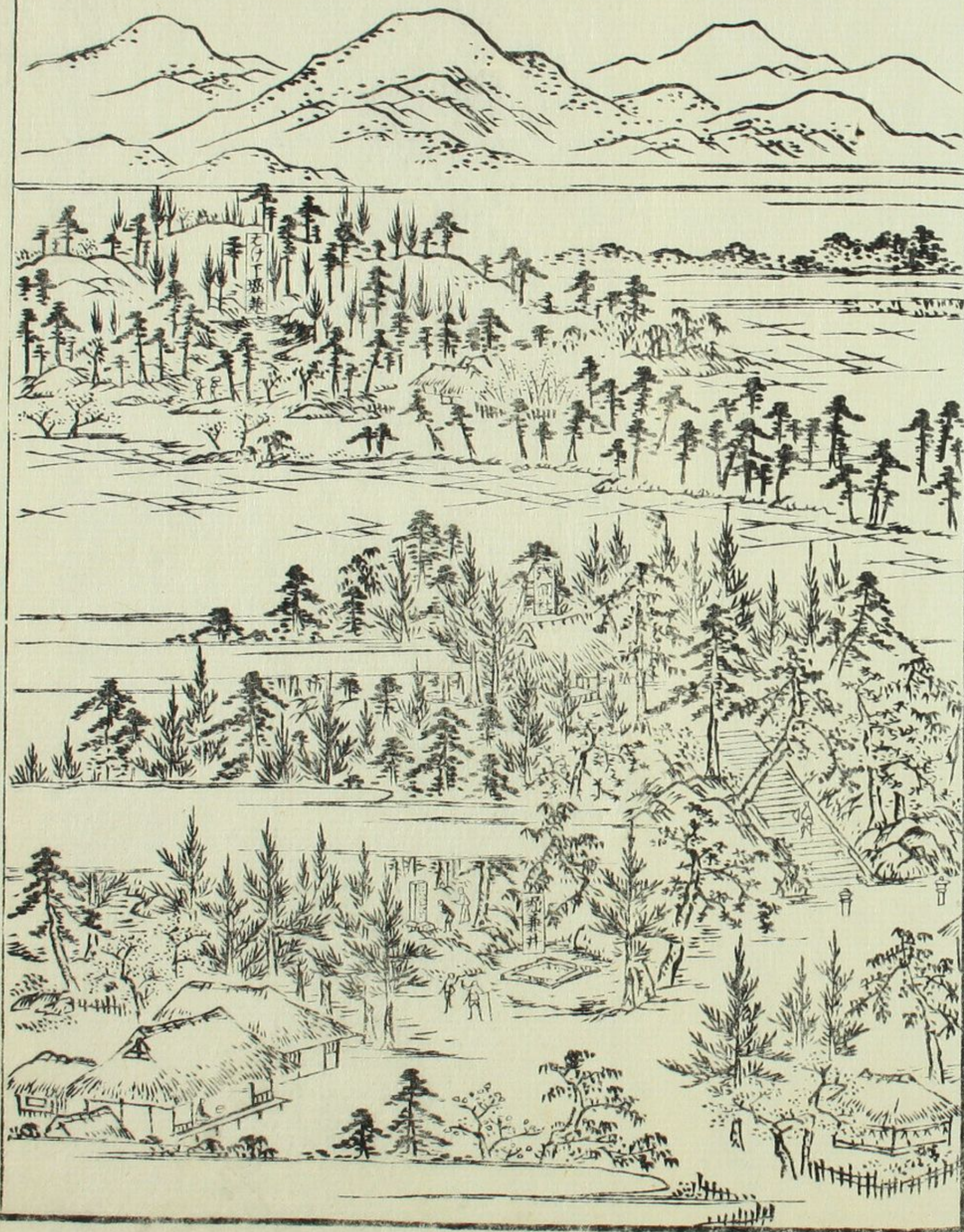
箱

箱根崎比驛舎の西北数百歩あり
此の地ハ王子より野州日光山
奥羽等の國ハ相州大山に登らん
箱根権現を以鎮守とす故箱根崎と稱す
此の地ハ王子より野州日光山
奥羽等の國ハ相州大山に登らん
箱根権現を以鎮守とす故箱根崎と稱す
此の地ハ王子より野州日光山
奥羽等の國ハ相州大山に登らん
箱根権現を以鎮守とす故箱根崎と稱す

河神を勧請せりや
今知らざる
古ハ池の周回三十丁ありあり
悉く耕田となり又ハ林叢と變りて
徳ハ凹形茂草此地となり
松
風の響ハ波瀾よかをり
徳ハ凹形茂草此地となり
松
天の小祠を營建せり
此の地ハ王子より野州日光山
奥羽等の國ハ相州大山に登らん
箱根権現を以鎮守とす故箱根崎と稱す

堀兼井 河越の南二里餘を隔て堀兼村あり
浅間の宮に傍りあり
是を浅間堀兼と号せり
此社前ハ古の淺余街道に
行路あり今ハ慶安中松平豆州侯建立
より別當を慈雲庵と号河越高林院の持なり
浅間の祠の左ハ凹地を
中ハ方六尺をり石を以て井桁と
半土中ハ埋れしもの
ありと堀兼の井と稱せり
傍り往古川越秋元侯の家士岩田
某建る所の碑あり高と五尺餘
其文左の如し

郷の兼井



千載集

むさし
の

の

井

あまの

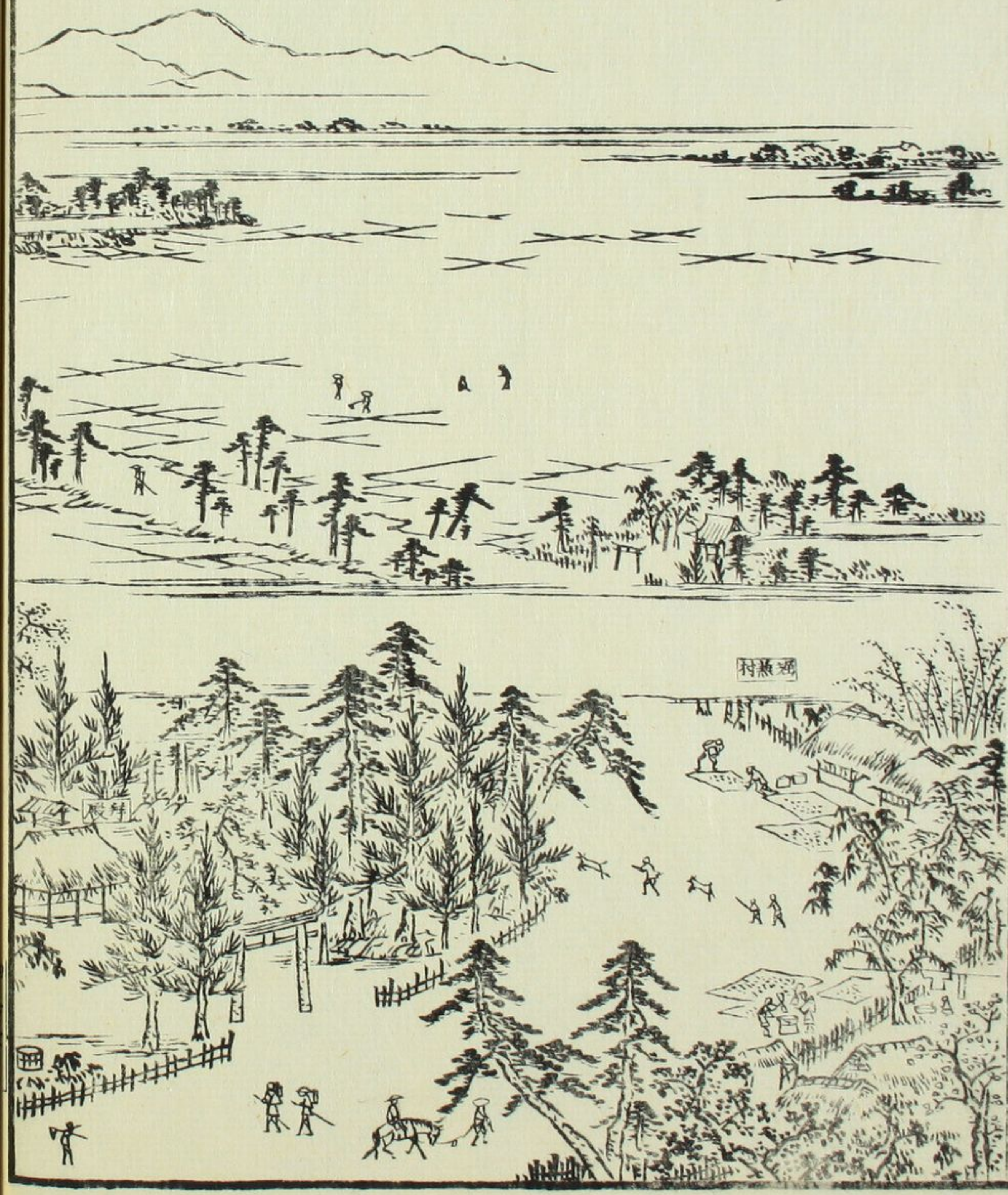
うれしく

水の

道

つよ

俊成



此凹形之地所謂堀兼井之蹟也恐久而遂失其處
因石井欄置塙中削碑而建其傍併以備後監
里語堀而難得水故云尔兼通難未知只從俗耳
宝永戊子年三月朔

千載集 法師の御見濕土泥決定知近水のころ後を

宇治百首 むさし堀兼井の井もあつたを跡く水の辺のまじり 俊成

むさし堀兼井の井もあつたを跡く水の辺のまじり 俊成

むさし堀兼井の井もあつたを跡く水の辺のまじり 俊成

むさし堀兼井の井もあつたを跡く水の辺のまじり 俊成

むさし堀兼井の井もあつたを跡く水の辺のまじり 俊成

むさし堀兼井の井もあつたを跡く水の辺のまじり 俊成

むさし堀兼井の井もあつたを跡く水の辺のまじり 俊成

むさし堀兼井の井もあつたを跡く水の辺のまじり 俊成

人よよる堀兼井の井もあつたを跡く水の辺のまじり 肖相

連奇良材

田國雜記 堀兼井の井もあつたを跡く水の辺のまじり

竹をかきよぶる武蔵野の井もあつたを跡く水の辺のまじり 道奥 准后

芳たれゆき武蔵野の井もあつたを跡く水の辺のまじり 同

里人のあせとの武蔵野の井もあつたを跡く水の辺のまじり 同

北國紀行 堀兼井の井もあつたを跡く水の辺のまじり

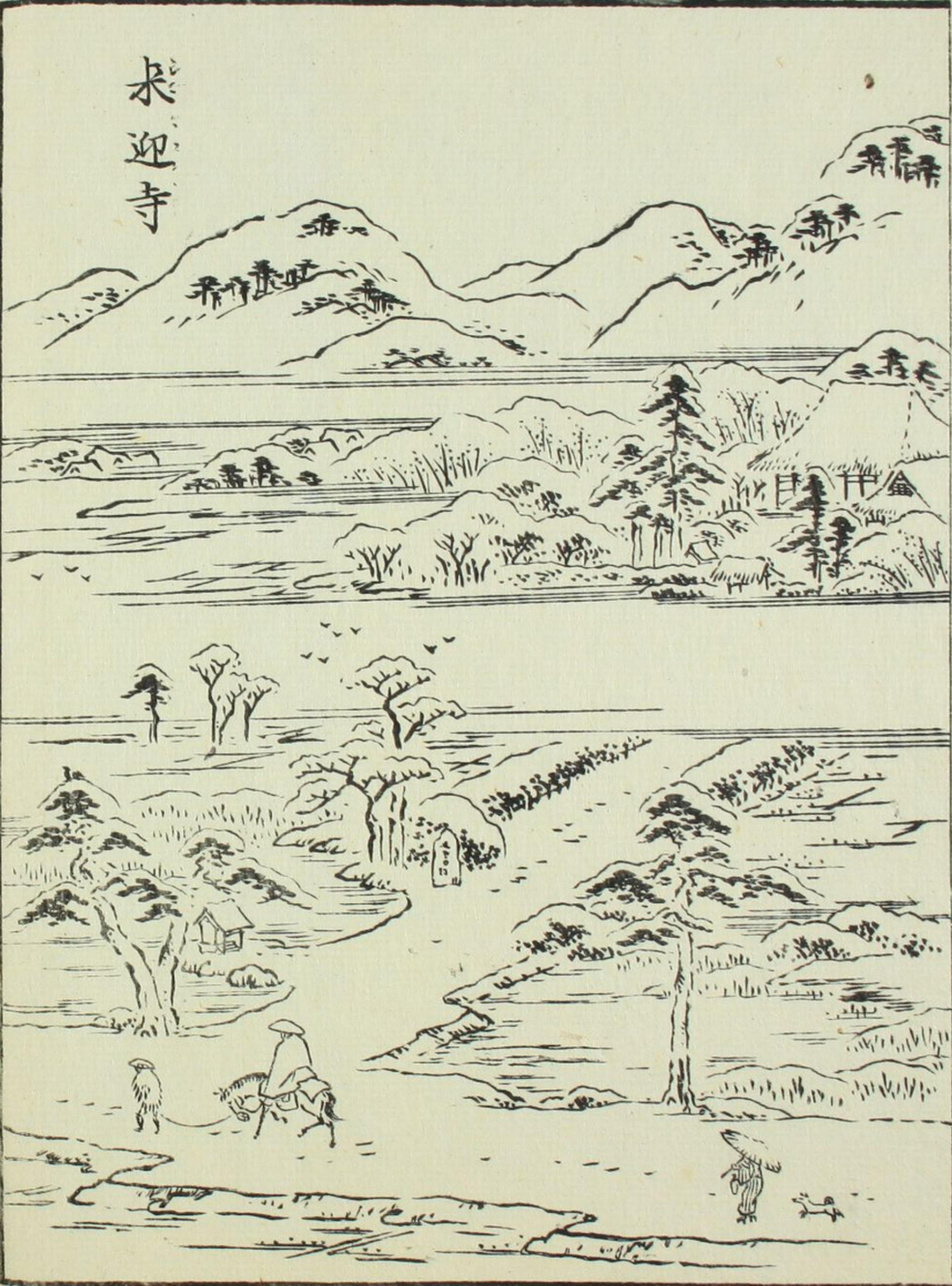
枕の草紙 堀兼井の井もあつたを跡く水の辺のまじり 竟惠

土人傳へ云往古日本武尊東征の時武蔵野水乏しく諸軍

渴み及びびたれが尊民をしく此所彼所は井と堀りしむるは終

水と得たれが龍神を命して流を引おひるとあり

按太平記元弘三年五月十五日義貞武蔵野の戦ひ小打負は堀兼をさし引退くところ此地のまじり又元和十三年の春光廣郷の記終り廿三日八日の端よりぬむ波の御堂よ云くがりしむる此浅間堀兼のまじり其餘しむる



来迎寺

堀魚の井と称するものあり此地より六町半南の方より二十歩ある所の間窪める地あり是とも堀魚の井と呼ぶと又北入間村にも堀魚の井と唱ふるあり七曲の井と号渡り六七歩ありたるもの農家の傍にあり土人お傳へ文永七年に堀穿所のものあり古ハ一村の人こころしく此井の水と及ぶるなりとも後世井路崩れ損じたる今ハ所々井とありけり此水と汲むるやよのけり井の傍にやわな雑樹繁茂して鬱蒼とす又其傍に文永文保寛正等々年号と刻せし古碑を存せし堀魚の井と稱するものハ女新田及び高井戸等の地中ありとのひく堀魚の井一所あり再び按よ武藏野の廣莫なる古水よと号し堀魚の井と堀穿つとのことども容易よ水と得るなりと云ひく可なりと云

還車阿弥陀如来 堀内村東光山来迎寺 曹洞派の

禅寺は安置を本尊阿弥陀如来ハ立像三尺脇士観音勢至は

西像ハ長二尺あり各佛工運慶の作なり

龍騰ハ世俗藤と云との是あり 相傳往古奥州伊達の秀衡佛工

運慶とて一刃三礼や彌陀観音勢至一光三尊の佛軀を

造らむ點眼供養の日生身の如来現然とて来臨はり

光明を放ち新佛を照しるハ新佛も又光明を放ちるなり

と云ふ其奇特世に著く遠近の道俗皈依渴仰せしは

車返古事

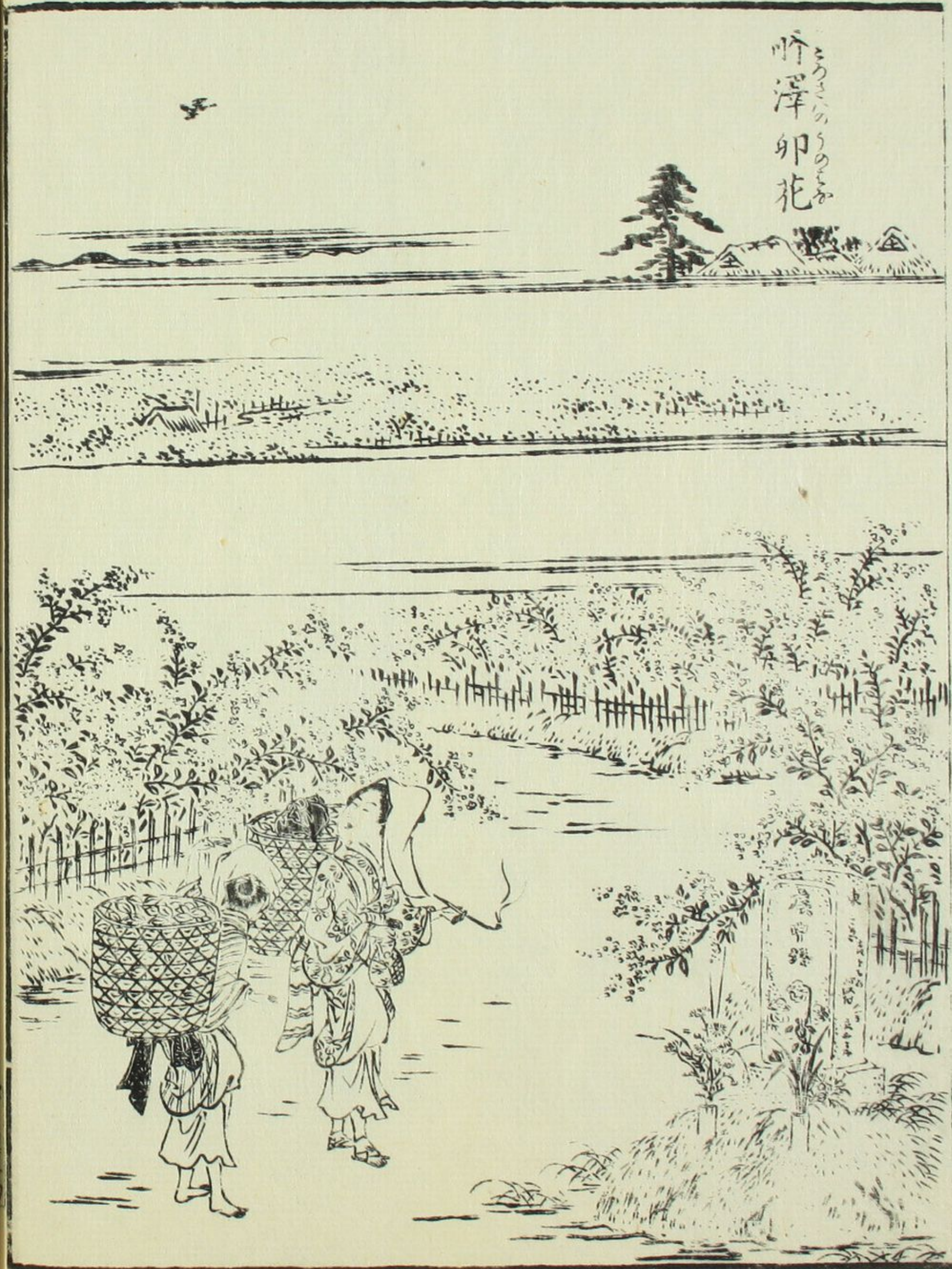


右大将頼朝卿是を傳へ聞ひ懇請願ひ秀衡秘安に
 靈像なれども將軍の嚴命黙止せしむ速に兼諾し蓮輿を
 装飾武士數十人を以て靈像を鎌倉に贈りしをせんを
 途中武州府中の邊に至るに蓮輿大盤石の如くふ
 して更々動くも右幕下其を聞し鎌倉の本尊
 有縁の地よありと奥州に還る人由命あり是より
 其地を車返村と稱せしむる也
 堀の内村に安んじたりと云
 禪師榮芝順富大和尚の時一待と云
 此地は杖父街道の驛舎ゆゑ入間郡に属せり三
 八の日市あり賑はへし江戸四谷大木戸あり此所近ハ西の方七里
 あり

河越へ四里青梅へ
 五里ありとのみ

田園雜記
 此の地は杖父街道の驛舎ゆゑ入間郡に属せり三八の日市あり賑はへし江戸四谷大木戸あり此所近ハ西の方七里あり

竹澤卯花



いふ伏見の地をわきまをききとていふは、
 竹澤卯花の地をわきまをききとていふは、
 竹澤卯花の地をわきまをききとていふは、

道共

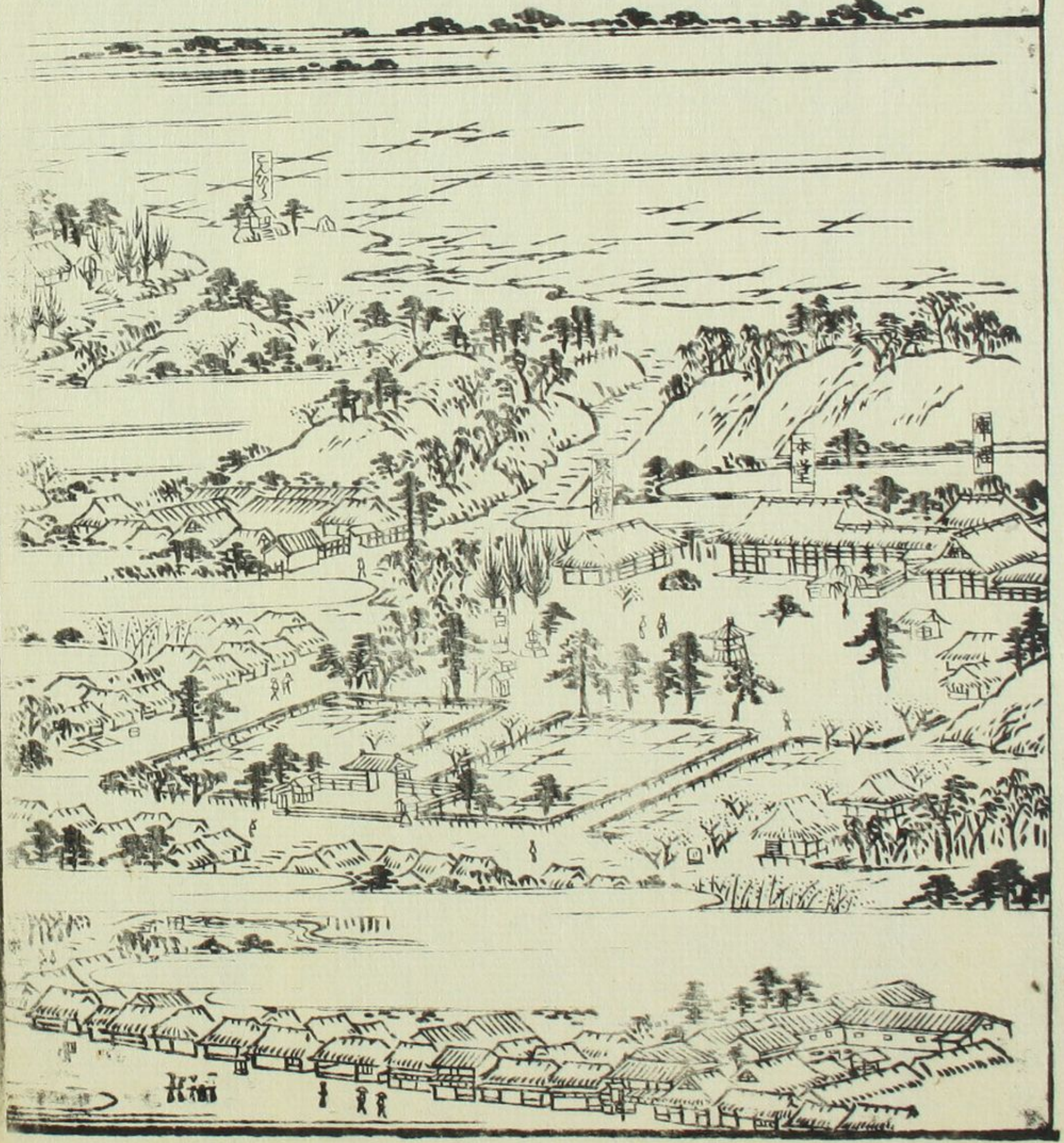
此の地は、
 竹澤卯花の地をわきまをききとていふは、
 竹澤卯花の地をわきまをききとていふは、
 竹澤卯花の地をわきまをききとていふは、

遊石山新光寺 觀音院と号し同所西の方驛舎の入口河原宿とて
 地あり新儀の真言宗ゆへ成木の安樂寺と属す本寺正觀音
 立像一尺餘ありて行基大士の作とて相傳建久年間頼朝卿下
 野那須野及び三原に狩りし時假らば假家の跡の地を
 當寺に本寺に附せし事 其後星霜を経る兵乱の劫其
 地を他小掠せられし事 元弘年間新田義貞公北条高時征
 罰の頃當寺に至り本尊を祈願を籠られし後鎌倉に攻入り
 高時を亡しゆひしに靈像の加護なるをわきまをききとていふは、
 の後前より掠られし事 六石の地を再び寄附ありしより連綿

回國雜記
 とんほつとんほつ
 小福泉と云山伏
 観音寺ととんほつ
 小葛嶺ととんほつ
 とのさうれ
 とんほつ
 伏
 野抄ひの
 とんほつ
 のの
 とんほつ
 坂の
 せき
 うね
 道真准后



所澤
 薬王寺



や〜〜今猶當寺に附属せりと云
道興准后の四國雜記に所記
 わるも當寺 什室に新田家寄附の鞍あり黒漆を以て塗らるる云ふ
のりなはん
 中黒の紋を描画あり

東光山藥王寺 自昌院と号を同所北の横小路を入り東通は道
 より向い側よりあり曹洞派の禪宗中々糸村の永源寺に屬せ
中興岡山ハ峯山 藥師堂の本尊藥師如來を座像三尺計に行基
大辨和尚と号 大士彫造せる所なりと云ふ
寶龕を閉 相傳ゆ元弘の頃新田武藏守義宗公教度の合戦と
企むと 依て義宗公此地に至り一字の藥師堂に入りて假時は僧とかり
忍び 忍びて年月を送るもひ〜〜時運再びゆるる期かたを歎
終 終に發心し〜〜此所は草庵と結び篤く護持せる所の佛鉢と
 以藥師堂の本尊の胎中は籠め法華經千部書寫し終り

戸田
 羽黒靈泉

標の木の
 間控より
 靈泉涌
 出を詣人
 これと汲得
 者病ある
 者服飲
 驗ありと
 て近頃を
 本草綱目
 半草綱目
 ありて擇名
 と上池水と
 といふあり





戸田川渡口
羽黒権現宮

氷源八間川下
我々より發生し下
流ハ荒川ともいひ
隅田川ともいひ
為メ舟々あり
此川水増志村を
依其頭ハ理使ハ
千住ハ廻り江
所ハ昔ハ堤村
ハ馬をくつかり
今も出水の時ハ此
ボートはなし



焼米坂

此地は焼米と驚く家あり故に名本名ハ浦和坂カ



應永二十年癸巳三月朔日壽齡九十一歳中て逝去ありて

則當寺に開基中て自性院義英源宗庵主と号に

長誓山妙顯寺 戸田の渡口より二十町ありて隔て西の方新

曾村あり 戸田の羽黒権現 日蓮宗の本寺中て弘安三年庚辰

當國新倉の領主隅田五郎時光とのみ人開基を

新倉に住む弘安二年甲州身延山に至り日蓮上人は謁し

僧弟四位民部阿闍梨日向上人なり

總州法花谷の草堂よ

本堂日蓮上人の像を安置を

釋迦牟尼佛堂

所の念持佛

告て日蓮上人の妙持を乞ひの安産を

中老僧日法上人の作りたり世に子安日蓮上人と稱せり等身中て物腰を

本堂より左の方あり本堂より廊を隔て世に子安釋迦

如來と稱せ此靈像ハ當寺の開基時光が家累世傳る

靈像なり

寶藏

釋迦堂の後池の中島あり當寺第一の靈室

開山塔

本堂の左あり日向上人及び開基陽田五郎時光四世日賢尊師の塔

寺寶子安大曼陀羅

宗祖上人の真筆なり此曼陀羅の如護あり

慈眼大師消息

贈墨田五郎時光

法華經開結

時光宗祖上人祈念を自の室の難産をのり利益を依る

鬼子母神影

日向上人常子鬼子母神と信十三歳の年法花首題の

宗祖上人真骨舍利

開山日向上人身延より頒當寺に收む

日向上人の日蓮上人画像

筆紙金泥なり時光

寺記曰文永八年辛未日蓮上人官府の命により法の為に佐渡

鳴子詣せられその年十月十日上人相州とゆく武州糸川に

宿一翌十一日新倉に至る時新倉の城主墨田五郎時光

其室の難産なるを上人は告ぐ救苦の祈念と需む上人是とあそ

と路傍に叢祠を坐を儲け邊に清泉を汲み硯水と曼陀

羅及び安産の符を書たし是と授く曰く信心深くんハ必安産

なりん又生所の兒も男子なりべし長あるの後ハ報恩の爲免

公家せしめを承りて此地を立退り其日時を隔てて安産

あり生る所の兒も又男子なりべし時光悦び限り珠に

大士は曰ふ処符節を合せたるが如きを奇と其兒を徳丸と号く

其時の曼陀羅今猶傳へて當寺の什宝なり又安産の時光是より宗教を

其項上人の悲ひゆり地を封し一字の精舎を開創せんとす此

大願を發起も同十一年甲戌上人鎌倉の赦免を得る後身

延山に隱栖ありし弘安二年己卯時光其子徳丸を具し

延嶺に至り上人は謁して徳丸を出家せしむ

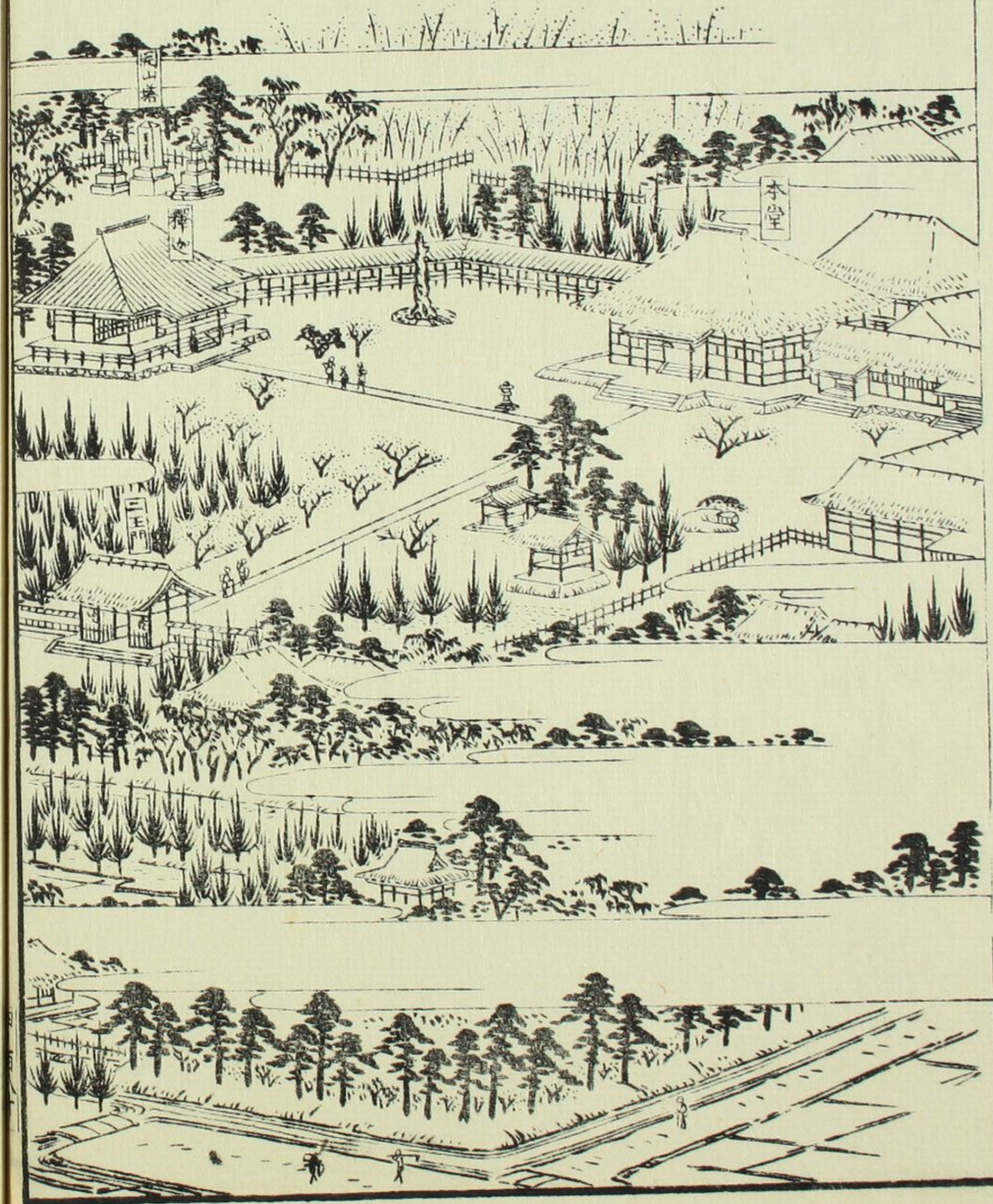
又祝髪して日徳と号

此時上人の書の本を与へ

その後

妙顯寺

子安の釋迦如来
子安の曼陀羅
雁當寺
安産の妙符
安産の妙符



弘安三年庚辰に至りて竟に志願の如く當寺を創建を上人
日向師とて開山たりし時先自相継ぐ當寺に住せり
淡川左衛門佐義行居城曰趾 蕨の驛舎の邊ありて

鎌倉大草紙曰長祿元年六月廿三日淡川左衛門佐義鏡を大將とて武蔵國
指下野懸ハ公方の近親中代九州探題の家なれば諸家も重きよりありひ
多うへ祖父たつ佐義行ハ久しく武蔵の國司中あり足立郡に蕨とて所を
取立居城中今に至る迄此所を知れハ旁に可然とて義鏡を探題
管領とて關東と可治郡と解

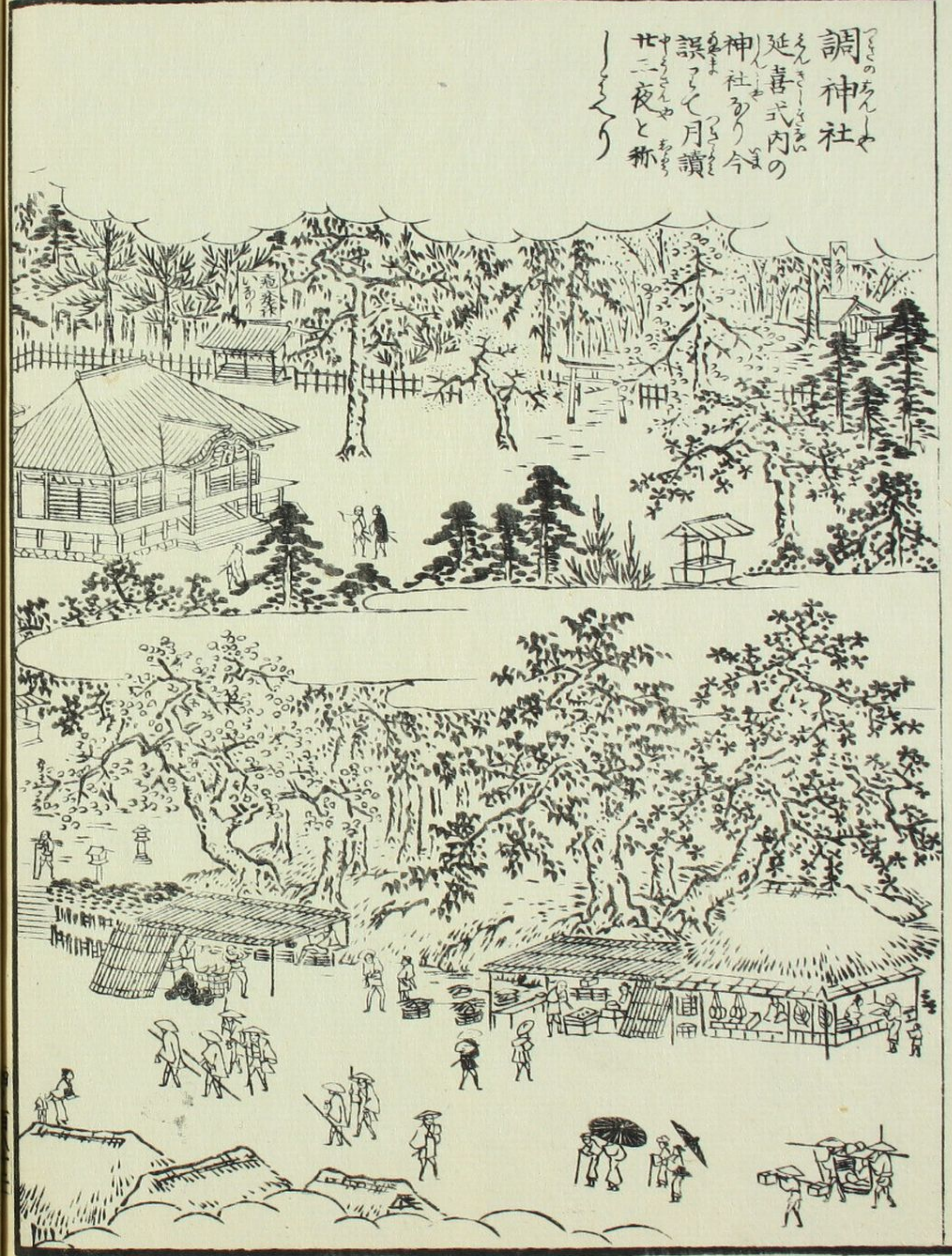
調神社 浦和の驛より三町計此方岸村と云ふあり社ハ街道より
右に立せし今世は月讀宮二十三夜と稱せり別當八月山寺
と号し浦和町の玉蔵院より兼帶を
廿日なり社の向拜し掲る調神社の額ハ松平信定朝臣の筆跡なり
祭神月讀命一坐本地勢至菩薩 此本地佛はよりて
延喜式神名記曰 武蔵國足立郡調神社云云
武蔵國風土記曰 足立郡大調郷調神社神田六

十束二字田雅日本根子彦大日天皇乙酉三月

所祭瀬織津比咩也有神戶部巫戸云云
社記曰當社ハ崇神天皇の勅願なり後建武三年足利尊氏
凶徒追罰の宿願ありたるが靈應むけに社を造營
ありて延元二年二月五日社領の地五箇村を附せり又貞和
觀應の間宮方蜂起を此為に寺社悉く廢亡を依り康曆
二年佐々木近江守源持清當社を經營し至徳二年正月二
箇村の地を附たりとて天正十八年小田原北条家滅亡の
時の戦ひに神寶も共散失し神領も又自ら廢せり然るに
御入國の頃忝くも
神祖 當社の来由を聞しめて改て美田山林等を封せ
らるに竟に慶安二年朱章を下し賜ふ
子安清水 同所長光山妙典寺にある所の池を以早鴨の洞
とて相傳ふ日蓮大士此池水を以て安産の符を書

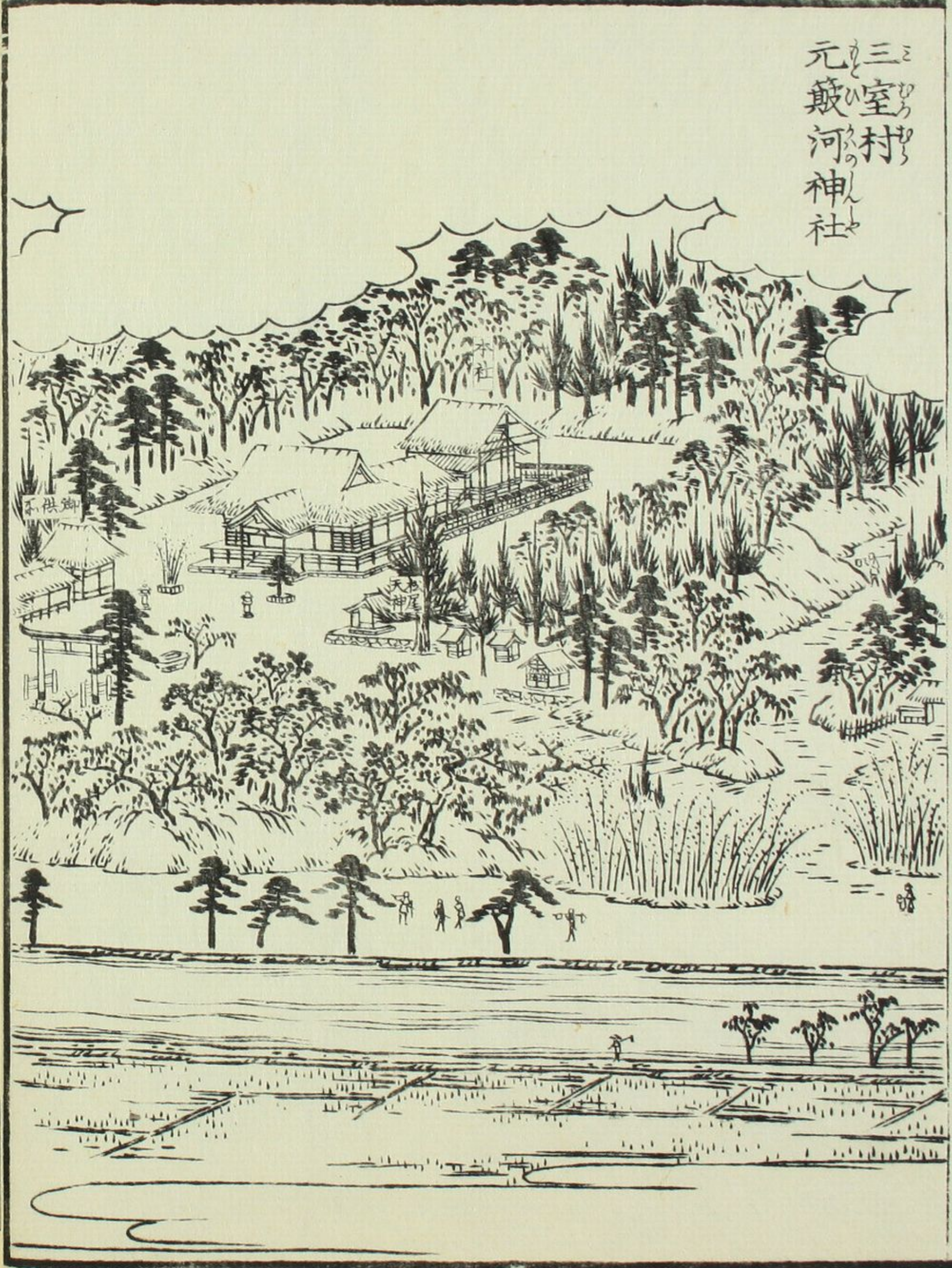


調神社
 延喜式内の
 神あり今
 誤りて月讀
 廿二夜と稱
 し





三
室
河
神
社





氷川宮大門先

夕ひ時光う妻に與へらまゝ加持水なりと云

宮本簸川大明神社

宮本郷

大宮駅より二十町程北

三室山の南麓少あり

土人宮本の簸川社と称へ又女躰宮と号以祭神大宮同躰

して本宮大己貴命右素盞尊左奇稻田媛命と齋ひ祀る當社山中枚檜神多く社頭巍然として瑞籬莓滑なり現り鼓の音朝

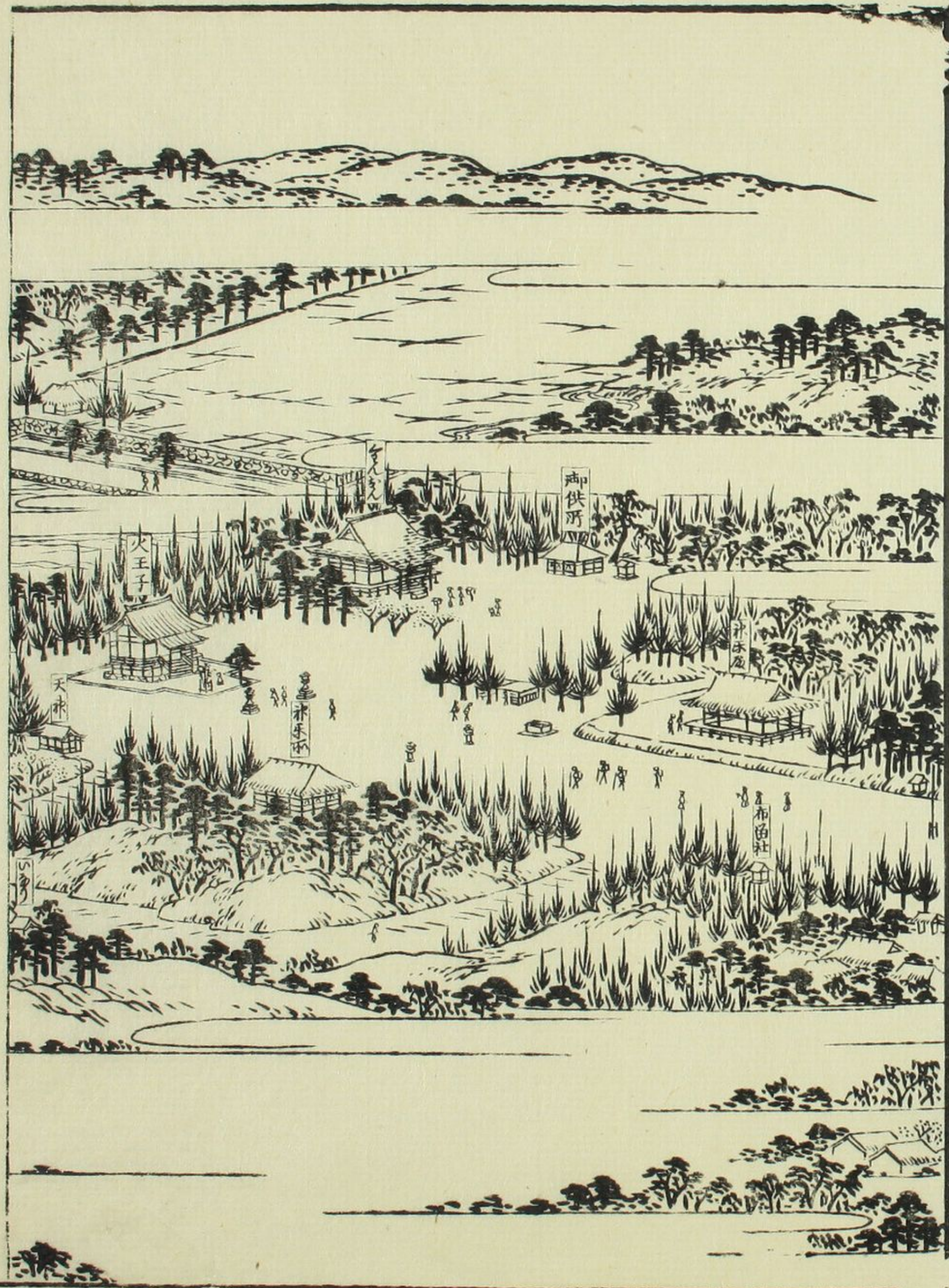
の祈夕の報賽も一めはあゑ山林にゆきくさくさ神感の興と催まらむひとの貴し神主武笠氏世々まはる奉祀し社領

五十石と賜ふ國初の頃嘗て神祖も神主の家に入れたまひ

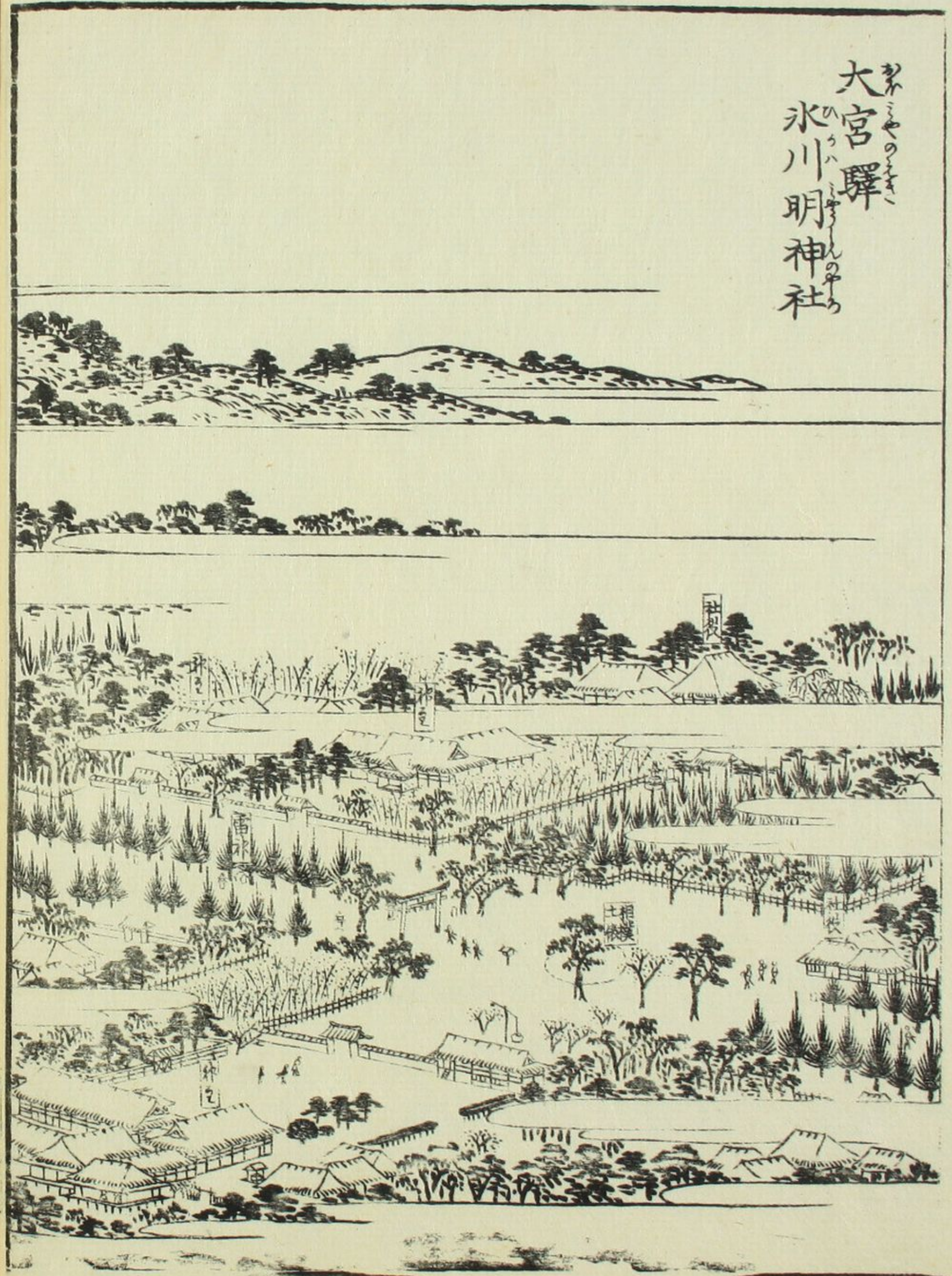
神領及び神宝等御寄附あらせり古器古文書等神主の家傳へしとまゝと藏まるとり

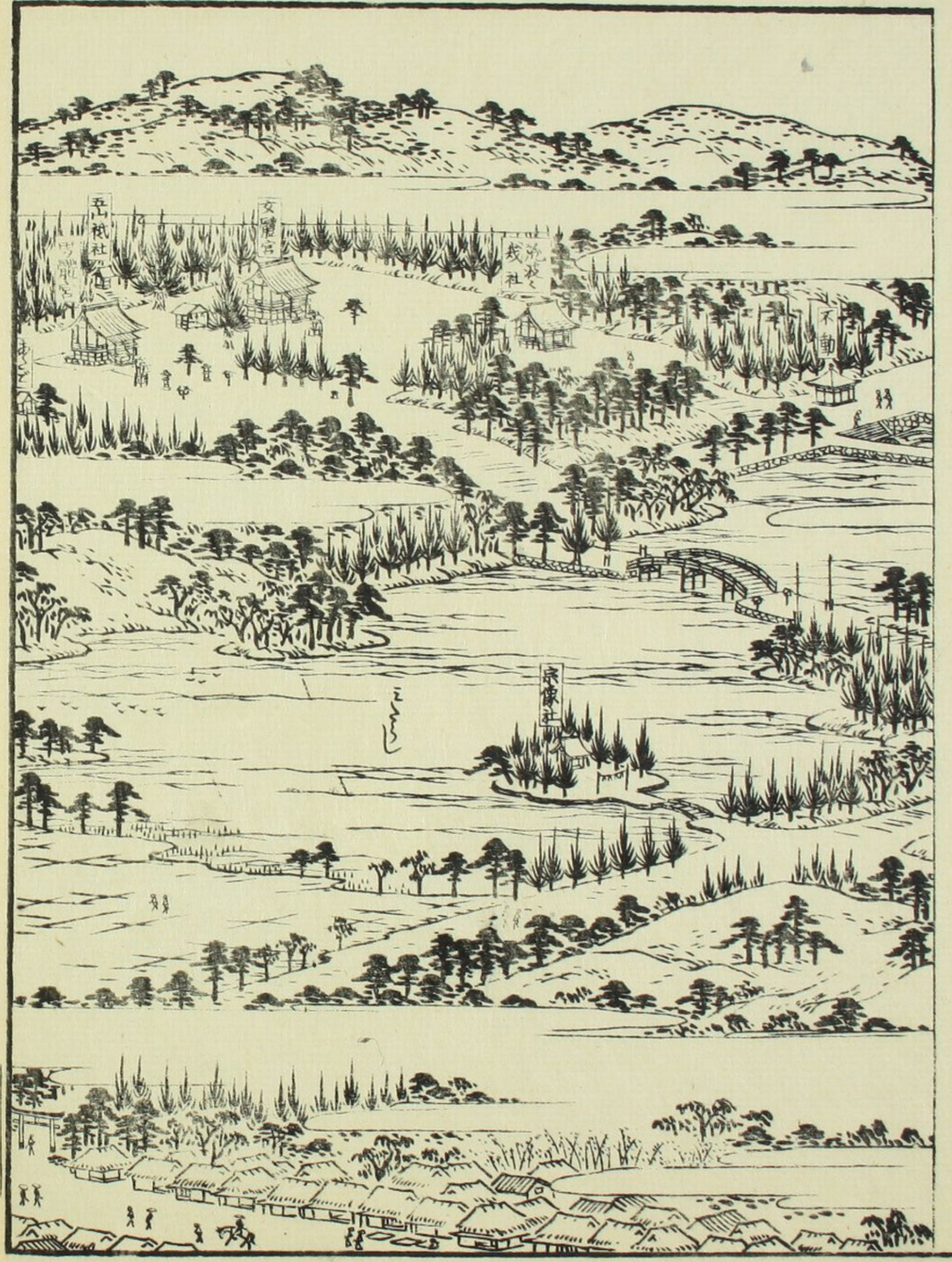
御沼 舊事記に水沼小作り本社鳥居の前あり當社の御手洗

みして昔ハ長四五里とありて廣二十餘町ありしと云享保十二年に官命ありて此沼と新田小開發せしめらる今も僅み沼の形と



大宮驛
氷川明神社





存も然も猶沼の水中より九月八日大神事終ま又も十一月

大晦日の夜々々時々々龍燈現る事ありと有り

例祭九月八日と六月十四日なり就中九月八日も船祭と御沼

の中へ神輿と船めて渡り奉る沼の中少く神酒と供もり

儀式あり上代の瓶子今猶神主の家此日神幸の時午前少く北風に

て船あつり沼の中に至る還輿の時ハ必南風よ變りて神輿の

船まゝ本の岸に到り着此事振古違ふと有り

大智山文殊寺大般若堂と號を社地より壹丁程社寶大般若經

一部持統天皇勅て納め賜ふ所と云昔時關東兵乱屢なる一クハ

正月八日天下泰平の御祈禱とて文殊寺に於て般若會修行と云

蕨川原 其地今知へり宮本社より大宮の辺と指て云へきり

武藏國風土記曰足立郡蕨川原出鮎鰻諸鮮芹柴

胡香需旱水共為民用云云

右のくくあれ御沼の辺水澤の地と惣て呼ぶと云見ゆ又大宮の南の方道乃

左右三十丁もりの原と大宮原とも唱ふは若くハ其辺まく瓜りんふなる

大宮氷川神社

大宮驛の中

高鼻村と氷川戸庄

街道の右の方に鳥居立石あり

まきよりり十八町入て御本社なり神領三百石神主角井氏岩井氏

こまを奉祀も祭神三座本社右ハ素盞雄尊

左ハ奇稻田媛命是ハ奥の社と稱す本宮ハ大己貴尊と齋ひ奉る

あれ即武藏國第一宮にして延喜式名神大社大月嘗新嘗に列す

第一の官社たる所なり

荒波々幾社本社傍に在手摩乳足摩乳二神と祀る武藏國風土記

宗像社同橋の左の方にあり祭神田心姫津姫

五山祇社本社後の方より大山祇中山祇麓山祇

本地堂神池の北にあり觀音と本尊と社僧五宇あり江戸

延喜式神名帳曰武藏國足立郡氷川神社名神大

一宮記曰武藏國足立郡氷川神社素盞鳥命云云

神名帳曰武藏國足立郡氷川神社日本武尊東

三征之實録曰貞觀十一年十一月十九日壬申授武

藏國從四位下氷川神社正四位下云云

武藏國風土記曰足立郡氷川神社正四位下云云

四國田觀松彦香殖稻天皇御宇三年戊辰所祭

素盞鳥尊大己貴子十比咩合三座也云云

東鑑曰治承四年庚子十一月十四日壬戌土肥次

即實之由依有訴可令停止之昔如入清淨地致也

同書曰安貞三年己丑十一月十日依去四日雷電

為守世武藏國武州御使中略各被進神馬御摸國駿

又於社壇可轉讀大般若經之由被仰別當等助

教師員源正忠季氏等奉行之

慕景集氷川の社奉納の和歌もあつた

平貞盛願書一通前太平記に上平太貞盛の願書あり

一筋の願書に云く宝殿に籠り又其時の神職兵部少捕正範と云

社記に兵部權大輔富則と云るなり願書の文は白く

敬白祈願事夫以氷川大明神者本地真慮之

月明晶于東方瑠璃之光垂跡化將門恣取掠八州

瞻卒土之濱爰項年之間有平賊如王道忽緒人望

惱亂萬民自稱親王私置諸司藏如積惡起兵而欲

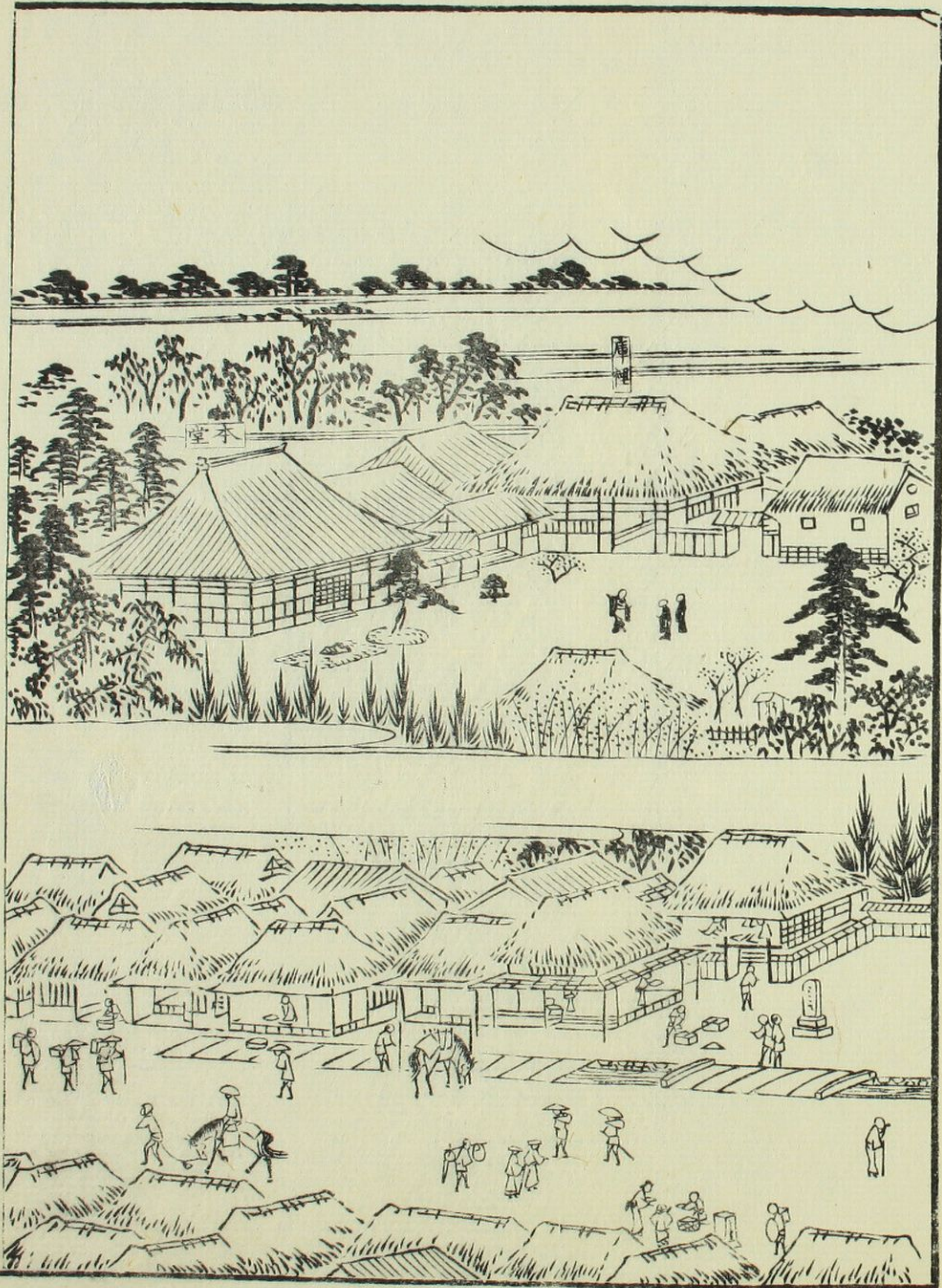
暴惡莫甚焉然愚父國杳不忍見彼積惡起兵而欲

鎮山徒自把斧越致一戰之日刺中矢肆於彼戰場
殞命今此逆賊威漸飲等苟雖以不肖之身起一舉
居然兵欲誅朝敵報父仇非神靈如護之力者爭得
勝於瞬目之中所仰神威代干戈退四維願滿祈
時丹心有誠玄鑒無誤者先令見之瑞驗給仍祈
願如件

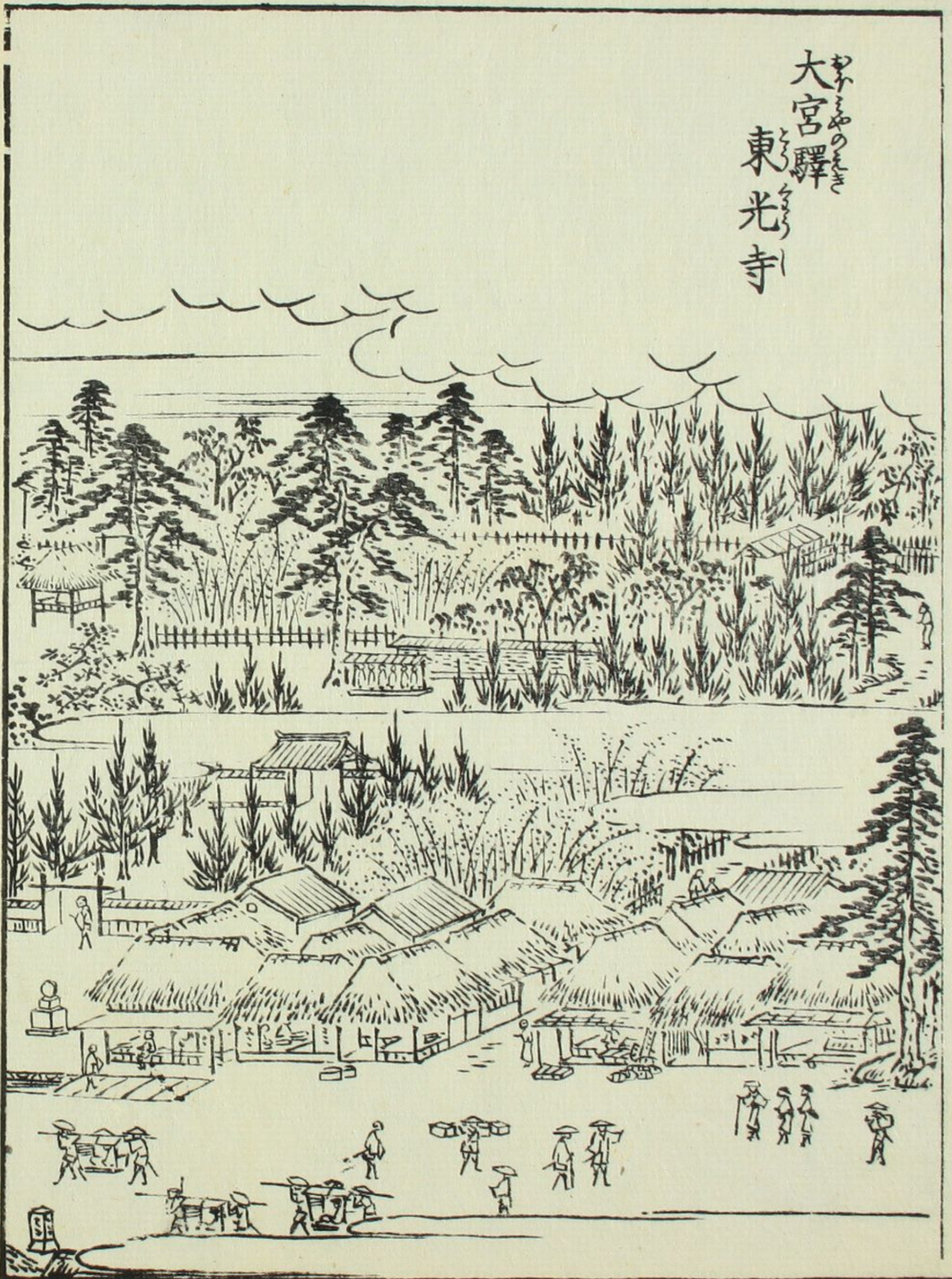
天慶三年正月廿五日
足利將軍尊氏公御教書
一通
平貞盛敬白

小田原北条家神領寄附之狀
社記曰當社之本朝武運の守護神治國利民の神域と
て鎮坐年舊ぬ二千餘年の星霜和光と新なり利生徳普
一東方八洲乃蒼生ありく神威以仰きあり以て
世々の武將も崇敬と嚴めて却敵勝利國民安泰の祈誓
と掛たまはるる稀なり誠ニ神徳乃日々に新に年々盛
にまゝいしと誰人々あまを仰りさらんや何乃輩々利物
乃和光と蒙らさらんやされし
景行天皇の御宇日本武尊

東夷征討の趣きあり項當社に涉祈誓ありく程あり凶徒を鎮
めり其後聖武天皇の御宇諸國一宮と撰定なりありと死
武藏國やま當社を以て一宮とありあり且奉幣使を向らる又
醍醐天皇の御宇や神社の大小の社格と定られ當國四十四座の中
當社を撰て大社二座の中此冠たりむ其後朱雀天皇の御宇に
至りて貞盛繁盛兼任等の兄弟將門退治の爲東國は發向を
其時日本武尊の先蹤に准ひ當社は詣りて一通の願書を籠
なる果して靈應を得たり又治承四年頼朝寄願の旨ありあり
社頭を修営ありく大宮領永三貫文の地と寄附せられ社中
亂妃狼藉なるべきが爲制札のび涉教書を賜ふ然るも
天文永祿の頃東國大に乱れ争戦屢ありく社頭荒蕪しるを
これに天正十九年當社の荒廢を歎き思ひ召れ御當家より
社壇を重修なりあり又慶長九年足立郡より高鼻のび上

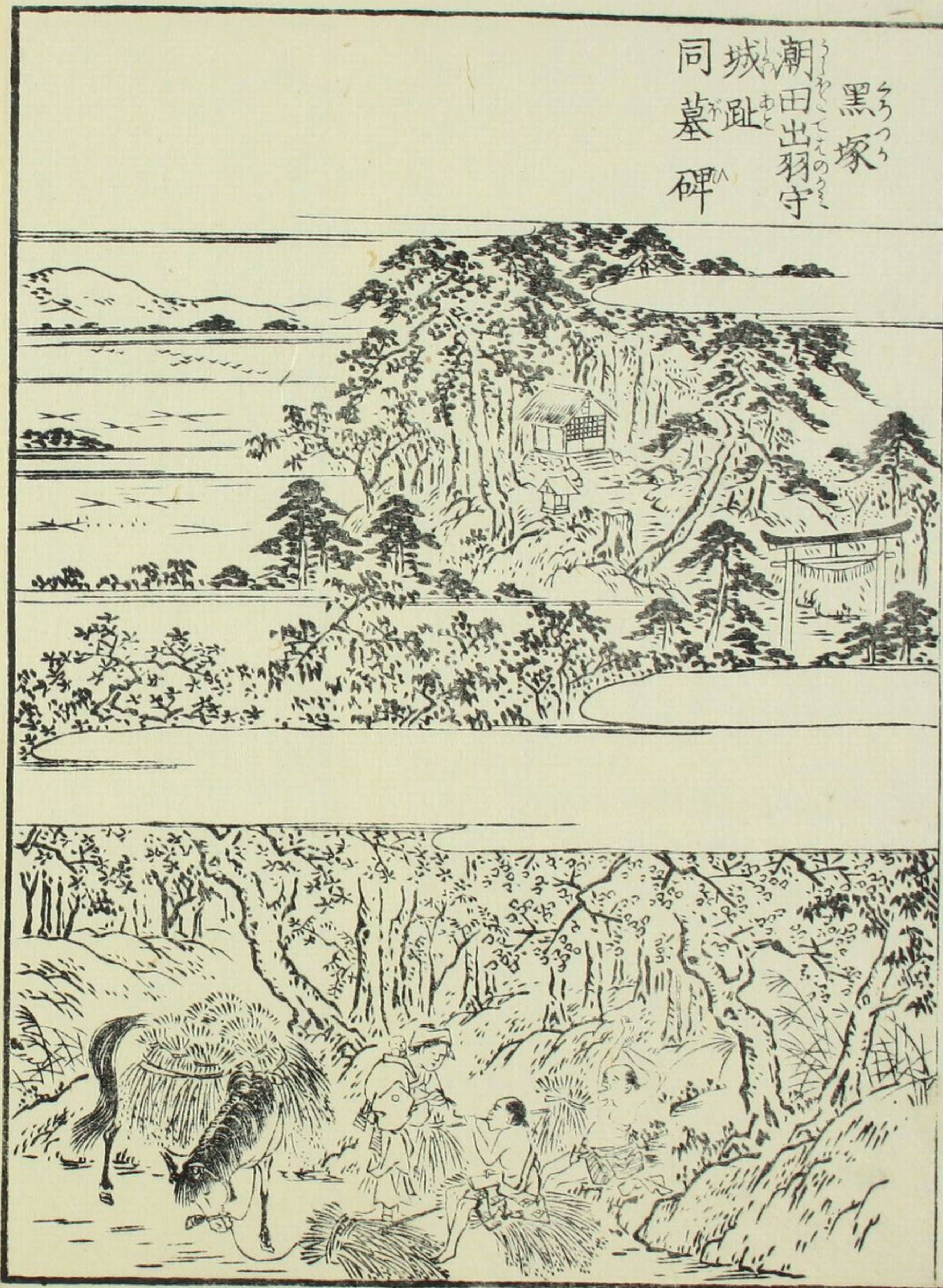


大宮驛
東光寺





黒塚
潮田出羽守
城趾
同墓碑



落合等の地と合せし社領に寄附なりし朱章の明奉を下
され官造の宮社に列せしむ

大宮山東光禪寺 同所大宮宿宮町の右側より往古八天台宗

なるが今宗風を轉しく曹洞派の禪林とす 赤谷の常泉 寺に属す 本寺を

金銅の薬師如来一寸八分ありし木佛の薬師の胎中に収む

開山八紀州熊野那智山の東光坊阿闍梨祐慶なり 長寛元年 癸未二月

廿八日迁化傳聞天台宗東光坊阿闍梨宿慶法印熊野那智山下濱宮住侶西家三

男之蓋足立郡者光明房依為代代之且那所令下向此時大宮黑塚之惡鬼以法力

令退散云云寺説云く祐慶ハ西家の三男中一那智山下濱宮と云ふ住侶より長徳

平中西三条の家より継ぎし濱宮の西殿と申傳ふ今猶あるを就中西の家ハ熊野

上徑の正嫡 鳥羽院の御宇關東より下向し法力を以て一字を印しき

て熊野の威光と關東より耀とふる意ふありし寺を東光寺と号し

足立原より古塚ありし黒塚と号く塚より震鬼あり窟を宅とす

殺氣天と凌猛威人と排む慶師道力を勵しこれを伏せし

黒塚 大宮驛水川社より四町あり東の方森の中より 此塚より南の方百歩

往古東光坊阿闍梨祐慶惡鬼退
治の地なり昔ハ足立原と唱ふ世俗奥州の安達が原と云ふ誤
なり 奥州の黒塚ハ二本松と八丁 此所も奥州への海道なれば混し交へ
ありしなり 足立原の黒塚と武蔵國ともさへ 紀州那智山の記やもんそり

潮田出羽守源資忠之墓 同良の方十町を隔り 資忠の城趾に 一五六丁四方の

資忠ハ足立郡大宮壽能城主なり其先清和天皇九代

後胤後三位右京大夫兼兵庫頭賴政十九世の嫡流太田美濃守

三樂齋資正第四の男也天正十八年庚寅四月十八日相州小田原

に討死を因り其家臣北澤宮内なる者恩寵餘澤の深

思ひ私よこのところ小塚を営む元文三年戊午資忠六世の嫡孫

潮田氏資方再び北澤某よ命し墓碑を造らしむるの旨其

碑銘よ詳なり

江戸名所圖會天権之卷

終畢

